

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第73集

焼場遺跡B地点 五百司遺跡

平成5・6・7年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第73集

焼場遺跡B地点 五百司遺跡

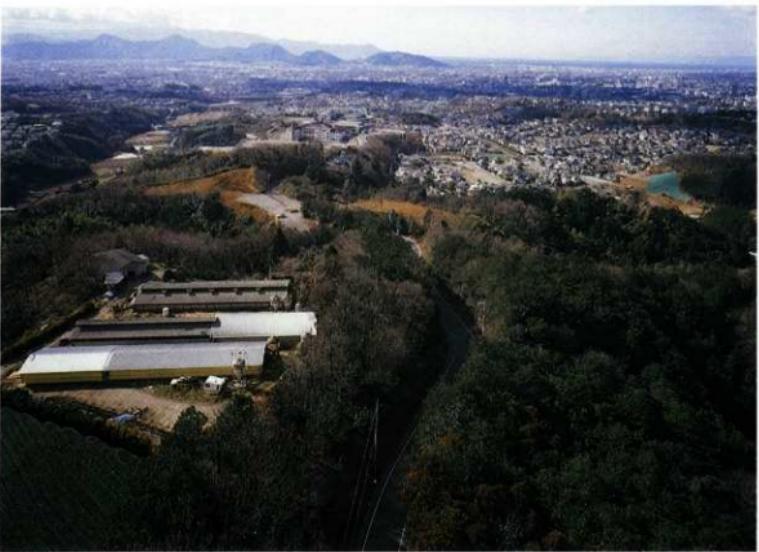
平成5・6・7年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

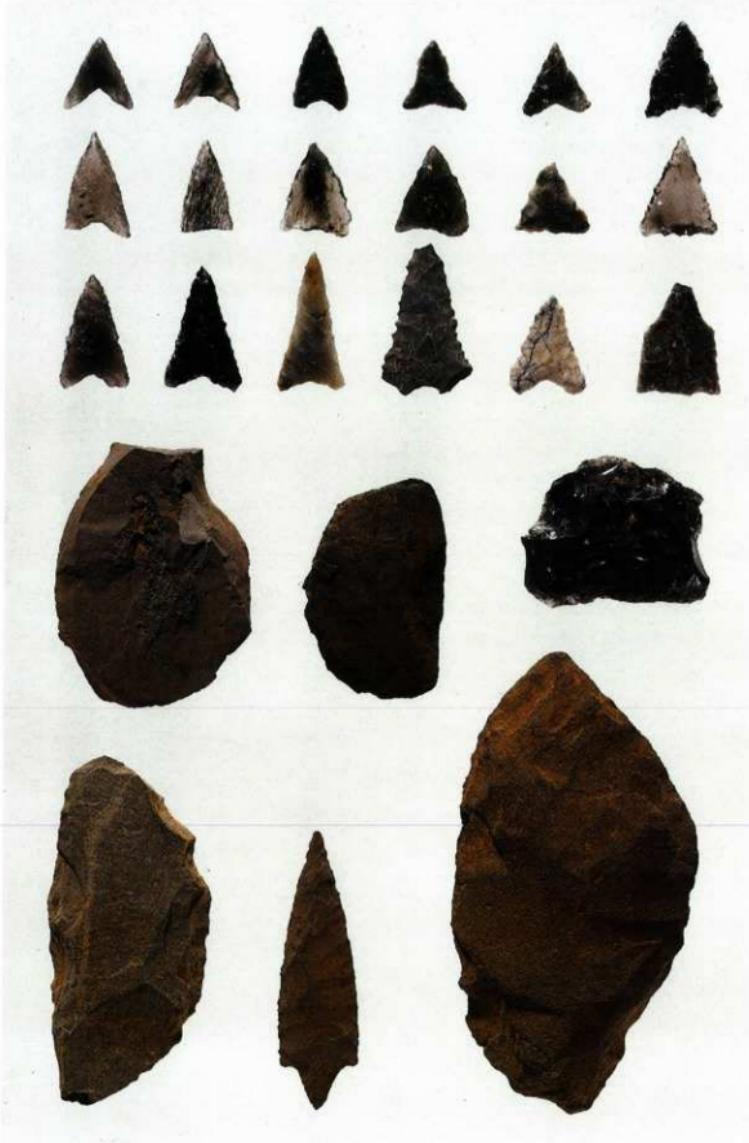
財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



焼場遺跡全景空中写真（手前がB地点）



焼場遺跡遠景（中央右側A地点・左側B地点 北より）



烧场遗址B地点出土石器

序

古来、箱根西麓は古くは約3万年前の後期旧石器時代から人跡を認め、旧石器時代から縄文時代前期にかけての埋蔵文化財包藏地として、全国有数を誇る。この他、中世の山中城跡、近世の東海道などが今に残され、歴史の舞台に様々ななかたちで登場してきた。

東海道の難所であった箱根路も今日、国道1号線の開通、拡幅によって、輸送の大動脈をなしているが、主要幹線道路の交通渋滞の緩和、地震などの災害の際の緊急避難道路の必要性が叫ばれている。こうした問題を解決する目的をもって新たに計画されたのが東駿河湾環状道路である。当遺跡はその道路建設に伴って調査されたものである。

焼場遺跡は、平成4年度にA地点、平成6・7年度にB地点を調査し、縄文時代早期から前期にかけての集落跡、中世と思われる道路状遺構が発見された。

このうち道路状遺構は側溝を伴い、計画的に敷設されたもので、いわゆる鎌倉古道の推定ルートに一致した。発掘調査で得られた箱根西麓での貴重な資料である。また千数百点におよぶ石器・土器は縄文時代の生活の痕跡をとどめたもので、箱根西麓の尾根での調査事例がまた一つ増えたことになる。

五百司遺跡は狭い調査区域であったが、縄文時代前期の良好な土器片が出土したこと、限られた時期の遺跡であることが判明し、縄文時代の人々の行動を考える上で新たな知見を得ることができた。

もとより、当研究所だけでは完結することはできず、発掘調査に当たり、建設省中部建設局沼津工事事務所をはじめ、三島市教育委員会にも大変お世話になった。記して感謝申し上げる次第である。また例年ない酷暑の中、調査に携わった調査員、補助員の労をねぎらいたい。

平成8年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は、三島市川原ヶ谷字五百司に所在する焼場遺跡B地点及び五百司遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成5・6・7年度東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 調査の体制は次のとおりである。

平成5年度（五百司遺跡）

所長 斎藤 忠 常務理事 鈴木 熱 調査研究部長 植松章八
調査研究三課長 佐野五十三 調査研究員 伊林修一

平成6年度（焼場遺跡B地点）

所長 斎藤 忠 常務理事 鈴木 熱 調査研究部長 小崎章男
調査研究四課長 橋本敬之 調査研究員 伊林修一 小川正夫

平成7年度（焼場遺跡B地点）

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭
調査研究部長 小崎章男 調査研究四課長 橋本敬之
調査研究員 伊林修一 後藤正人

- 4 現地調査は、五百司遺跡は平成6年2月から3月に実施し、焼場遺跡B地点は平成6年11月の試掘調査の結果を受けて、平成7年2月に開始し9月に終了した。引き続き資料整理及び報告書作成作業を平成8年3月まで実施した。
- 5 本書の執筆は伊林修一が当たった。遺物写真撮影は楠華堂（楠本真紀子）・湊嘉秀が行った。
- 6 黒耀石の原産地分析は国立沼津工業高等専門学校 望月明彦氏の指導のもと、整理担当者が測定・分析を行った。
- 7 遺物の実測の一部は角アルカに依託した。トレースは整理作業員が実施した。
- 8 発掘調査資料は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 9 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。
- 10 調査では次の方々、団体に御指導、御助言、御協力を賜った。厚くお礼申し上げる。
三島市教育委員会社会教育課　沼津市教育委員会　三島市立山田中学校
三島市立老人福祉センター　湯ノ上隆　鈴木敏中　長田 実（敬称略）

凡 例

本書の記載については以下の基準に従い、統一をはかった。

- 1 グリッドは昭和27年制定の国土調査法施工令の平面直角座標（国家座標）に基づき設定した。
- 2 それぞれの出土遺物は、10m方眼のグリッド毎に通し番号を付して取り上げた。
- 3 石器の実測は原則として第三角投影法に拠った。
- 4 出土遺物の実測図の縮尺は基本的には石器4/5、土器1/2としたが、任意に設定したものもある。それぞれの図面のスケールを参照されたい。
- 5 遺物の出土位置は一覧表に座標で明記した。グリッド原点である AO グリッドを (X・Y) = (0・0) とし、東西方向を Y 軸、南北方向を X 軸にとった。
- 6 本文、挿図中の表記は次の通りである。

層	名	石材	黒耀石原産地
Ku 栗色土層	S C II 第IIスコリア層	ob.黒耀石	HTJ畠宿
FB 富士黒土層	S C IV 第IVスコリア層	CH.チャート	KMT上多賀
YLU 休場層上層	S C V 第Vスコリア層	And.安山岩	KSW柏崎
YLM 休場層中層	B B III 第III黒色帶	Gr.凝灰岩	KRM霧ヶ峯系
YLL 休場層下層	S C III s1 第IIIスコリア層	Sh.頁岩	TTS蓼科系
BB0 休場層直下黒色帶		Scoria1	WAD和田岬系
SC I 第Iスコリア層	S C III b1 第IIIスコリア層	Bas.玄武岩	KOZ神津島系
BB I 第I黒色帶		黒色帶1	HKNA箱根A
NL ニセローム	S C III S4 第IIIスコリア層		KJY鍛冶屋
BB II 第II黒色帶		Scoria4	

遺物名	記号	遺物名	記号	備考
石斧	■	土器	×	
ピエス（楔形石器）	◆	有舌尖頭器	↑	
石鑓	▲	凹石	凹	
削器	★	石皿	●	
剥片・チップ等	●	尖頭状削器	◎	
磨石	S			
敲石	T			
凹石	K			

用途が重なっている場合は、両方の記号を併記した。

目 次

巻頭写真

序

例 言

凡 例

I 焼場遺跡B地点

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の概要	6
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	6
第2節 基本土層	12
第3節 遺跡の土層堆積状況	14
第4節 遺構の概要	14
第Ⅲ章 表土中で検出された遺構	18
第1節 坎状遺構	18
第2節 道路状遺構	19
第Ⅳ章 富士黒土層で検出された遺構と遺物	28
第1節 概 要	28
第2節 遺 構	28
第3節 遺 物	37
第4節 黒耀石原産地同定分析	126
第Ⅴ章 休場層で検出された遺構と遺物	133
第Ⅵ章 調査の成果と課題	140

II 五百司遺跡

はじめに	143
第Ⅰ章 調査の経過	143
第Ⅱ章 遺跡の概要	146
第Ⅲ章 富士黒土層で検出された遺構と遺物	147
第Ⅳ章 調査の成果と課題	151

写真図版

参加者一覧

報告書抄録

挿図目次

<焼場B地点>	
第1図 焼場遺跡A・B地点グリッド配置図	5
第2図 周辺遺跡地図1 (1/25,000)	9
第3図 周辺遺跡地図2 (1/10,000)	10
第4図 焼場遺跡A・B地点	
周辺地形図 (1/1,000)	11
第5図 土層堆積図 (1/160)	15
第6図 遺構変遷図 (1/1,000)	17
第7図 敷状遺構実測図 (1/40)	18
第8図 中世東海道路線図(仮称) (1/50,000)	22
第9図 道路状遺構全体図1 (1/400)	23
第10図 道路状遺構全体図2 (1/100)	25
第11図 A・B地点	
道路状遺構相關図 (1/500)	27
第12図 FB層遺構全体図 (1/400)	29
第13図 土坑実測図 (1/20)	32
第14図 焼土坑実測図 (1/20)	33
第15図 集石土坑実測図	34
第16図 倒木痕実測図	36
第17図 土器実測図1	51
第18図 土器実測図2	52
第19図 土器実測図3	53
第20図 土器実測図4	54
第21図 土器実測図5	55
第22図 土器実測図6	56
第23図 土器実測図7	57
第24図 土器実測図8	58
第25図 土器実測図9	59
第26図 土器実測図10	60
第27図 土器実測図11	61
第28図 H-18グリッド遺物出土状況図	62
第29図 H-19グリッド遺物出土状況図	63
第30図 H-20グリッド遺物出土状況図	64
第31図 G-20グリッド遺物出土状況図	65
第32図 G-21グリッド遺物出土状況図	66
第33図 H-21グリッド遺物出土状況図	67
第34図 F-22グリッド遺物出土状況図	68
第35図 G-22グリッド遺物出土状況図	69
第36図 H-22グリッド遺物出土状況図	70
第37図 F-23グリッド遺物出土状況図	71
第38図 G-23グリッド遺物出土状況図	72
第39図 H-23グリッド遺物出土状況図	73
第40図 F-24グリッド遺物出土状況図	74
第41図 G-24グリッド遺物出土状況図	75
第42図 H-24グリッド遺物出土状況図	76
第43図 F-25グリッド遺物出土状況図	77
第44図 G-25グリッド遺物出土状況図	78
第45図 H-25グリッド遺物出土状況図	79
第46図 E-26グリッド遺物出土状況図	80
第47図 F-26グリッド遺物出土状況図	81
第48図 G-26グリッド遺物出土状況図	82
第49図 H-26グリッド遺物出土状況図	83
第50図 E-27グリッド遺物出土状況図	84
第51図 F-27グリッド遺物出土状況図	85
第52図 G-27グリッド遺物出土状況図	86
第53図 H-27グリッド遺物出土状況図	87
第54図 石器実測図1	93
第55図 石器実測図2	94
第56図 石器実測図3	95
第57図 石器実測図4	96
第58図 石器実測図5	97
第59図 石器実測図6	98
第60図 石器実測図7	99
第61図 石器実測図8	100
第62図 石器実測図9	101
第63図 石器実測図10	102
第64図 石器実測図11	103
第65図 石器実測図12	104
第66図 石器実測図13	105
第67図 石器実測図14	106
第68図 石器実測図15	107
第69図 石器実測図16	108
第70図 石器実測図17	109
第71図 石器実測図18	110
第72図 石器実測図19	111
第73図 石器実測図20	112

第74図	石器実測図21	113	第88図	黒耀石原産地別分布	129
第75図	石器実測図22	114	第89図	YL層遺構・遺物全体図	135
第76図	石器実測図23	115	第90図	石器実測図34	137
第77図	石器実測図24	116	第91図	石器実測図35	138
第78図	石器実測図25	117	第92図	土坑・焼土坑実測図	139
第79図	石器実測図26	118	<五百司遺跡>		
第80図	石器実測図27	119	第93図	グリッド配置図	144
第81図	石器実測図28	120	第94図	基本土層図	144
第82図	石器実測図29	121	第95図	焼場遺跡B地点・五百司遺跡	
第83図	石器実測図30	122		周辺地形図	145
第84図	石器実測図31	123	第96図	土器実測図	147
第85図	石器実測図32	124	第97図	BB II層縄群出土状況図	148
第86図	石器実測図33	125	第98図	遺構・遺物検出状況図	149
第87図	遺跡内出土黒耀石	128			

挿表目次

第1表	作業工程表	4	第4表	石器観察表	90
第2表	周辺遺跡一覧表	8	第5表	黒耀石観察表	130
第3表	土器観察表	44			

写真図版目次

写真図版1	表土	畝状遺構検出状況	写真図版11	FB層	H-24グリッド遺物出土状況（北より）
写真図版2	表土	畝状遺構完掘状況	写真図版12	FB層	焼土坑半裁状況（南より）
写真図版3	表土	道路状遺構検出状況（北より）	写真図版13	FB層	土坑完掘状況（西より）
写真図版4	表土	溝状遺構完掘状況(1)（南より）	写真図版14	FB層	石器製作跡 碎片出土状況
写真図版5	表土	溝状遺構完掘状況(2)（北より）	写真図版15	FB層	集石遺構検出状況(南より)
写真図版6	表土	F-24グリッド道路状遺構検出状況	写真図版16	BB II層	G-23グリッド縄群出土状況（南より）
写真図版7	表土	F-24グリッド道路状遺構の硬質土を除去した状況 溝状遺構が検出された	写真図版17		調査完了状況（東より）
写真図版8	表土	F-22・23グリッド溝状遺構完掘状況(1)（南より）	写真図版18		五百司遺跡全景（東より）
写真図版9	表土	F-23グリッド溝状遺構完掘状況(2)（上空より）	写真図版19		諸縄式土器出土状況
写真図版10	FB層	G-24・25グリッド遺物出土状況（南より）	写真図版20		集縄遺構検出状況（東より）
			写真図版21		基本土層
			写真図版22		縄文式土器1
			写真図版23		縄文式土器2
			写真図版24		縄文式土器3

- 写真図版25 繩文式土器 4
写真図版26 石鎚 1 (表)
写真図版27 石鎚 1 (裏)
写真図版28 石鎚 2 (表)
写真図版29 石鎚 2 (裏)
写真図版30 ホルンフェルス
- 写真図版31 敗 石
写真図版32 磨 石
写真図版33 有舌尖頭器・ピエス
写真図版34 打製石斧・磨製石斧 (表)
写真図版35 打製石斧・磨製石斧 (裏)

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

静岡県東部は愛鷹山・箱根山麓と狩野川が形成した沖積平野および天城山系を有する伊豆半島からなる。城下町から商業都市へ発展した沼津市、三島大社の門前町、東海道の宿場町から伊豆への観光の窓口、さらに都心のベッドタウンとなった三島市が中核都市である。一帯は北に富士山、南に駿河湾を望み、国立公園の一角でもあり、東海道沿線として、三島に東海道新幹線駅、沼津に東名高速道路インターチェンジをもつ交通の要所である。関東と関西を結ぶ1号線、都心と沼津を結ぶ246号線、三島・沼津と伊豆を結ぶ414号・136号などの各国道が交差している。

こうした人と物の流れを大きく左右する幹線交通機関がこの地域に集中しているのである。観光と物流という両面から交通渋滞がこの地域の宿命と言えるだろう。夏の観光シーズンに限らず、交通情報から渋滞の文字が消えることがない。

物流・人の流れを滞らせる状態を解消する方策は数々とられてきた。国道1号線の拡幅や東名沼津インターチェンジと1号線とのジャンクション高架化や136号線バイパス開通、将来的に第2東名高速道路も計画されている。交通施策は一定の成果をあげていると言えよう。

その一貫として、東駿河湾環状道路は昭和62年に企画化された。沼津・三島市街を環状的に迂回し、通過交通の排除、地域内外交通の整理、環状道路周辺の開発を図ると同時に地震発生等非常時における緊急輸送路の役割も期待されている。まさに21世紀を展望した地域活性化の一翼を担うものである。路線は沼津市岡宮から愛鷹山麓、東名沼津インターチェンジを通過し、長泉町と沼津市を分ける黄瀬川を渡り、三島市内である箱根西麓から田方郡函南町平井に至る。その後、国道136号線バイパスの伊豆中央道に合流する。総延長15.0kmの片側2車線の広規格道路である。用地買収は平成元年度から開始された。

一方、愛鷹山・箱根山麓は戦後の考古学的発掘調査の成果から旧石器・縄文時代の遺跡が數多く存在することがわかっている。通過路線内の用地買収が完了した地点より埋蔵文化財包蔵地を各市町村教育委員会に照会し、順次調査回答を得、遺跡の有無を把握した。三島市教育委員会では、平成2年8月に調査依頼が行われ、9月10日から14日まで芦川学芸員によって31ヶ所の周知の遺跡および遺跡の可能性がある地点がリストアップされた。このうち五百司遺跡は14地点、焼場遺跡は15地点にあたり、周知の遺跡である。遺跡の可能性のある場所とは、遺跡地図には記載がないが、尾根上の南斜面などを対象としたものをいう。31ヶ所のうち、三島市北部から箱根に向かう国道1号線までの本報告書に記載された2遺跡を含む計5ヶ所の現地踏査を静岡県教育委員会・三島市教育委員会・当研究所の3者で行ったのは、平成3年の夏であった。すでに指導機関に県教育委員会文化課、実施機関に当研究所が決定していた。

五百司遺跡は平成5年度の調査対象となり、後期に調査の準備に入った。焼場遺跡は市道山田20号線により南北に分断されているが、遺跡地図では一つの遺跡とされている。従って南側をA地点、北側をB地点と呼称した。A地点はすでに平成4年度に本格的調査を行った。

B地点はA地点に遅れて買収が完了し、平成5年度から調査対象地となつたが、調査工程の立案の中で具体化したのは平成6年度に入ってからであった。第一次調査は平成6年11月に行い、遺構・遺物の検出をみたため、本格的調査の必要を建設省・文化課に報告した後、調査工程の検討に入った。道路工事工程の関係で平成6年度末から本調査を開始する合意を得たため、平成7年1月より準備、2月調査開始の運びとなった。

第2節 調査の経過

1 現地調査の方法

焼場遺跡は約8000m²の総面積を有するが、調査対象となったのはA地点が約3500m²、B地点が約2100m²である。

B地点の第1次調査（以下確認調査と呼称する）では、測量の基準を環状道路のセンター杭No.47と加茂インターの導入路のセンター杭No.8を見通したラインを採用した。日のあたらないじめじめした環境の中、建設省の打設した杭が腐食しており、残っていた杭を最大限利用した。確認調査は、調査区内の地形を考慮して、試掘坑を9ヶ所設定し、遺物・遺構の確認および土壌の堆積状況の確認を主な目的とした。

第2次調査（以下本格的調査と呼称する）では基準点はA地点の測量成果を生かし、国家座標による10m四方のグリッドを設定した。南北方向をアルファベット、東西を数字として組み合わせて南西側の点をグリッド呼称の基準とした。

確認調査の結果から、遺構・遺物の包含層はFB層にそのピークがあると考えられるため、FB層および後期旧石器時代の文化層とされる休場層全層を平面調査対象とし、それ以下を3m×3mのテストピット掘削調査に切り替えていく方針を立てた。なおテストピットの掘削深度は土層の堆積状況や工程を考え、第Ⅲスコリア層付近に設定することとした。

遺構・遺物の出土状況は、基本的に1/20の縮尺で作図をし、必要に応じて1/10などの縮尺も採用した。土層図も同様である。堆積状況の観察の目的をもった土層図は東西方向に20mおきに設定したが、南北方向は調査区中央のHライン1本にとどめた。

グリッド杭の打ちかえ、遺物出土地点の特定、地形測などには株式会社TOPCON製のエレクトロニックトータルステーション「グッピー GTS-5」およびデータコレクター「FC-5」を使用した。なおFC-5のデータは独自のフォーマットによるデータであるため、テキストデータとしてコンピュータに移植するシステムは、当研究所調査研究員笠原芳郎の手による「RSXYH Ver 1.0」を使用した。取り上げた遺物の地点はX（南→北）・Y（西→東）・H（標高）の3次元座標で表記し、縮尺1/20の図面に作図した後、台帳に登録した。

写真撮影には35mmサイズの小型カメラ3台およびプロニー版の6×7サイズの中型カメラ1台、三脚を使用し、場合に応じてローリングタワーを組立て、撮影に臨んだ。

使用したフィルムは35mmカラー、白黒、リバーサルの3種類およびプロニー版フィルム白黒、場合に応じてカラーを使用した。

2 資料整理の方法

焼場遺跡B地点は先に刊行されたA地点の調査報告書の成果を生かしつつ、その後に導入された整理方法も取り入れながら、2冊で一つの遺跡調査報告書となるように配慮した。本書は平成7年10月より平成8年3月までの整理作業の成果をまとめたものである。

新たな整理方法として、コンピュータによるデータ整理を積極的に取り入れた。それは前述した現地でのトータルステーションによる遺物取り上げシステムが完成したことによる。そのデータはコンピュータに移植され、一覧表やグラフ化、データベース化に効果を発揮した。なおデータ処理に使用したコンピュータおよびソフトウェアは次頁の通りである。

アップル社製 Macintosh

Microsoft 社製 Excel Ver 4.0 日本語版

Delta Point 社製 Delta Graph Pro Ver 3.1 日本語版

しかしながら、遺物の実測図作成は人の目や手が重要な要素である。図化に際しては石器の一部を長野県小諸市に所在する㈱アルカに実測を委託し、トレースを整理担当者で行った。石器の選別に関しては、整理担当調査研究員が認識した石器すべてについて、本報告書に記載してある。実測が終了した石器については実測図およびデータを記載したカードを作成し、写真撮影を実施したのち収納した。

カードには実測図・写真を貼付し、出土位置・図面番号・写真番号・登録番号・収納番号などが記載されており、将来データベース化して、公開の際の便宜を図る予定である。

また、黒耀石については製品および剥片類について、産地を特定すべく、国立沼津工業高等専門学校の望月明彦氏の指導の下で蛍光X線分析を実施し、その成果を記載することができた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

土器片は千数百点出土したが、形式等が判別できるものについて拓本をとり、一部は接合を試みた。時間的な制約もあり、すべての土器片について観察はできなかった。

3 現地調査の経過

(1) 第1次調査（確認調査）平成6年11月1日～平成6年11月21日

B地点における第一次調査は平成6年11月に行った。その際は、山林・植林の現況を改変せずに試掘坑を掘削した。計8つの試掘坑のうち、3つから表土直下のFB層より焼けた礫、土器片・黒耀石片が出土した。本調査の必要がある地点を早期に報告する必要性があったため、縄文時代の遺物が出土した試掘坑については下層の調査は行わずに、遺物の検出をみない試掘坑についてのみ、掘削を進めたが、休場層以下では遺物の検出はなかった。

工事工程の関係で平成6年度末から本調査を開始する合意を得たため、平成7年1月より準備、2月調査開始の運びとなった。

1月はプレハブ用地の設営、建設、駐車場の設営、水道の敷設に忙殺された。調査区内は樹木の伐採、測量を行い準備が終了した。

(2) 第2次調査（本格的調査）平成7年2月1日～平成7年9月30日

調査はまず調査区南側から開始した。確認調査の結果、表土から遺物の包含層であるFB層までが火変薄いため、重機等による掘削は不可能であった。そこで人力による表土除去から開始せざるを得なかつた。南側は篠竹が繁茂し松の巨木の根株もあり、労力を要した。最もA地点に近い調査区域であるため、表土下で検出された道路状遺構および溝状遺構の検出に期待を賭けながら、表土を丁寧に除去した。

平成6年度末の2ヶ月間で道路状遺構および溝状遺構を検出し、調査区ほぼ中央の23グリッドラインまでの縄文層の調査が進み、順調な進展をみせた。G-23グリッドで石器製作跡を発見し、土器片や焼けた礫も出土し始め、縄文時代の遺物の包含層の遺物量の豊富さが予想できた。

平成7年度は4月10日から調査を再開し、新たな調査員を加え、発掘補助員の増員を計った。遺跡の中心部と考えられる平坦部は檜の植林がされていた場所で計200本近い根株をドレンを傷つけずに除去するため、発掘補助員全員に鋸や剪定鉄を携帯させ、さらにチェーンソーを導入し、作業の能率化を図った。

そうした発掘資材の充実が効を奏し、平坦部でのFB層の検出の結果、土器片千数百点、石器（石材を含む）約千点、その他多量の礫が出土し、その尖測・取り上げにトータル・ステーションを使用し、地点の特定に効力を発揮した。

FB層の地形測量等を順次終了した箇所から、3m四方のテストピットを掘削し、休場層以下の旧石器時代遺物包含層の調査を例年ない猛暑の中で続行した。

遺構・遺物の検出は乏しかったが、包含範囲の調査を終了させながら、現地撤収の作業を進め、埋め戻し作業が終了した頃には秋風が冷たく感じられ、落ち葉が舞う時期になっていた。

第1表 作業工程表

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平成6年										確認調査準備	確認調査	確認調査 整理作業
平成7年	本格的調査準備	道路状況調査		FB層造構・遺物検出作業			休場層以下調査		撤収作業		本格的調査整理作業	
平成8年	本格的調査整理作業											



簡易やり方測量による遺物出土状況実測



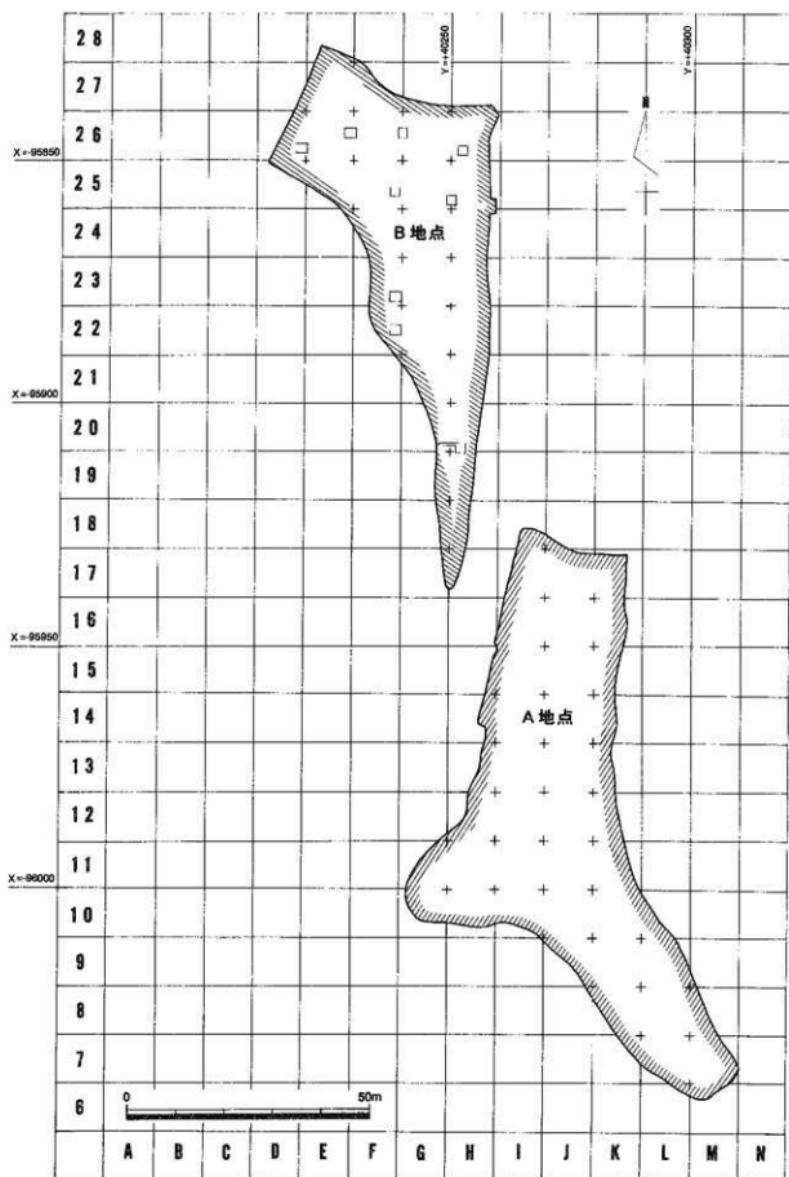
現状遺構覆土除去作業



根の抜根作業



ローリングタワーによる遺構写真撮影



第1図 焼場遺跡A・B地点グリッド配置図

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

三島市は水の都として、つとに有名であった。名水百選に指定されている柿田川湧水は全国的に知られている。この湧水は富士山溶岩流の地下を百年かけてたどり着くと言われ、市民憩いの場である榮寿園はその溶岩流の上に立地する。また愛鷹山を前景に富士山を望み、東に箱根山を頂くこうした自然環境を形成したのはいかなる理由によるものなのだろうか。

三島市の地勢は、市街地南側から田方平野につながる狩野川が形成した沖積平野部。富士山を起源とする今から約14000年前に流下した三島溶岩流台地。この台地は三島市街地北部から裾野市にかけて広がる。そして当遺跡が立地する箱根山西麓に分けられる。前述した湧水は溶岩流の南側より湧き、御殿川、境川等の小河川となり、沖積平野を南流し狩野川に合流する。一方、箱根山より西流する小河川も南流しながら、大場川やがて狩野川に収斂される。1級河川である狩野川は伊豆半島ほぼ中央の天城山系を水源とし、田方平野を北流しながら駿河湾へと注ぐ。太平洋側の規模の大きい河川の中では唯一北流する河川である。

箱根山の山容は緩い裾野をひいた古期外輪山、ぽっかり口を開けた直径10kmあまりの外側のカルデラ、二子山の急なドームの右下にある屏風山の平らな溶岩台地（新期外輪山）から構成される。箱根山は約50万年前に活動が始まった。富士山に比べ、桁違いに1回の噴火によるテフラの噴出量が多く、ときには10¹²m³以上に達する噴火を繰り返し、大型の成層火山に成長した。現在の山容から推定で約2700mの高さがあったと言われている。25万年かけて成長した火山は突然吹き飛ばされる。体積にして約130キロという膨大な山塊、火山噴出物を生み出した。こうして古期外輪山が形成された。いまの金時山はもとは中腹であったことが判る。吹き飛ばされた後のカルデラは浸食により規模が拡大していく。一方、厚い溶岩流は高温のため、流动性が高く、カルデラを埋めながら火山体を作り上げた。約15万年前に箱根東部を流れる早川によって浸食を受けた古期外輪山に新たな頂ができる新期外輪山となる。

約5万年前より中央に1つの成層火山（神山）と6つの溶岩ドームからなる火口丘が出来上がる。それが今の駒ヶ岳や大湧谷である。

50万年かけて現在の山容を形成してきた箱根山であるが、火山のものとの斜面（火山原面）はほとんどみつからない。ところがよく見てみると、裾野市の北側（駿河診療所のあるところ）とか三島市街地の背後などには、浸食された外輪山のスロープとは不調和に、それより緩傾斜でしかも平坦面がよく残っている台地があるのに気づくだろう。これらは古い外輪山の噴出物からできているのではなく、新期外輪山のあとに噴出した大規模な火砕流の堆積物である厚い輝石層からできている。古期外輪山は富士山と同様に、大きく裾野を広げているが、河川は箱根山を浸食し、無数の谷を刻み複雑な地形を作り上げた。それが三島を水の都にした、もう一つの水源である。

一方、箱根西麓の縄文時代の遺跡の踏査は戦前から行われ、その数の多さが指摘されてきた。戦後高度経済成長の時期、三島市の人口増加に応じて住宅やゴルフ場の建設に伴う調査が行われるによんで、旧石器時代の遺跡の数も増加することとなった。調査の主体は三島市教育委員会、加藤学園考古学研究所であったが、東駿河湾震状道路建設に伴う調査が開始されてから、新たに当研究所が調査主体の一員に加わった。ここでは各調査主体者が報告をした遺跡について、焼場遺跡B地点調査に関連がある遺跡について概観をする。なお箱根西麓・愛鷹山麓の広域の遺跡の位置についてはA地点報告書に掲載している。併せて参照されたい。（遺跡の後の数字は図2の周辺遺跡地図の番号に対応）

焼場遺跡A地点（2）

A地点は平成4年度に当研究所で調査されたものである。現況が山林であったため、人力で抜根・表土除去を行なながら遺構・遺物の検出に努めた。その結果、表土より道路状遺構・溝状遺構、FB層より縄文時代早期から前期の遺物の散布および土坑・豊穴状遺構、倒木痕跡などの遺構が検出された。さらに旧石器時代ではYL層でナイフ形石器の出土をみ、BBⅡ層で頁岩ブロック、BBⅢ層に掘りこまれた陥し穴とみられる土坑が検出された。これは後述する初音ヶ原遺跡群で検出されたものと同様の遺構で箱根西麓では2例目となった。

十石洞遺跡（4）

焼場・五百司遺跡に一番近い周知の遺跡は平成元年に三島市教育委員会によって調査された十石洞遺跡である。経緯は市立山中中学校建設に伴う調査で、焼場遺跡の南東約100mに位置している。1・2・3区に分かれ、1区で縄文中期の土器片、2区で縄文早期の土器片、3区では早期から中期の土器片が出土しており、縄文時代を中心とした遺跡であることがわかる。他に平安・江戸時代の古鉢や陶器、旧石器時代の遺物も出土している。

遺構として特筆されるのは、縄文中期の敷石住居が3区から検出されていることである。1棟だけであることから、祭祀的施設の可能性が高い遺構である。

下原遺跡（5）

焼場遺跡の東南の尾根のはば同じ標高の台地に立地する遺跡である。契機は焼場遺跡と同様に東駿河湾環状道路に伴う調査である。後期旧石器時代末を中心とする遺跡で石器ブロックを17ヶ所検出している。他にBBⅢ層の時期に掘削されたと思われる土坑7基を検出しておらず、初音ヶ原遺跡群との関連が注目されている。縄文時代に関する遺構・遺物の検出量は少ないが、前期の住居跡を1棟検出している。炉跡・壁溝・柱穴を伴い、石匕などの遺物も出土している。

初音ヶ原遺跡群（7）

住宅および国道1号線インターチェンジ建設に伴って調査をされ、現在も継続中である。国道1号線でA・Bに分かれており、旧石器時代中心の遺跡である。小型のナイフ形石器を含む石器ブロックをYL層からBBⅡ層にかけて検出している。注目される遺構は直径約1m、深さ約2mのBBⅢ層で掘り込まれたとみられる土坑を17基発見したことである。箱根西麓での初検出例であり、統いて焼場遺跡A地点が続く。用途としては陥し穴という説が有力である。

初音ヶ原A遺跡 前島秀張他 1989年 初音ヶ原遺跡群Ⅲ 三島市教育委員会

乾草峠遺跡（11）

箱根西麓の北部、三島市と裾野市の市境の大場川の支流によって開析された丘陵先端部、標高186m付近に位置する。縄文時代早期から前期を中心とする遺跡で三島市教育委員会によって昭和55年に調査された。早期末の住居跡14棟、前期の住居跡1棟の他、土坑13基、炉穴1基が検出されている。周辺地域で当該時期の集落跡は調査事例がなく、今まで唯一の例である。

加茂ノ洞B遺跡（6）

東駿河湾環状道路建設に伴う遺跡で当研究所が平成6年度に調査した。焼場遺跡の北西の尾根の緩斜面に立地する。縄文早期から前期にかけての土器片が出土している。鶴ヶ島台式土器の口縁部などが検出されている。

遺跡の中心は後期旧石器時代はじめのBBⅢ層より掘削された土坑にあり、狭い範囲ながら17基の検出をみた。2列に大別され、その1列の土坑は密集しているのが特徴である。

八田原遺跡（10）

同じく東駿河湾環状道路建設に伴い、当研究所が現在発掘調査中の遺跡である。焼場遺跡より北西の

丘陵に位置する。縄文早期から前期の遺物の散布地であり、土器片・石器石材散布の状況は焼場遺跡に類似している。

砥石C遺跡（9）

焼場遺跡の北西側に西流する沢地川に開析された尾根上に位置し、標高は180mと焼場・五百司遺跡に比べやや高い。昭和62年に三島市教育委員会が調査した。尾根頂部の非常に狭い遺跡であるが、縄文時代前期諸磯b式土器を中心に縄文早期から中期の土器片が多量に出土した。

加茂向山遺跡（8）

焼場遺跡の北西側、同じ丘陵ではあるが、現在の加茂団地の谷を挟んでいる。三島市葬祭会館建設のため、平成3年三島市教育委員会によって調査された。面積700m²範囲に旧石器・縄文時代の遺構・遺物が検出された。このうち縄文時代の遺構は住居跡、土坑である。共伴する土器から縄文時代中期前半とみられている。

元山中遺跡（27）

平成2年、ゴルフ場のゲストハウス建設を契機に加藤学園考古学研究所が調査したものである。旧石器時代および縄文時代の遺物を検出しているが、遺構の中心は古道跡を発見したことである。遺跡の北側には山の神社があり、その脇に「推定平安鎌倉古道」の石碑が存在していることから、往事の姿を検出できるか期待されていた。果たして、現地表面から約1.9~1.5mの深さで検出することができたのである。断面は不整なU字形を呈し、底面は比較的平坦であった。道の幅は7.4~8.4mを計測し、雨水などの浸食による細い溝が観察できたと報告書は述べている。構造は一定の間隔で細い溝が見られ、道の浸食を防ぐために丸太を敷き並べたものと推定している。溝の傍らに小さな柱穴も見られ、丸太が移動しないように固定したものではないかとも述べられている。柵列状の施設の可能性も指摘している。遺跡の南方には関所があったと推定されることから、このように強固な構造をもった道であったことが推測される。遺物は平安時代から鎌倉時代にかけての土器・灰釉陶器などの容器類、唐錢や宋錢などで古道の利用年代と合致している。発掘調査における当該時期の道路状遺構の確認はこれが唯一である。

1993 小野真一 秋本真澄 元山中遺跡 加藤学園考古学研究所

第2表 周辺遺跡一覧表

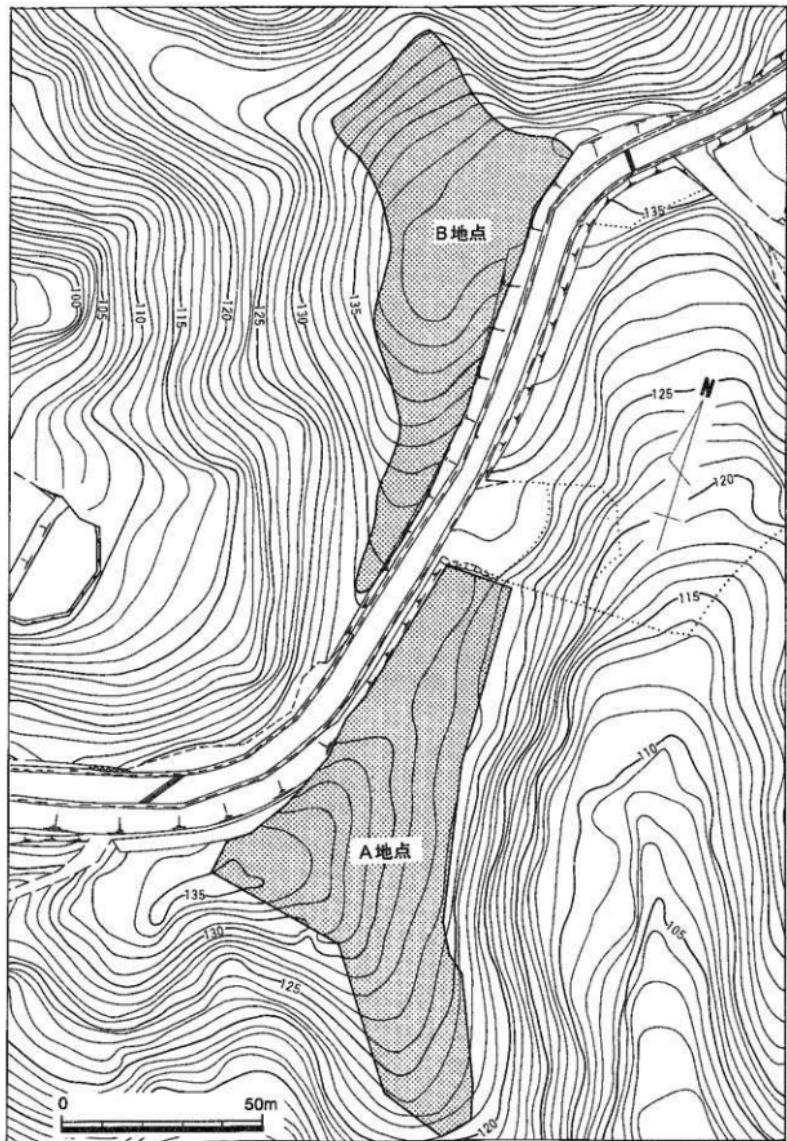
番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	焼場遺跡B地点	16	陣笠山H遺跡
2	焼場遺跡A地点	17	佐野片平山S遺跡
3	五百司遺跡	18	中村B遺跡
4	十石洞遺跡	19	佐野片平山B遺跡
5	下原遺跡	20	徳倉片平山J遺跡
6	加茂ノ洞B遺跡	21	中村C遺跡
7	初音ヶ原A遺跡第2地点	22	片平山遺跡
8	加茂・向山遺跡	23	ソノエンサレB遺跡
9	砥石C遺跡	24	徳倉片平山K遺跡
10	八田原遺跡	25	徳倉片平山L遺跡
11	乾草峠遺跡	26	徳倉片平山E遺跡
12	佐野片平山F遺跡	27	元山中遺跡
13	佐野片平山G遺跡	28	鎌ヶ沢E遺跡
14	陣笠山G遺跡	29	徳倉片平山D遺跡
15	佐野片平山J遺跡		



第2図 周辺遺跡地図1 (1/25,000)



第3図 周辺遺跡地図2 (1/10,000)



第4図 焼堀遺跡A・B地点周辺地形図 (1/1,000)

第2節 基本土層

概 説

調査区は標高約137.5m付近の平坦部を中心に、南部および西部に斜面をもつ。北部は急峻な谷部となっており、五百石遺跡を望むことができる。また東は焼場遺跡A地点に連続するが、市道山田20号線に寸断されており、正確な地形把握は困難であるが、浅い谷を形成しながらA地点に連続すると思われる。以上のような地形把握の上、東西の土層堆積状況が把握できると考え、基本土層を調査区ほぼ中央に求めた。また南北方向の堆積状況を把握するため、調査区ほぼ中央を南北に貫くことができるHラインにも求めた。その結果、標準上層をその2地点で観察し、相違点を整理し標準土層を作成した。

基本的には愛鷹・箱根西麓における層準を採用しているが、一部に相違が生じている。A地点での基本層序とも若干の相違がある。

休場層中層を中心とした石器ブロック及び散布状況は南側では確認できない。層位自体はかろうじて基本を保持しているものの、崩落が起きており、ニセロームがブロック状であったり、SCⅢが表土直下に露出していたり、安定はしていない。BBⅠの黒色の発達も弱く、斜面では発達しないことが示唆される。全体的に圧縮されている基本土層である。

表 土

厚さ約10~20cmで腐植物で構成される。色調は暗黒色である。場所によって2層に分層できる。

栗色土層 (Ku)

堆積している地点が西側斜面に限られる。色調は明茶色で白色のバミスを含み、やや脆弱である。

富士黒色土層 (FB)

本格的調査区における遺物包含層の中心である。A地点とは異なり、黒色の発達が弱く、特に中央部では下層の休場層と分層が困難な程である。最も休場層のローム質土とは同じ供給源であり、質も同等であることから、色調の違いが分層の目当てとなる層である。

休場層上層 (YLU)

調査区全域で見られるが、中央部は圧縮され厚さも約5cmである。南側の堆積もさほどではないが、西側は厚く堆積しており、20cmを計測する。明茶色土でスコリアなどの噴出物をほとんど含まない。特徴的な鹿子状の明褐色土ブロックは観察できない。

休場層中層 (YLM)

分布範囲は上層と同様である。箱根西麓では後期旧石器時代の遺物の包含層とされる。

上層に比べ若干暗色を呈し、赤色スコリア等を含むようになる。

休場層下層 (YLL)

硬質の黒色スコリアを多く含むようになり、暗色が強くなる。

休場層直下黒色帶 (BB 0)

本格的調査区の平面調査の最下面である。赤色スコリア・黒色スコリアを多量に含むようになる。

第Ⅰスコリア帶 (SC I)

富士山より供給された赤色スコリアである。分布範囲はまちまちで観察されない場所が多い。発泡がよい。

第Ⅰ黒色帶 (BB I)

黒褐色硬質スコリア質土で、直径0.2~0.5cmの橙色・黄色・黒色スコリアを含有する。C14年代測定によれば 18030 ± 450 年 BP の値が出ているが、層厚からかなりの時間幅をもつと考えられる。

ニセ・ローム層（NL）

実際には風化の進んだ暗褐色のスコリア層で、遠方からこの層をみるとローム層に見えることからこの名がつけられている。箱根西麓では2層に分層できる地点もある。始良・丹沢広域火山灰（AT）が中位からやや下で観察できる。

第Ⅱ黒色帶（BB II）

黒褐色スコリア質土で、直径0.1～0.5cmの橙色スコリアを含み、黄色・黒色スコリアも少量認められる。

第Ⅱスコリア層（SC II）

暗黒褐色スコリア層で、直径0.1～0.5cmの橙色スコリアからなる。愛鷹では比較的明瞭に視認できるが、箱根山麓ではブロック状に散在する程度で、上下層のBB II・III層の分層が困難である場合が多い。

第Ⅲ黒色帶（BB III）

黒褐色スコリア質土で、SC IIに類似する直径0.2～0.8cmの橙色スコリアを含む。箱根山麓で検出される陥穴状土坑の掘り込み面と推定される層である。

第Ⅲスコリア層（SC III）

この層より下部層位については愛鷹・箱根両山麓では層順に差違がみられる。SC III層は1m近い層厚をもつ。愛鷹では黒色帶が2層、箱根では1層観察でき、その下に非常に硬質な黄赤褐色スコリア層（SC III s 4）がブロック状に散在する。大規模な火山活動が起きたことを物語っている。愛鷹山麓ではこれより下層ではスコリアと黒色帶の互層によって第Ⅶ黒色帶まで確認されているが、箱根山麓では明瞭なスコリア層が確認できず、黒色帶の発達も弱く、全体的に圧縮された様子が窺える。その相違については検討中であるが、愛鷹山が富士火山に近く、スコリアを降下させたのに対し、軽量なロームが緩やかに降下し堆積した箱根山麓の地形的相違によるものという見解がある。

第3節 遺跡の土層堆積状況

調査区全域ほぼ基本土層どおりの堆積状況を示す。特に上部ローム層は休場層が上・中・下に分層することができた。BB II・III層は層準を示すが下部ロームについては層準がはっきりせず、調査区北側の標高が高い部分では地表下約1.5mでペアスコリアが検出された。標高が高い部分や斜度が大きい部分については崩落が中部ロームから激しく起こっている。

調査区西側ではさらに崩落が激しく、YL層の分層も難しく、ニセロームもほとんど検出されず、SC層がブロック状に検出されるのみであった。地形的には調査区西側から旭ヶ丘住宅地にかけて急斜面になっている。かわって東側では層位がはっきりしており、層厚も約20~30cmを計測する。

第4節 遺構の概要

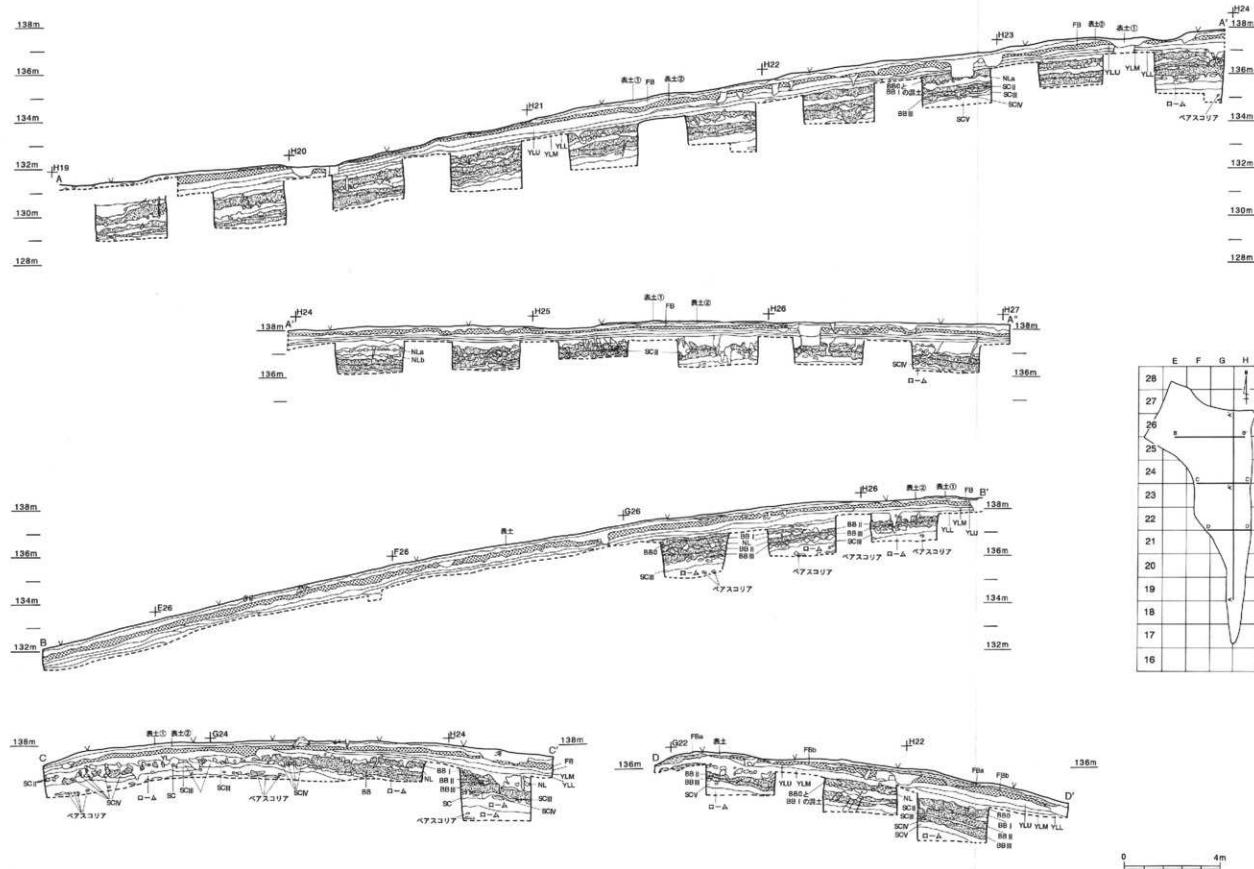
調査区内は樹齢40~50年の椿と松や雑木が林立していた。土地利用の変遷を知る上で、この椿林の樹齢から第二次大戦後に植林されたものであろう。林温氣を帯びた最上面の腐植土は落葉した葉、枯れ枝であり完全には分解をしていない。その直下に空気を含み脆弱な黒色土が堆積している。それを除去したところで北側の一部で、畝状遺構を検出している。分解が進んだ腐植土の直下、FB層に掘りこまれている。調査区南側では1・2層とも堆積が薄く、さらに道路状遺構が検出される。畝状遺構および道路状遺構は表土2層の中の遺構である。

表土2層の下部では縄文時代の土坑や倒木痕跡を含む遺物の包含層、さらに旧石器時代の層とされる休場層では遺構は検出できなかったが、黒色緻密安山岩のナイフ形石器、頁岩の石刃が検出されている。

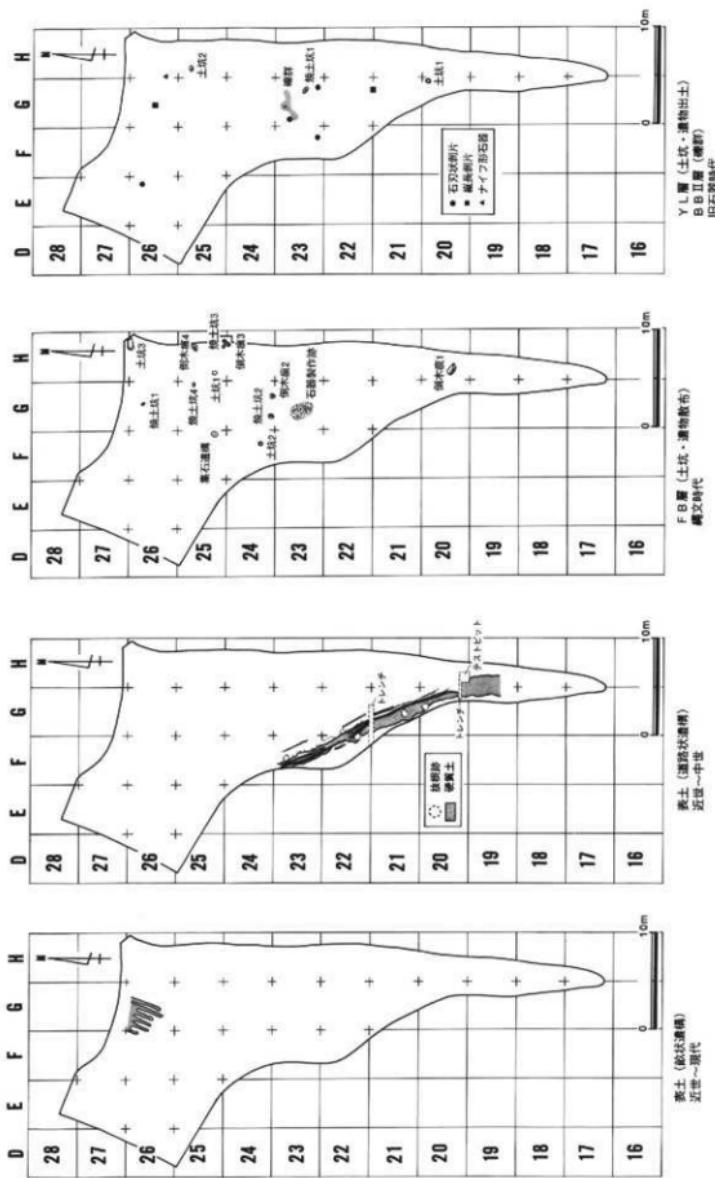
調査区中央やや南ではBB III層から礫群が検出されており、当遺跡の最も古い時代の文化層を示している。

焼湯遺跡B地点の文化層

表土中	畝状遺構
表土直下	道状遺構（溝状遺構） 中世から近世
FB層	遺物散布 縄文前期から早期
YL層直上	石器製作跡 縄文時代草創期？
YL層内	ナイフ形石器 石刃
BB II	礫群



第5図 土層堆積図 (1/160)



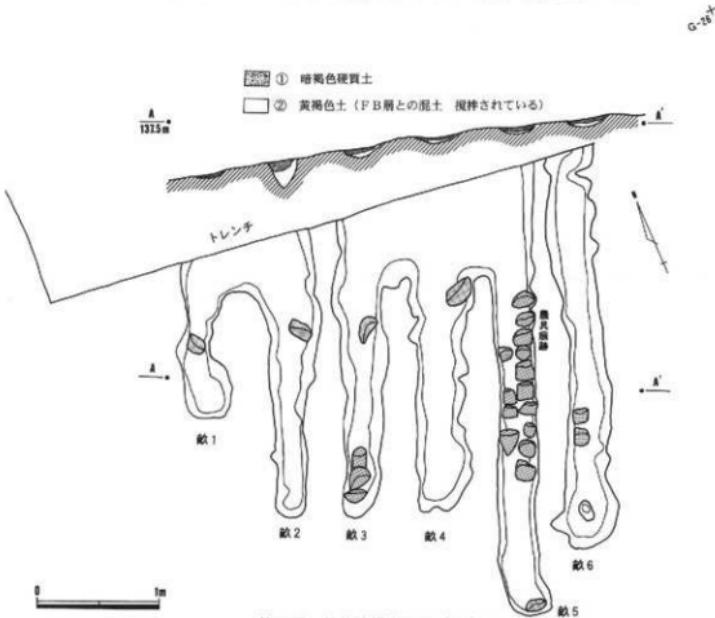
第6図 遺構変遷図 (1/1,000)

第Ⅲ章 表土中で検出された遺構

第1節 故状遺構

調査区最北のグリッドG-26で表土を除去し、FB層を検出している段階で意識された遺構である。覆土は暗褐色土で、下部でFB層の暗黄色土と混土となり搅拌された様子が窺える。従って検出された層位はFB層であるが、表土中の遺構である。北側の歯の分離は不可能であったが、南にいくに従い6本に分けられた。長さは最短で1.36m、最長で3.68m平均で2.64m、幅は28~40cmを計測する。深さが歯2がやや深く24cmだが、他は8cmで浅い歯であることがわかる。

樹齢から昭和20年の終戦後に植林されたものである植林の以前は畑作が行われていたと考えられるが、他のグリッドではFB層検出の段階で意識されておらず、調査区全域で展開されていたかどうかは不明である。表土が厚くなく、また残存していた歯が非常に浅いことから、この地域で生産されるダイコンやごぼうの根菜類の栽培ではないようである。同じく表土中で検出された後述する道路状遺構が中世から近世初頭まで使用され、廃絶されていると推定されることから、その後の時期つまり近世中頃から現代の大きな時期幅で捉えるより他はない。歯状遺構を詳細に観察すると、当時の農作技術を垣間見ることができる。幅16cmの農具痕跡とみられる列が歯5を中心検出できた。南から北へ向かいながら土を起したものと推測され、使用した農具は鍬とみられる。土地利用の変遷を考える上で、植林以前に畑作が行われていたことは、調査区内の土地利用の変遷を考える上で最初の検出となった。



第7図 歯状遺構実測図 (1/40)

第2節 道路状遺構

1 歴史的背景

古代の律令制の下での交通は奈良・京都が都であったため、畿内を中心に山陽・東山・東海・北陸・山陰・西海・南海道のいわゆる七道とよばれる幹線道路が国々の国府をつないで放射状に広がっていた。

奈良・京都より約240km東へ進んだ東海道の一画である当地域は北に愛鷹山・富士山、東に箱根山、南に天城山系をいただき、平野部とそれぞれの山の麓部からできている。狩野川が形成した沖積平野が今の市制でいえば沼津・三島南部の市街地、黄瀬川が形成した河岸段丘が長泉町・裾野市街地となる。古代から現代まで当地域の基幹道路は様々に変遷してきた。特に山越えは困難を極めた。静岡県教育委員会文化課編集の『静岡県歴史の道 東海道』では次のように記載されている。

「古代の東海道が箱根を越える道は足柄峠を越える足柄路である。富士と足高（愛鷹）両山の間を通る十里木越えの説もあるが、愛鷹南麓を通る根方道から長倉駅を経て北上し足柄峠に向う道であろう。延暦21年（802）、富士山の噴火により足柄路を閉じ、菖蒲途が開かれたというが、諸説あり明らかでない。翌年また足柄路に復したという。平安末期には駅制も乱れ、長倉（永蔵）駅も衰え、浮島沼も縮小して海岸沿いの浜道が開かれ、黄瀬川駅（宿）は足柄路の宿駅として栄え、鎌倉時代には箱根路の分歧点ともなって伊豆国府のある三島を通る箱根路（古道）の利用者も多くなつた。」

治承4年（1180）伊豆で挙兵した源頼朝は関東を中心に武士団を形成し、頭領の地位を確立したことから武士政権が誕生する。古代から中世へと移行するに伴い、政治の中心は鎌倉に移るのであるが、このことによって交通体系も大きく変化する。

寿永2年（1183）10月の宣旨によって朝敵の汚名を免じられた頼朝は、京都と鎌倉を往復する東海道の整備にとりかかる。

文治元年（1185）11月29日頼朝は次のような東海道の駅路の法を定めた。

（註釈）
今日、二品駅路の法を定めらる、此間の重事により、上洛の御使・雄色等、伊豆・駿河以西、近江国にいたるまで、權門庄々を論ぜず、伝馬を取りてこれを騎用すべし、且は到来の所において、其根を沙汰すべき由と云々、『吾妻鏡』これは、上洛の使者のために伊豆から近江までの東海道沿線の荘園から馬や食料を徴収することを定めたものである。背景には、頻繁な鎌倉と京都との往来があったことであろう。しかしながら沿道の御家人などから一時に徴収することよりも、恒常的な供給ができる宿駅体制をつくる必要があった。交通量が増大し、一定の安定を見れば、その街道には自然に宿泊施設が生まれてくる。その場所は、川の渡しや峠の下など地形によるものや、荘園の荘官の居所や市場などの発展したところなどがあった。頼朝の時代の東海道の宿駅は、こうしたものであったと思われる。『吾妻鏡』からこれを拾ってみると、東から腰越駅・大磯駅・酒匂宿（駅）・竹下・黄瀬川宿（駅）・蒲原駅・興津・駿河府中・手越駅・岡部宿・島田宿と続く。このうち大磯・酒匂は現在の神奈川県であり、黄瀬川は現在の静岡県に属する。竹下は現在の駿東郡小山町竹之下に比定されている。

さらに細かく県東部の中世における街道筋をみてみると、前掲書では以下のような路線を推定している。（図8）

原中宿一千本松原－車返－木瀬川（黄瀬川）－本宿－足柄路

—— 長泉町竹原－三島市西町若宮神社－伊豆国分寺－祓所神社－三島神社－願成寺－箱根西麓－元山中－箱根峠（海平）

この中で箱根西麓の台地を登る路線がまさに焼場遺跡調査区ということになる。鎌倉時代には伊豆山権現、箱根権現、三嶋明神を結ぶ道も開かれていたが、この新道であるか明らかでない。いわゆる頼朝の二社参り、三社参りがどのルートを通ったのかは判明していない。

箱根越えの道筋は時代と共に南遷しているという。即ち『三島市誌』によれば『伊豆志』を引用して、鎌倉後期（正応元年）に久明親王が將軍となって鎌倉へ下向するときに開かれた新道は山工神社（沼津）の前辺りから東行して、黄瀬川を渡り、八幡神社近くを通り伏見の諏訪神社の辺りから新宿北側を東行し、若宮神社、天神社脇を通り国分寺付近から桜小路（裏町通り）を抜けて祇所へ出て、三嶋神社前を廻り川原ヶ谷一市の山一山中新田を経て箱根峠へ上る旧東海道（江戸時代の官道）沿いの道筋を推量している。また（『伊豆志』にはこの新道の道筋と推量している）。また元山中の関所跡の調査や、『太平記』にいう、建武二年（1235）の箱根竹之下の戦いの「野七里、山七里云々」は元山中あたりの箱根古道の道筋をさしているが、駿町時代の『鎌倉大芦紙』にいう永享十年（1438）水飲の駁船（悪所）な地形での戦いは、この新道沿いの山中新田岱崎付近の水飲か、古道沿いの元山中付近の水飲か、また水飲の闘についても詳らかでない。

2 調査の経過

箱根西麓で調査した中で道路状遺構を検出している遺跡は今までに元山中遺跡1ヶ所だけである。関所跡と推定される場所で検出した道路状遺構の幅も6mを測るものである。

平成4年度、A地点を調査した際に表土より検出された硬質土の範囲はほぼ直線状になり、道路状遺構と認識した。硬質土を除去した段階で、2本の溝状遺構を検出し覆土に道状遺構の硬質土を含むことから、道状遺構に伴う溝であることも確認した。立地からこの道路状遺構を単なる山道と考えることもできるが、以下のような点から官道的なものではないかと推測した。

- (1) 区画溝を有することから、計画的に建設された道であること。
- (2) A地点では東側の溝2列を検出したが、ある程度の規模（幅2m以上）を持つ道であること。
- (3) 周辺から出土した陶器・瓦・煙管などから長期間にわたり使用され、硬質土の分布範囲から往来も頻繁であったと推測されること。

遺物から年代を探ってみると、最も古い遺物は平安時代後期と考えられる布目瓦や灰釉陶器である。他に11～12世紀の陶磁器も出土しているが、量的に多いのは江戸時代初期の瀬戸窯の陶器である。このことから、道路状遺構の年代を平安後期～江戸初期に与えた。

B地点はA地点の北西部に位置し、市道山山20号線で分断されている。現在の市道は谷部の中腹を削りこんで建設されており、A地点の道状遺構の延長は谷戸部へ向かってしまうことから地形の上から連続した遺跡であると推測できるB地点に延びている可能性が高かった。

B地点の標高はA地点側の低いところで130m、緩やかな傾斜を持ちながら尾根の頂部である面積約400m²の平坦部へ続く、標高は約138mである。

A地点の道状遺構は表土下僅か10cm足らずの層位から検出した。B地点の現況が檜林と雜木林であるため、A地点同様に表土除去および拔根は人力で行うことになった。

果たして、調査区南側の腐植土を除去すると、硬質土が検出された。あわせてFB層と思われる軟質ローム質土に掘られた一条の溝も観察できた。

3 遺構

道路状遺構を構成するのは硬質土の部分と溝である。硬質土は地表下約20cmのところで、幅約2～4m、長さ約50mに渡って検出されたもので、厚さは約5cmを計測する。硬質土範囲以外の場所はFB層が検出された。脆弱なローム質土であることから、硬質土範囲は比較的容易に判別できるものであった。硬質土は表土中の腐植土が踏み固められたものようで、淡い黒色を呈する。

溝状遺構はところどころで寸断され検出不可能な部分もあったが、2列であると推測される。1列目

は道の内側に掘削されており、覆土は空気を多く含む脆弱な黒色ローム質土である。分解された腐植質を多く含むことから、道が機能していた段階で比較的早く、埋没したのではないかと推測される。規模は幅0.5m、深さ0.3mを計測する。長さは検出できた範囲で約20mである。

もう1列は道状遺構の外側に掘削されたもので、幅0.4m深さ0.2mを計測する。こちらの覆土は道状遺構の硬質土がブロック状に観察される。あたかも道が廃絶されるのを辿るように埋没していったものと推測される。従って、2列の溝は覆土の観察状況から時期差が認められる。当初は内側の溝の幅員をもつ道路であったものが、自然に拡張されていき、内側の溝は埋まり、その後、拡張され再度外側の溝が掘られたと推測している。

道路状遺構の幅は、検出範囲から推測したものであるが、F-23グリッドでは溝状遺構が3本検出できた。東側に1本、西側に2本である。上記の溝の時期差は西側の2本に認められる。東側の溝の覆土と西側内側の溝の覆土が共通していることから、当初の道路状遺構の道幅を約2mと推測している。その後、拡張し道幅約3mとなったのではないだろうか。

近世の石疊を持つ箱根旧街道は道幅約3.6mであることが、発掘調査等で確認されている。馬や戦列がおおよそ1~2列縱隊でここを行進したとすればぎりぎりの幅といえるだろう。

鎌倉幕府の交通政策の中で、道路の維持・管理について正確には記録に残されていないようであるが、踏み固められた規模からみて、往来は盛んであったことが推測される。また、箱根西麓の中腹であることから、草木の繁茂などによって往来が困難にならないよう維持に努めたことも考えられる。おそらくは近隣の農民などが駆り出され、溝の修復や伐採が行われ、朝廷からの使いのを迎えたことだろう。

溝の用途は正確には不明であるが、以下のようないくつかの用途が推測できる。第1点は道の範囲を画すること、この場合道の両側に溝があると考えられる。第2点は道に草木の繁茂が及ぼないようにすること、この場合は必ずしも道の両側にあるとは限らない。第3点は一般的であるが、排水の目的をもった側溝の用途である。以上3点の用途を総合的に持ち合わせた溝といってよいであろう。

A・B両地点で検出した道路状遺構の連続を見てみたい。両地点の検出レベルがほぼ同層位であること、硬質土範囲とその直下に溝状遺構を伴う点も共通していることから連続した遺構であると判断した。A地点では平坦部から独立丘と南斜面に分かれるあたりまで検出されている。硬質土の分布範囲からその二方向に分かれていると思われるが、南斜面方向は検出レベルがやや高いことから山田川岸へ降りていくためのもので、時代が下がった枝道であり、本道は独立丘方向にあると報告者は推測している。因みにその延長上には江戸中期を最古とする馬頭觀音群があり、地元で大切に保存をしている。この道路状遺構に何らかの関連があるのだろうか。

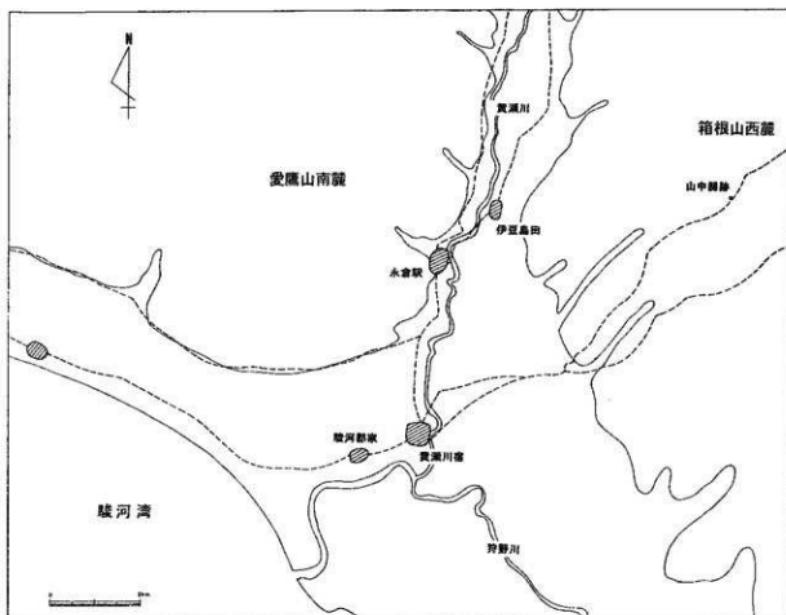
さてA地点とB地点は市道によって分断されていることは再三述べた通りである。この幅約10mの欠落部分を検出した両地点の遺構から復元してみると、クランクに曲がることが判る。検出した全範囲の中では比較的きつい坂に至る前に曲がるということは、できるだけ平坦部を通行し、傾斜の緩やかな部分を通行するためのものだと思われる。

道路状遺構は尾根の西側谷部に近い部分を北行し、F-23グリッドでより谷に近づき調査区から外れてしまう。延長から考えると、一旦、現在の加茂団地方向の尾根を下っていくように推測できるが、詳細は不明である。

4 遺物

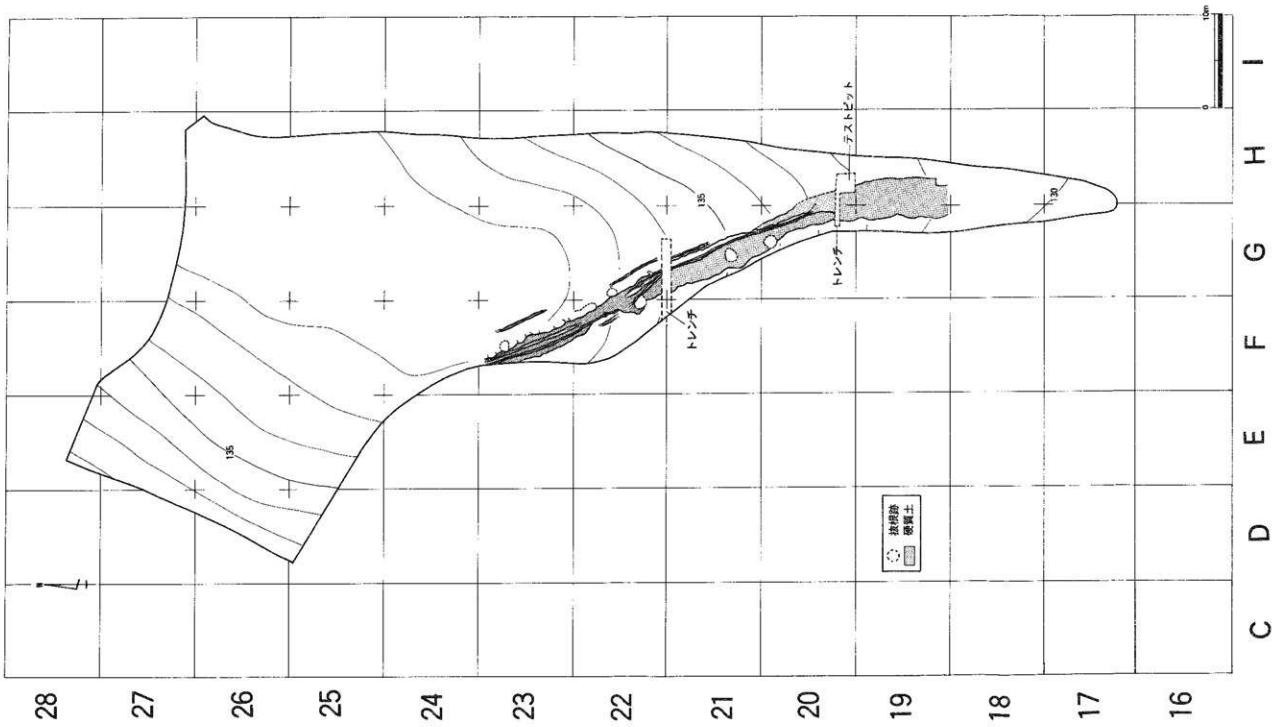
表土中からは様々な陶器類が出土しているが、A地点と比べてみると、遺構に伴うと思われる遺物は極端に少ない。僅かに17世紀の瀬戸の碗片が出土しているのみである。他に寛永通宝が出土しているが、出土地点が道路状遺構の推定路線とは外れており、共伴関係は不明である。陶器類は明治以後のものが

多く、平坦部で主に検出されているといった状況から、後世の畑作などによる搅乱、遺構の中心が斜面にあることから崩落の可能性も指摘できる。従ってB地点における道路状遺構は、その検出状況や連續性からA地点の推定年代を踏襲することとした。

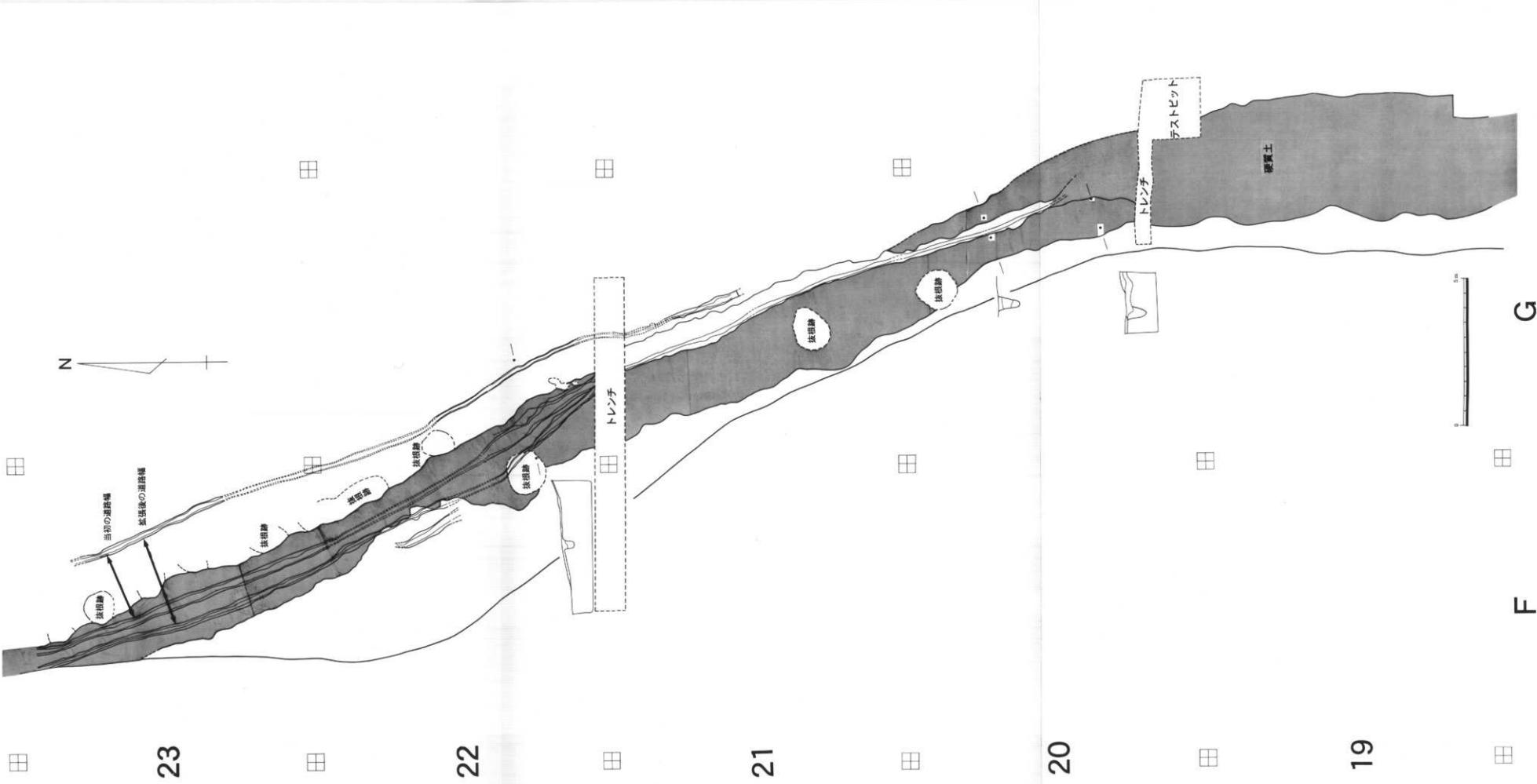


第8図 中世東海道路線図（仮称）(1/50,000)

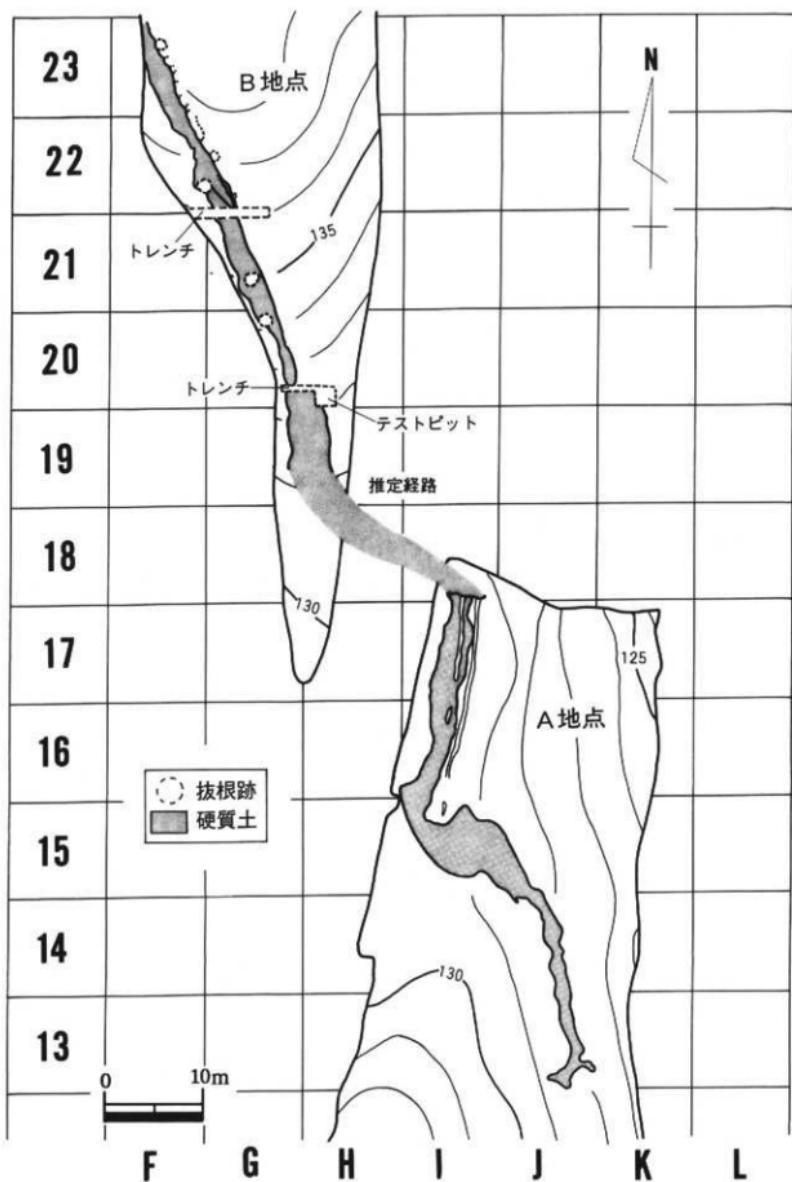
静岡県教育委員会文化課編集『静岡県歴史の道 東海道』より



第9図 道路状造構全体図 1 (1/400)



第10図 道路状遺構全体図2 (1/100)



第11図 A・B地点道路状遺構相關図 (1/500)

第IV章 富士黒土層で検出された遺構と遺物

第1節 概 要

箱根西麓を流れる河川によって深く浸食された谷に挟まれた台地は大小様々な規模を持つ。当遺跡は南東に山田川が開析した谷があり、川までは標高差約60mの急峻な谷である。南西は加茂団地が造成されているが、それに至る谷部も急峻である。遺跡の立地する付近で台地は一時的に陥くなり、南東部に三島市教育委員会が調査した「石洞遺跡」があり、その付近から台地がやや拡大し、旭ヶ丘・加茂の住宅地は緩やかな傾斜を保ちながら、標高約30mで沖積平野に達する。

こうした地理的環境はいつ誕生したのだろうか。

調査区中央部は面積約600m²の平坦部を形成しているが、それは休場層の大量な降灰、それ以後の火山灰の供給の減少により安定してきたとみられ、東側の傾斜も時期が新しくなるにつれてゆるくなっている。そうした自然環境に左右されたためか、旧石器時代の人の痕跡は乏しいが、縄文時代に入ると、逆倒的に活動が活発になってくる。出土した遺物は草創期とみられる有舌尖頭器を最初に、早期～前期の土器とそれに伴うとみられる多種の石器、焼けた礫などの遺物、焼土坑や貯蔵穴と見られる土坑などの遺構、倒木痕が検出されている。若干量ではあるが中期の勝坂式土器も出土しているが、その遺物を境に後期・晩期の遺物は全く出土していない。従って当遺跡の縄文時代の中心は早期から前期にある。しかしながらFB層中の2時期の分層は遺物の出土状態からは判別が困難である。そのため、同一層中の遺物の出土状況をグリッド別に網羅する中で、分析を試みたい。

第2節 遺 構

土 坑（第13図）

調査区全域で検出された土坑は11基で覆土によって焼けた土壤のものとプライマリーなどの2種類に大別できる。前者は炉などに使用され、下部が赤褐色に変色しており、固くなっていることから、炉に使用され廃棄されたものと考えられる。一方の土坑は下部に底面の土壤である休場層の黄色ローム質土との混土が存在するが、覆土の中心はFB層土壤である。土坑は自然堆積で埋没したものとみられる。用途は不明であるが、貯蔵穴の可能性が高いであろう。集縛の下部に浅い掘り方をもつ土坑も検出されている。A地点では25基の土坑が検出されているが、B地点は遺物の出土量に比べ遺構数が少ないようと思われる。

土坑1（第13図-1）

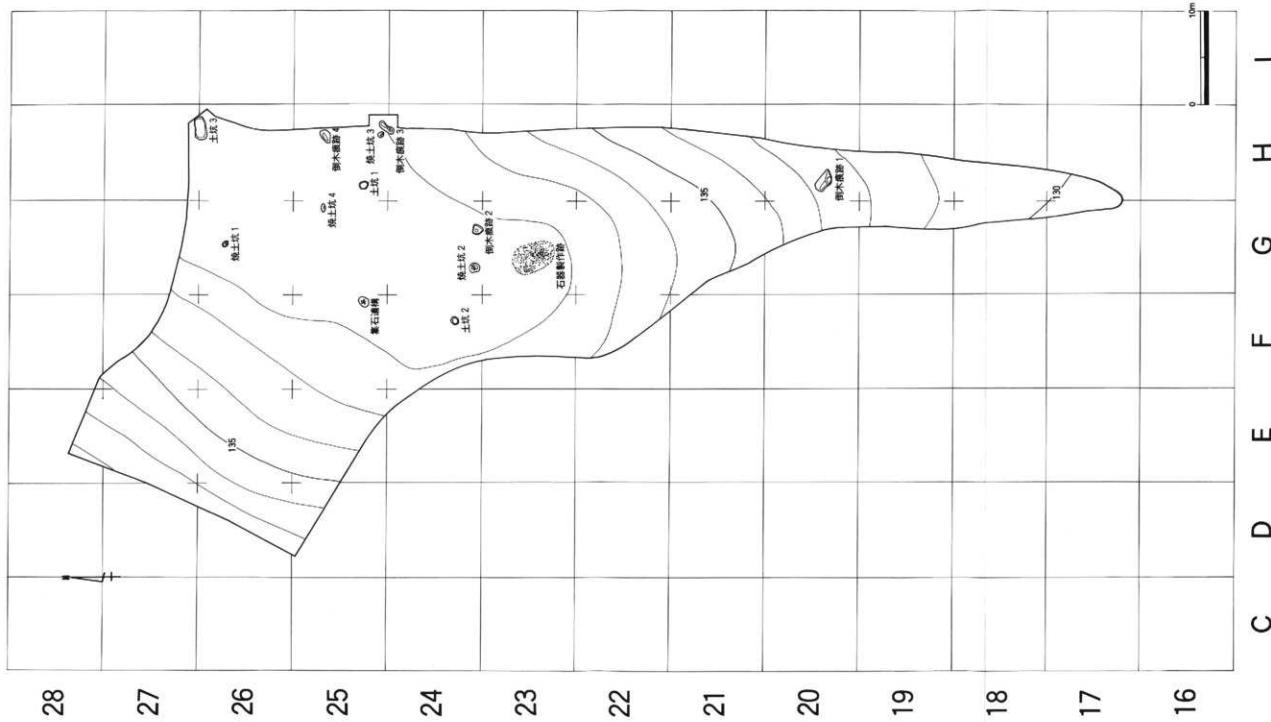
H-25グリッドで検出された。プランはほぼ円形を描き、直径約1m、深さ約46cmを計測する。覆土下部でYL層とFB層の混土、上層にFB層が見られる。

土坑2（第13図-2）

F-24グリッドで検出された。プランはほぼ円形を描き、直径約1m、深さ約35cmを計測する。FB層調査の段階では検出されず、下層のBB0の段階で認識できた土坑であるため、検出レベルが低いが、中に縛とともに二次焼成を受けたと思われる土器が納められていたことから、縄文時代の土坑と認定した。

土坑3（第13図-3）

調査区北端のH-27グリッドで検出された。平面は椭円形を呈し、長辺約2.5m短辺約1.2m、深さ約20cmの規模を測る。調査区内の他の土坑と比べ、大型で浅い特徴をもつ。覆土もFB層相当の土壤が少な



第12図 FB層構造全体図 (1/400)

いことから、比較的新しい土坑であると思われる。

焼土坑1（第14図-1）

G-26グリッドで検出された。平面は楕円形を呈し、長辺約76cm、短辺約54cm、深さ20cmを測る。

焼土坑2（第14図-2）

G-24グリッドで検出された。平面は楕円形を呈し、長辺約88cm、短辺約58cm、深さ約20cmを測る。覆土全体に焼土が存在しているが比較的浅く、炉として使用したとしても期間は短いとみられ中層は全部が焼土で炭も含まれていた。

焼土坑3（第14図-3）

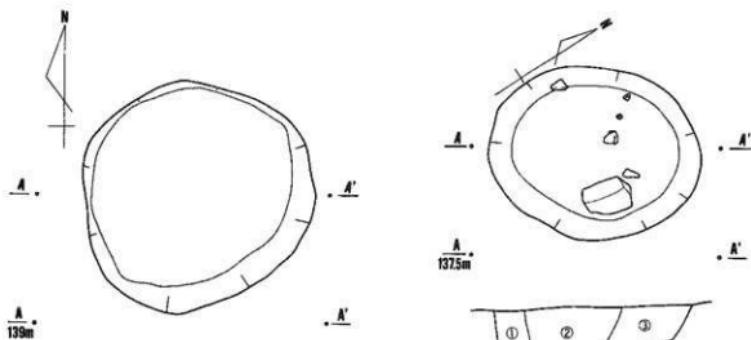
H-25グリッドで検出された。北西方向へ傾斜した斜面に存在し、平面は楕円形を呈し、短辺約56cm、深さ約24cmを測る。

焼土坑4（第14図-4）

グリッドG-25で検出された。倒木痕跡とみられる遺構から20cmと離れておらず、関連した遺構とも考えられる。

集石土坑

本土坑はF-25グリッドに位置する。検出面は休耕層上層上面で、開口部は長軸1.1m、短軸0.9mの隅が丸い方形を呈する。底面は長軸0.9m、短軸0.7mで確認面からの深さは0.15mである。覆土は黄褐色土を中心にして3層に細分されており人為的な堆積を示している。検出状況からピットの可能性がある。



- ① FB a相当だが黒色が強い (YL U状の層子を含む)
- ② ①よりややしまっている。黒色は薄くなる。FB aとFB bの混土
- ③ FB b相当
- ④ ③と同様
- ⑤ YLU相当
- ⑥ ⑤と同様

土坑 1

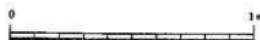
- ① 暗黄褐色土 (炭化物を少量含む)
- ② 深黒茶色土 (赤色スコリアを少量含む)
- ③ ①に類似
- ④ 暗茶色土 (炭化物・赤色スコリア少量含む)

土坑 2

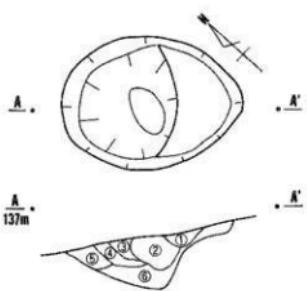


- ① 暗褐色土 (極少量の赤色スコリアを含む)
- ② 黒色板質土土 (スコリアが散在)
- ③ 暗黃色褐色土 (FB層相当の黒色土が散在やや硬質)

土坑 3

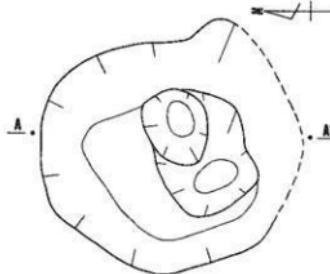


第13図 土坑実測図 (1/20)



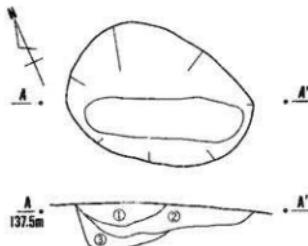
- ① 灰褐色土
- ② 赤褐色土 (燒土)
- ③ 小褐色土 (スコリア混じり)
- ④ 灰褐色土 (④に類似)
- ⑤ ②に類似
- ⑥ 小褐色土と燒土の混上

焼土坑 1



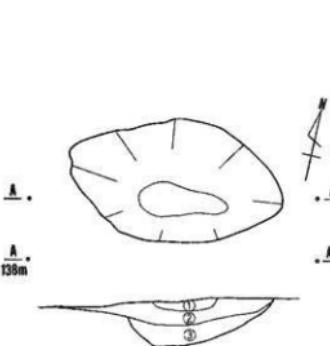
- ① 喀黃褐色硬質土 + 燒土 (喀黃褐色土の中に多量の燒土を含む、炭を少量含む。)
- ② 喀黃色褐色軟質土 (FB中心部少量の燒土を含む)
- ③ 喀黃褐色土 (②に比べ燒土の量が少ない)
- ④ 喀赤褐色軟質土 (多量の燒土の中に純粹なFB層が散在している。炭はほとんどない)
- ⑤ 喀黃褐色軟質土 (FBの中に少量の燒土を含まる)
- ⑥ 喀黃褐色軟質土 (YLの中に少量の燒土を含む。崩落上の様)
- ⑦ 燃土+炭 (赤褐色を呈する燒土の中に炭が含まれる)

焼土坑 2



- ① 明赤褐色軟質土 (YLの中に明るい色をした燒土を含む。)
- ② 喀黃褐色硬質土 (YLの中に直徑3~4mmの燒土粒が散在)
- ③ 喀褐色軟質土 (YLの中に極少量の燒土および赤色スコリアが散在)

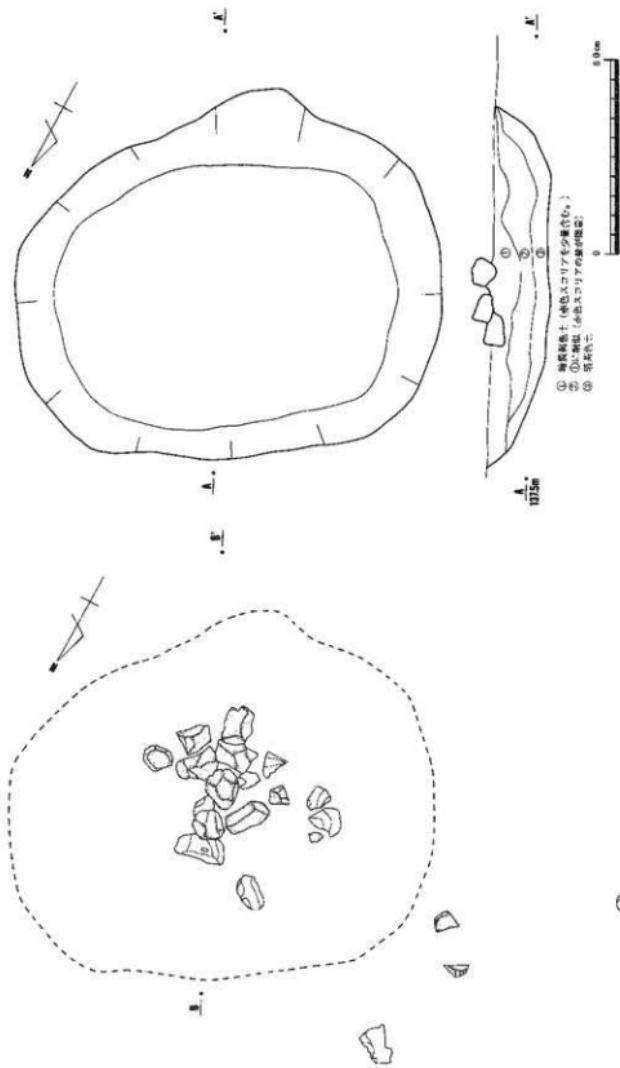
焼土坑 3



- ① 喀黃褐色土 (赤褐色の燒土を多く含む)
- ② 喀黃褐色土 (少量の燒土・炭を含む)
- ③ 黄色土 (YL M相当)

焼土坑 4

第14図 焼土坑実測図 (1/20)



第15図 集石土坑実測図

倒木跡 1

本倒木跡はH-21グリッドに位置する。検出面は休場層上層上面で、開口部は長軸2.3m、短軸1.2mの不整橭円形を呈する。底面は長軸1.7m、短軸0.3mで南隅にピット状の落ち込みがあり、確認面からの深さは0.4mである。覆土は黒色土を中心に4層に細分されており自然堆積の様子を示している。検出状況からピットの可能性がある。

倒木跡 2

本倒木跡はH-24グリッドに位置する。検出面は休場層上層上面で、開口部は半径1.1mの不整円形を呈する。底面は長軸0.4m、短軸0.3mで確認面からの深さは0.2mである。覆土は黒褐色で自然堆積の様子を示す。検出状況から自然地形の可能性がある。

倒木跡 3

本倒木跡はH-24・25グリッドに位置する。検出面は休場層上層上面で、開口部は長軸1.8m、短軸0.7mの不整橭円形を呈する。底面は長軸1.4m、短軸0.3mで確認面からの深さは概ね0.4mである。南隅にピット状の落ち込みがあり、確認面からの深さは1.6mである。覆土は黒色土で自然堆積の状況を示す。検出状況からピットの可能性がある。

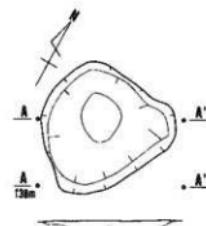
倒木跡 4

本倒木跡はH-25グリッドに位置する。検出面は休場層上層上面で、開口部は長軸1.8m、短軸0.8mの不整橭円形を呈する。底面は長軸1.8m、短軸0.3mで確認面からの深さは概ね0.2mである。南隅にピット状の落ち込みがあり、確認面からの深さは1.6mである。覆土は黒色土で自然堆積の状況を示す。検出状況からピットの可能性がある。

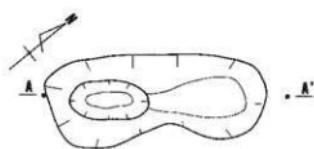


- ① 黒褐色土
② 黑茶色土
③ ①②の混土
④ 貫褐色軟質土

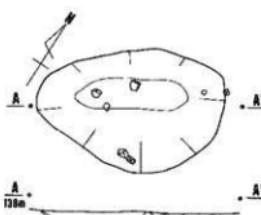
倒木痕跡 1



- ① 黒褐色土（白色バニス・黒色スコリアを含む）
倒木痕跡 2



倒木痕跡 3



- ① 黒土
② FB層
③ FB層とYL層の混土
④ FB層とYL層の混土（ややYL層の色調が濃い）
倒木痕跡 4



第16図 倒木痕測図

第3節 遺 物

土 器

本遺跡から出土した土器は、その殆どが當土黒土層から混在した状態での出土であった。出土土器の主体は縄文時代早期の上器であり、縄文時代前期及び中期の土器が少量出土している。

土器は以下のように分類した。

第1群 摲糸文を施文する土器

- 1類 細かい撲糸文を施文する
- 2類 節の粗い縄文・撲糸文
- 3類 比較的粗い撲糸文で条間が広いもの
- 4類 細かい撲糸文を施文するもの
- 5類 網目状の撲糸文

第2群 縄文を施文する土器

- 1類 単節縄文
- 2類 複節縄文

第3群 押型文を施文する土器

- 1類 山形文
- 2類 横円文

第4群 条痕文系土器

- 1類 絡条体压痕文
- 2類 隆起線文
- 3類 沈線文
- 4類 沈線文と刺突文
- 5類 刺突文と沈線文
- 6類 連続刺突文
- 7類 連続刺突文と縄文

第5群 その他の早期の土器

第6群 前期の土器

第7群 中期の土器

第8群 後期の土器

第1群

撲糸文を施文する土器である。

第1群1類 (第17図1~16)

細かい撲糸文を縦位または斜位に施文する土器である。撲糸文を口縁部下から施文するものが多く、口縁部に横位・斜位に施文し以下は斜位に施文するものがある。1は口縁部下からRの撲糸文を縦位・斜位に密接して施文する。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は平坦に整える。口縁部内面には横位に施文する。12は他と比較して節の粗い原体を縦位に施文した上から斜位に施文している。13も同様に細かい撲糸文を縦、斜めと重ねて施文している。14は口縁部は横位に、以下斜位に施文されている。口縁部内面にも横位の施文が見られる。15は器厚の薄い土器で、口縁部は僅かに外反し、口唇部はやや尖

る。口縁部下から斜位に施文が行われているが、方向は一定でなく、交叉するように施文されている。内面にも施文する。3・6・11も口縁部内面に施文する。口縁部は直行あるいは僅かに外反し、9・10は僅かに内湾する。口唇部は平坦、丸棒状、やや尖るものがある。16は胎土の特徴がいわゆる「若宮型」に類似する。

第1群2類（第17図17～21）

縄の粒が大きく節の粗い縄文・撚糸文を施文する土器である。胎土にはごく少量の纖維が含まれる。沼津市広合遺跡から出土している、いわゆる『広合型』土器に類似する。

第1群3類（第17図22・23）

1類に比べ粗い撚糸文を施文する土器である。条の間隔が広く空き、原体の縄の粒がはっきりとわかるような施文である。比較的厚手の土器である。

第1群4類（第17図24～46）

細かい撚糸文を施文する土器である。1類に比べ節が粗く、条間の空くものや、胎土の混入物の少ないものが含まれる。文様の特徴からさらに2種に分類した。

a種（24～40） 細かい撚糸文を縦位または斜位に施文するもので、細かい撚糸文を密接して施文するタイプと節が粗く条間の空くタイプ、器厚が厚く、焼成良好、褐色・黄褐色を呈し、細かい撚糸文を施すタイプがある。

b種（41～46） 器厚が比較的厚く、細かい撚糸文を不定方向に断続的に施すもの。47・48は底部である。

第1群5類（第18図49～54）

網目状の撚糸文を施文する土器である。49・50は口縁部片である。口縁は直行し、口唇部は平坦である。50は口縁部内面へ施文する。

第2群

縄文を施す土器である。

第2群1類（第18図55～60）

単節の粗い縄文を施文する土器である。胎土は軽く、器面は滑らかである。

第2群2類（第18図61～65）

複節の縄文を施文する土器である。胎土は1類とは明らかに異なる。

第3群

押型文を施す土器である。

第3群1類（第18図66～74）

山形の押型文を施文する土器である。文様細部の特徴からさらに3種に分類した。

a種（66・67） 山形の波長の大きいもの。縦位に密接施文されている。65は口縁部片である。口縁部は直行し、口唇部は丸棒状を呈す。口縁部内面には押型文が横位に施文されている。

b種 (68~72) 山形の波長の小振りのもの。a種に比べ山形の波長の短いものである。縦位に密接施文されている。68と69は口縁部片である。口縁部は直行し口唇部は丸棒状を呈する。

c種 (73・74) 異方向に密接に施文するもの。縦位に施文した後、横位に施文している。

第3群2類 (第18図75~78)

楕円の押型文を施文する土器である。文様細部の特徴からさらに2種に分類した。

a種 (75~77) 小粒の楕円押型文を縦位に密接施文するもの。

b種 (78) 楕円文と沈線を施文するもの。79・80は底部である。

第4群

条痕文系土器である。

第4群1類 (第18図81~88、第19図89~96、97~119)

絡条体圧痕文を施文する土器である。胎土に纖維を含むものが多いが、含まれる纖維の量は少量である。文様構成からさらに3種に分類した。

a種 (81~96、100~109) 絡条体圧痕文のみを施文するもの。絡条体圧痕文を横位・斜位に数条施す。絡条体の原体には撫糸の縄の細かいものと粗いものの2種類が見られる。96は絡条体圧痕文を交叉して施文している。口縁には波状口縁と平口縁があり、口縁部は直行あるいは外反し、口唇部は平坦なもの、丸棒状、内削ぎ状のものがある。81は外反する口縁部の端部が内傾し、口唇部は外削ぎ状である。口唇部には絡条体圧痕文を施す。82・83は口唇部にX字条の刻みを施し、96の口唇部には絡条体圧痕文が施されている。

b種 (97~99、110~117) 絡条体圧痕文と隆起線文を施文するもの。隆起線文を口縁部に平行して横に配し、その下に絡条体圧痕文を横位に施文するものと、隆起線文を縦位に配するものがある。口縁部は直行あるいは若干外反し、口唇部は平坦である。

c種 (118~119) 絡条体圧痕文と沈線を施文するもの。数条の絡条体圧痕文を横位に施文しその下に、縦位の沈線文を施す。

第4群2類 (第20図120~125)

隆起線文を施文する土器である。胎土に少量の纖維を含む。隆起線文を口縁部と平行に横に配し、その下に縦位の沈線文を施文する。123・124は口縁と隆起線文との間に、口唇部または口縁下から縦位の隆起線文を配している。口縁部は直行、口唇部は平坦に整形されている。

第4群3類 (第20図126~144)

沈線文を施文する土器である。胎土に少量の纖維を含むものが多い。野島式に比定される。文様の特徴から3種に分類した。

a種 (126~128、130~137) 沈線文で幾何学的に区画し、その中を沈線文で充填する。沈線文を2状平行に施して帯状の無文部を作り出している。127は太い沈線文を三角形状に配して区画文とし、その中を同様の沈線文で充填している。130・131・134は太い沈線文を区画文とし、その中を同様の沈線文で充填する。133は細沈線文を縦位・横位に配して区画文とし、その中を太い沈線文で充填している。137は半裁竹管状工具による2条1組の細い沈線文による施文である。縦位と横位に沈線文を配して区画文とし、その中を同様の沈線文で充填する。平口縁と波状口縁があり、口縁部は直行し、126の

口縁部は肥厚する。口唇部は平坦で、128は口唇上に棒状工具による刺突が施される。

b種 (129・138・139) 沈線文と隆起線文を施文するもの。区画文として沈線文と細隆起線文を用い、区画の中を沈線文で充填する。129は細隆起線文で区画し、その中を沈線文ではなく同様の細隆起線文で充填している。口縁部は直行し口唇部は丸棒状を呈する。140は縦位の細隆起線文と細沈線文を区画文とし、その中を太い沈線文で充填している。細沈線はa種同様2条を平行に間隔を空けて配してあるが、沈線間は無文ではなく同様の細沈線で充填している。

c種 (140・141) 屈曲部に刺突を施し、口縁部文様帶には細い沈線文が施される。屈曲部には先の尖ったヘラ状工具による刺突が施され、口縁部文様帶には半裁竹管状工具による2状1組の細沈線文が幾何学的に配される。器厚が14~16mmと非常に厚い。

第4群4類 (第20図142)

沈線文と刺突文を施文する土器。屈曲部に太い隆帯を貼付し、口縁部文様帶を作り出している。口縁部文様帶には条痕を地文とし、先の尖った工具による円弧や交叉する直線上に刺突文を施し、円内は刺突文で充填している。隆帯の下には半裁竹管状工具による刺突文が施文されている。口縁部の形態は外反し、口唇部は平坦で、外側に刻みが施されている。器厚は15~20mmと厚い。鶴ヶ島台式に比定される。

第4群5類 (第20図143~145)

刺突文と沈線文を施文する土器。屈曲部に太い隆帯を貼付し、口縁部文様帶、頸部文様帶を作り出している。4類に比べ胎土に含まれる大粒の砂粒の量が多く、暗褐色を呈する。器厚は10~15mmと厚い。茅山下層式に比定される。

143は口縁部である。太い隆帯によって作り出された口縁部文様帶に連続刺突文による円弧文と交叉する直線文が描かれている。描かれた文様は142と類似しているが142が沈線文の上に刺突文を施していくのに対し、143は連続する刺突文によって文様を描いている。隆帯の下位には刺突文が連続して施されている。口縁部は直行し、口唇部は内削ぎ状で外側に刻み目を有する。144は2条の太い隆帯によって頸部文様帶が作り出されている。文様は縦位の細沈線数条と連続する刺突文から成る。隆帯の上にも刻みが施されているようである。145は1条の隆帯とその上位に施文される連続する刺突文からなる。

第4群6類 (第21図146~171、第22図172~189、第23図190~212)

連続刺突文によって文様を施文する土器。沼津市元野遺跡や伊東市東大室クズレ遺跡で類似する土器がまとまって出土している。関東地方の茅山下層式に併行する在地の土器と考えられる。

a種 (146~164) 刺突文による文様が直線的に描かれるもの。棒状工具や半裁竹管状工具、箇状工具を用いて、口縁下と屈曲部に1条の刺突列を施し、その間に同一の施文具で三角形を基調とした文様が描かれている。147・153・161・162は口縁下に2条の刺突列を施す。157・158は屈曲部の刺突列の下位にも同一の工具による連続刺突文が施文され、頸部文様帶をしている。163の屈曲部には半裁竹管状工具による刺突列が施されている。148~150、153~155、164は条痕を地文として施文している。口縁は平口縁と波状口縁があり、口縁部は直行するものと端部が外反するものがある。口唇部は内削ぎ状で、断面形が三角形を呈するものが多い。口唇部外側や内側に刻みや刺突文を施すものが多く見られる。163は肥厚した口唇部上に刺突文が施文されている。159・161は突起の部分である。

b種 (165~171) 連続刺突文による文様が曲線的に描かれるもの。棒状工具や箇状工具によって、施文する。165・166・167・169は口縁に沿って刺突文が施される。平口縁と波状口縁があり、口縁部は直行と166や169のように内湾するものがある。口唇部は内削ぎ状、平坦、丸棒状で、口唇部の内・

外側に刻みを施すものが見られる。168は口唇部が肥厚し、平坦な口唇部上に爪形状の刺突文施され、169は波状の口縁に沿って、鋭い刺突文が施される。171は屈曲部に沿って細かい刺突文が施される。

c種 (172~177) 連続刺突文と凹線文による文様が直線的に描かれるもの。棒状工具、箆状工具、半裁竹管状工具の連続刺突文により描かれる文様は、三角形を基調とした文様である。刺突文列間に指頭や箆状工具による凹線が施されている。凹線は、174のように強く施され、刺突文を強調させるものと172や173のように弱く、浅いものがある。凹線を施すことにより、条痕は消されているが、凹線を施さない部分には条痕が残る。口縁は平口縁と波状口縁、山形口縁で、口縁部は直行または内湾する。口唇部は内削ぎ状で、内・外側に刻み・刺突文を施す。172は外反する口縁が端部で内傾する。これによって作り出された屈曲部に1条の刺突文が施されている。また、屈曲部上位にも連続刺突文が施されている。174は口縁部内面に幅の広い箆状工具による鋭い刺突文を1条巡らす。口縁頂部に相当する部分は口縁内側に粘土を貼り付け、断面三角形に肥厚させている。屈曲部以下には条痕が残る。

d種 (178~189) 連続刺突文と凹線文による文様が曲線的に描かれるもの。棒状工具、箆状工具により波状の刺突文が描かれ、刺突文間には凹線が施される。178は棒状工具による刺突文。口縁下の刺突文列の上位に凹線を施し、それにより口縁部の屈曲が強調されている。180は口縁下と屈曲部に細い棒状工具により1条の刺突列を施す。口縁部文様帶はくびれ部の中央に施した2条の刺突列とその間の凹線によって上下2段に別れ、それぞれに細かい刺突文が波状に施されている。口縁部には筒状の突起が付く。183は扁平な箆状工具による鋭い刺突文が口縁の下には2条の刺突列、その下には波状に描かれている。184は脣部の屈曲が弱く、屈曲部には刺突文が曲線的に、また口縁部文様帶には爪形状の刺突文が波状に施文されている。屈曲部の下位にも1条の刺突列が巡る。187も屈曲部とその下位に刺突文列が施文される。189は細かい爪形状の刺突文が波状に施文されている。口縁は平口縁と波状口縁があり、口縁部は直行する。口唇部は内削ぎ状で、178を除いて185・186は外側、他は内・外側に刻み・刺突文が施されている。184の口縁は口唇部の上を指頭?で押さえて波長の小さい波状口縁を作り出しており、口唇部は波頂部以外は平坦に整形されている。185・187・188は条痕が残る。

その他脣部片等を一括した。(190~212)

190・191は箆状工具による押引き文を曲線的に施文した土器である。190は口縁部片である。波状口縁で口縁は直行、口唇部は先尖り状で刻みを施す。191は刺突文で区画した中を、波状に引いた押引き文と、縦位の沈線文で充填する。192・193は凹線文と刺突文による施文が行われている。いずれの凹線も強く引かれ、193の屈曲部下には太い凹線が縦位に施されているようである。193・196・202・204は隆帯を貼り付けて屈曲を強調しており、隆帯上には刺突文が施されている。205~207は曲部と脣部にそれぞれ1条の刺突列が巡る。脣部に条痕を残すものが多く見られる。刺突文は棒状工具や箆状工具、半裁竹管状工具によるものと、195・197や209~211のような爪形状の鋭い刺突文が見られる。

第4群7類 (第24図213~233、第25図234~249)

連続刺突文と縄文を施す土器である。これらを文様構成や施文具から5種に分類した。

a種 (213~216) 無節の縄文を地文とし刺突列に沿って弱い凹線を施す土器。口縁部に刻みを施し、一条の刺突列で口縁部文様帶を画する。213は三角形をモチーフとした刺突列を施し、弱い凹線が認められる。

b種 (217・218) 無節の縄文を地文とし直線的な刺突を施した薄手の土器。a種に類似するが薄手で胎土や施文具が異なる。

c種 (219~233) 単節の縄文を地文とし棒状工具による刺突列を施す土器。口縁部は突起を有するものと平縁となるものがある。主に単節の縄文を地文とし刺突列を弧状に施す。やや厚手胎土に織

維を含む。

d 種 (234~236) 繩文を地文とする厚手の土器。口縁部に突起を有し、口唇部に弱い刻目がある。口縁部から屈曲部にかけて単節の繩文を施し、胎土に纖維を含む。器厚も10mmと厚く、浅橙色を呈する。

e 種 (237~244) 繩文を地文とする薄手の土器。d 種に類似するが器厚が7mmとやや薄く、褐灰色を呈する点で異なる。口縁は平口縁で範状工具による刻目がある。弱い屈曲部にかけて単節の繩文を施し、胎土に纖維を含む。

245~249は第4群の底部と思われるものを図示した。平底の底部片が主体を占め外面に条痕が認められるものが多い。

第4群8類 (第26図250~259)

無文土器を一括し、早期と思われる無文土器を口唇部の特徴や色調・胎土により細分した。

a 種 (250~252・254・255・257) 口唇部に刻目が無い250・251・252・254・255・257は、胎土に纖維を含むものが多く、このうち器厚の厚い250・255は橙色を呈する。一方纖維を含まないものは器厚の薄い特徴がある。色調はにぶい橙色を呈し白色粒子の混入も目立つ。

b 種 (253・256・258・259) 口唇部に刻目の有るものは、棒状の工具による押さえがあり、胎土に纖維の混入が少なく、白色粒子の混入が日立ち色調にもぶい橙色を呈する。爪形状の刻目があるものは胎土に纖維の混入がやや多いが、白色粒子が少なく色調にもぶい褐色を呈する。

第5群 (第26図260~287)

繩文早期後半に属するその他の土器である。

文様・施工具・胎土・色調により細分した。繩文を施す260・261・264・265・266・267・268・269・270・272は口縁部破片で、262・263・271・273が胸部破片である。265・266・267・268は刺突を施す土器で、口縁部直下に棒状工具あるいは半裁竹管による連続的な刺突列を施す。269・270は隆線を施しているもので、口縁部直下に隆線が巡る。271は胸部下半に粗い絡条体を押し付ける。また272のように波状口縁の口唇部に隆帶を縦位に張り付けるものもある。273は屈曲部に範状工具による刺突列が巡る。また274~287は底部であり早期後半の土器底部と推定される。貝殻条痕は276・277に認められ、胎土に纖維が多いもの275・276・277・279・280・282・283・286・287と、纖維が少ないもの284・285等の差異がある。

第6群 (第27図288~292)

前期に属する土器である。

造物量が少なく胸部の破片が散見される。文様は半裁竹管による平行沈線文288・289・290と、櫛齒状工具による集合沈線291・292が認められる。おそらく諸磲b式土器か諸磲c式土器の一端と思われる。

第7群 (第27図293~300)

中期に属する土器である。

小形の有孔土器と若干の胸部破片が含まれる。小形の有孔土器293は口縁部がやや肥厚し「く」の字状に外反する。胸部中央が最大径となり、底部に続く。文様は無く、頸部直下に焼成前に外面側から穿孔された穴が6カ所残存する。この他、連続爪形文294、隆帶と連続爪形文295、平行沈線296、平行沈線と連続爪形文の組み合わせ297、隆帶と連続爪形文の組み合わせ298がある。これらは胸部の破片で詳細は

解らないが勝坂式上器の一部であろう。

第8群 (第27図301)

後期に属する土器である。

301は波状口縁の外面に凹線文が施される。安行式土器に併行する東海系土器の一部であろう。

第3表 土器観察表

図版番号	区	取上番号	層	色調	胎土	文様
1	H25	218	FB	明赤褐色	白色岩片を含む。	Rの撲糸文を縦位施文。口縁。
2	G23	63	FB	明褐色		撲糸文を縦位施文。口縁。
3	H23	39	FB	赤褐色	織維含む。	Rの撲糸文を斜位施文。内面横位施文。穿孔。口縁。
4	G22	36	FB	明褐色	織維含む。	撲糸文を横位施文。口縁。
5	G25	401	FB	明褐色	白色岩片含む。	若干の無文面。撲糸文を縦位施文。口縁。
6	F27	12	FB	明褐色	織維含む。	Rの撲糸文を縦位施文。内面横位施文。口縁。
7	G25	371	FB	明褐色	白色岩片含む。	若干の無文面。以下撲糸文を縦位に施文。口縁。
8	G26	62	FB	褐色	多量の白色岩片含む。	撲糸文を縦位施文。口縁。
9	F26	50	FB	明赤褐色	白色岩片含む。	撲糸文を縦位施文。口縁。
10	H25	121	FB	明褐色	織維含む	若干の無文面。以下撲糸文を縦位施文。口縁。
11	H24	22	FB	褐色	白色岩片含む	口縁斜位、以下斜位に撲糸文を施文。内面横位施文。口縁。
12	H22	15	FB	明褐色	白色岩片含む。	Rの撲糸文を縦位に交叉して施文。口縁。
13	F27	13	FB	明褐色	織維含む	Rの撲糸文を縦位に施文した上から斜位に施文。口縁。
14	G26	90	FB	明褐色	織維含む	口縁斜位、以下斜位に撲糸文を施文。内面横位施文。
15	G25	80	FB	明褐色	織維含む。	撲糸文を斜位に施文。内面に斜位に施文。口縁。
16	G22	34	FB	黃褐色	白色岩片・石英・輝石含む。	Rの撲糸文を縦位施文。
17	H22	7	FB	明褐色		漆の無い縄文・撲糸文
18	H22	17	FB	赤褐色	白色岩片・織維含む	漆の無い縄文・撲糸文
19	H23	49	FB	褐色	白色岩片含む。	漆の無い縄文・撲糸文
20	F27	1	FB	明褐色	白色岩片・織維含む	漆の無い縄文・撲糸文
21	F26	5	FB	明赤褐色	白色岩片・織維含む	漆の無い縄文・撲糸文
22	F26	24	FB	明赤褐色	白色岩片含む。織維含む。	Rの撲糸文。条間が広い。
23	F25	8	FB	明褐色		Rの撲糸文。条間が広い。
24	H24	160	FB	明赤褐色	織維含む。	Rの撲糸文を縦位施文。
25	H20	2	FB	明赤褐色	織維含む。	Rの撲糸文横位、縦位に施文。
26	F25	136	FB	赤褐色	白色岩片含む。	Rの撲糸文を交叉して施文。
27	G25	46	FB	明褐色	織維含む。	Rの撲糸文を縦位施文。
28	F24	50	FB	明赤褐色	白色岩片含む。	撲糸文縦位、斜位に施文。
29	H25	160	FB	明赤褐色	織維含む。	撲糸文を斜位施文。
30	G23	99	FB	明褐色	白色岩片含む。	撲糸文を斜位施文。
31	F26	34	FB	赤褐色	白色岩片含む。	やや長い撲糸文を縦位施文。条間が空く。
32	G26	139	FB	明赤褐色	白色岩片・織維含む	やや長いRの撲糸文を縦位施文。条間が空く。
33	F25	135	FB	赤褐色	織維含む。	撲糸文を斜位に施文。
34	G25	35	FB	赤褐色	白色岩片含む。織維含む。	やや長いRの撲糸文を縦位施文。条間が空く。
35	G25	396	FB	明褐色	白色岩片含む。	やや長いRの撲糸文を縦位施文。条間が空く。
36	F27	8	FB	明褐色	織維含む	細かい撲糸文を縦位施文。
37	H26	48	FB	明褐色		Rの撲糸文を斜位に施文。
38	F25			表模 褐色		細かい撲糸文を縦位施文。
39	G26	126	FB	にぶい黄褐色		細かいRの撲糸文を縦位施文。
40	G26	105	FB	にぶい黄褐色	粗しきような胎土。	Rの撲糸文を斜位に施文。条間が空く。
41	G25	65	FB	褐色		細かい撲糸文を横位等状に施文。
42	F2	111	FB	明褐色	織維含む。	細かい撲糸文を斜位に断続的に施文。
43	G24	87	FB	赤褐色	織維含む。	細かい撲糸文を斜位に所統的に施文。
44	G25	398	FB	明赤褐色		細かい撲糸文を横・斜位に所統的に施文。
45	F24	9	FB	明赤褐色		細かい撲糸文を横・斜位に所統的に施文。
46	H23	23	複底	明赤褐色		細かい撲糸文を横・斜位に所統的に施文。

図版番号	区	取上番号	層	色調	胎土	文様
47	H25	25	FB	明褐色	鐵錆含む。	尖底。撲糸文？
48	G25	338	FB	明赤褐色	白色岩片含む。	尖底。表面の空く撲糸文。
49	G24	185	FB	褐色	網目状の撲糸文。	
50	G23	91	FB	黒褐色		網目状の撲糸文。口唇部に若干の無文部。口唇部内面にも施文。
51	F27	2	FB	赤褐色		網目状の撲糸文。
52	G26	84	FB	暗褐色		比較的細かい網目状の撲糸文。
53	H25	154	FB	暗褐色		比較的細かい網目状の撲糸文。
54	H25	228	FB	明褐色	白色岩片含む	網目状の撲糸文を底部近くまで施文。
55	G22	23	FB	灰黃褐色	白色岩片含む。	L.Rの單節繩文を縦位に施文。
56	G22	14	FB	黃褐色	白色岩片含む。	L.Rの單節繩文を縦位に施文。
57	G22	10	FB	黃褐色		R.Lの單節繩文を縦位に施文。
58	G23	97	FB	黃褐色		L.Rの單節繩文を縦位に施文。
59	H22	19	FB	黃褐色		L.Rの單節繩文を縦位に施文。
60	H21	5	FB	黃褐色		R.Lの單節繩文を縦位に施文。
61	G25	65	FB	赤褐色	白色岩片含む。	L.R.Lの複節の繩文を縦位に施文。帯状を意識した施文？
62	G22	28	FB	明赤褐色	多量の白色岩片含む。	R.L.Rの複節の繩文を真方位に施文。
63	G25	37	FB	赤褐色	多量の白色岩片含む。	L.R.Lの複節の繩文を横位に施文。
64	F25	39	FB	にぶい黄褐色		複節の繩文。
65	G25	4	FB	褐色	白色岩片含む。	複節の繩文。
66	G25	227	FB	暗褐色	白色岩片含む	山形文を縦位密接施文。口縫。
67	G24	517	FB	赤褐色	白色岩片含む。	山形文を縦位密接施文。
68	F24	16	FB	赤褐色	鐵錆含む。	山形文を縦位密接施文。口縫。
69	F24	19	FB	赤褐色	鐵錆含む。	山形文を縦位密接施文。口縫。
70	F25	29	FB	赤褐色	鐵錆含む。	山形文を縦位密接施文。
71	F24	8	FB	赤褐色	鐵錆含む。	山形文を縦位密接施文。
72	G24	22	FB	明赤褐色	白色岩片含む。	山形文を縦位に施文。
73	G25	173	FB	赤褐色	鐵錆含む。	山形文を縦位・横位に帯状に施文。
74			表模	赤褐色	白色岩片含む。	山形文を縦位・横位に帯状に施文。
75	F26	20	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	橫円押型文を縦位密接施文。
76	G23	85	FB	明赤褐色	白色岩片含む。	橫円押型文を縦位密接施文。
77	G23	64	FB	明赤褐色	白色岩片・鐵錆含む。	橫円押型文を縦位密接施文。
78	F25	63	FB	明褐色	白色岩片含む。	円押型文と沈痕文。
79	G25	366	FB	明赤褐色	白色岩片・鐵錆含む	尖底。
80	H23	9	FB	明褐色	白色岩片・鐵錆含む	尖底。
81	G25	127	FB	暗褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を横位に施文。口縫。
82	G24	71 - 75	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を横位に施文。口縫。口唇部にx字状の刻み。
83	G24	69	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を横位に施文。口縫。口唇部にx字状の刻み。
84	G23	40 - 58	FB	赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を横位に施文。口縫。
85	G24	57	FB	明褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を横位に施文。口縫。
86	G25		表模	褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を斜位・横位に施文。口縫。
87	G24	131	FB	明黃褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を斜位に施文。丁寧な整形。口縫。
88	G23	27	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を斜位に施文。穿孔。口縫。
89	G26	35	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を横位に施文。口縫。
90	H25	126	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	原体の細かい鉛条体圧痕文を横位施文。口縫。
91	G25	498	FB	明赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を斜位に施文。口縫。
92	G25	359	FB	にぶい赤褐色	鐵錆含む。	鉛条体圧痕文を斜位に施文。口縫。

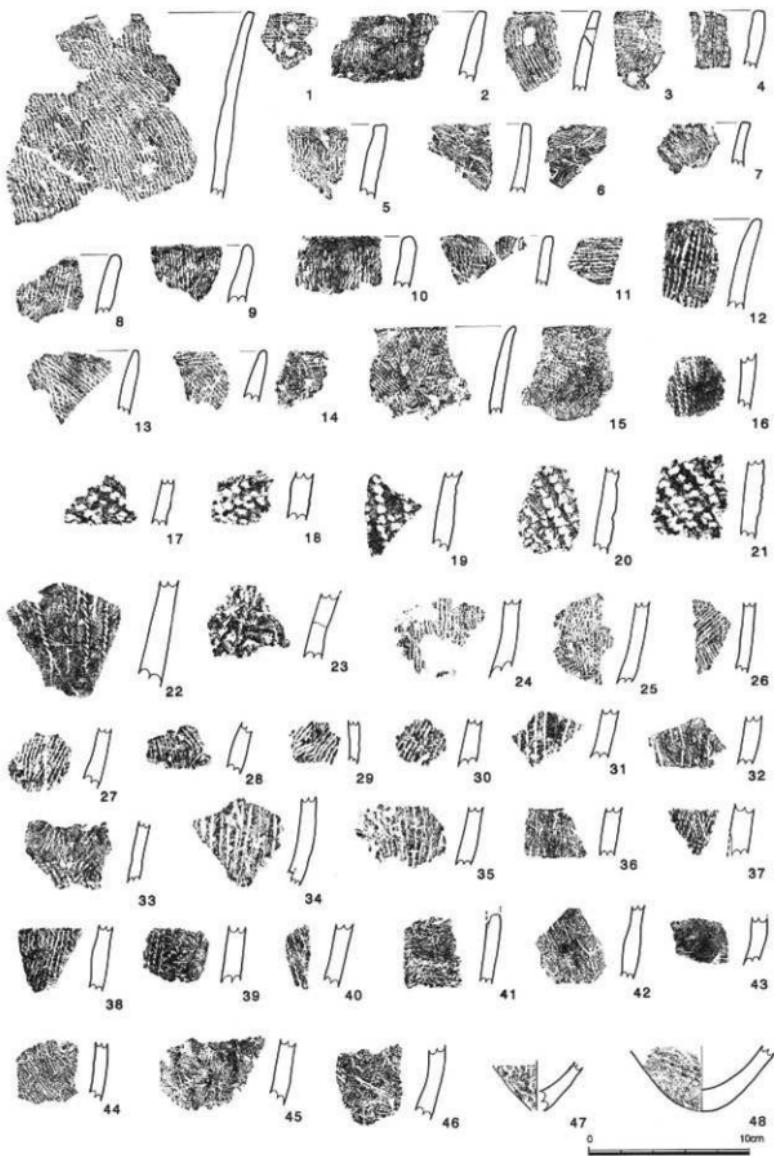
図版番号	区	意上番号	層	色調	胎土	文様
93	G23	75	FB	赤褐色	織維含む。	縦条体圧痕文を斜位に施文。口縁。
94	G25		表振	暗赤褐色	織維含む。	縦条体圧痕文を横位に施文。口縁。
95	G25	238	FB	赤褐色	織維含む。	縦条体圧痕文を斜位に施文。口縁。
96	H23		複乳	赤褐色	織維含む。	縦条体圧痕文を斜位に交叉状に施文。口縁。
97	F24	78	FB	明赤褐色	織維含む。	横位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。口縁。
98	G25	1	FB	明赤褐色	織維含む。	横位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。口唇部刻み。口縁。
99	P25	57	FB	明黄褐色	織維含む。	横位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。口縁。
100	G25	89	FB	赤褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
101	G23	13	FB	赤褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
102	H24	46	FB	赤褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
103	G25	425	FB	明赤褐色	織維含む。	模位の施記線文。
104	G25	132	FB	明褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
105	G23	47	FB	赤褐色	織維含む。	模位・斜位の縦条体圧痕文。
106	H24	12	FB	褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
107	G26	48	FB	明赤褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
108	G24		表振	明赤褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
109			表振		織維含む。	模位の縦条体圧痕文。
110			表振		織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。
111	G25	105	FB	赤褐色	織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。
112	G25		表振	明赤褐色	織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。
113	H24	119	FB	明赤褐色	織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。施記線文上に施文。
114	G24	24	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。
115	G25	339	FB	明褐色	織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。施記線文上に施文。
116	H24	135	FB	明赤褐色	織維含む。	模位の施記線文と模位の縦条体圧痕文。施記線文上に施文。
117	H25		表振	明赤褐色	織維含む。	模位の施記線文と斜位の縦条体圧痕文。
118	F25	52	FB	明褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文と継位の沈線文。
119	G25	488	FB	明褐色	織維含む。	模位の縦条体圧痕文と継位の沈線文。
120	H25	18	FB	明褐色	織維含む。	模位の施記線文と継位の沈線文。口縁。
121	G25	148	FB	明褐色	織維含む。	模位の施記線文と継位の沈線文。口縁。
122	G25	374	FB	明褐色	織維含む。	模位の施記線文と継位の沈線文。口縫。
123	G25	317	FB	明褐色	織維含む。	模位・継位の施記線文と継位の沈線文。口縫。
124	G25	83	FB	明褐色	織維含む。	模位・継位の施記線文と継位の沈線文。口縫。
125	G25	127	FB	明褐色	織維含む。	継位の沈線文。
126	G28	58	FB	明褐色	神狀工具による集合沈線文。口縫。	
127	H24	186	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	神狀工具による集合沈線文。口縫。口唇部に刻み。
128	G26	67	FB	褐色	織維含む。	神狀工具による集合沈線文。口縫。口唇部に刻み。
129	H25	190	FB	褐色		細施記線文。口縫。
130	H25	197	FB	明褐色	織維含む。	神狀工具による集合沈線文。
131	H26	35	FB	明褐色	織維含む。	神狀工具による集合沈線文。
132	F23	7	FB	明黄褐色	織維含む。	集合沈線。
133	H24	27	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	神狀工具による集合沈線。
134	H25	208	FB	褐色	織維含む。	神狀工具による集合沈線。
135	G25	97	FB	明褐色	織維含む。	エッジのある工具による集合沈線。
136	G25	96	FB	明褐色	織維含む。	エッジのある工具による集合沈線。
137	E27	7	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	半裁竹管状工具による集合沈線。
138	H24	129	FB	明褐色	織維含む。	細施記線文と神狀工具による集合沈線。

回取番号	区	取上番号	層	色調	胎土	文様
139	H25	59	FB	にぶい褐色	織維含む。	縦條記録文と棒状工具による集合状文。
140	H25	58	FB	にぶい褐色	織維含む。	半纖竹管状工具による沈線文。屈曲部に角み。
141	H25	76	FB	明褐色	織維含む。	半纖竹管状工具による沈線文。屈曲部に角み。
142	F25	2	FB	褐色	織維含む。	棒状工具による沈線文・刻突文。半纖竹管状工具による刻突文。
143	F25	125	FB	暗褐色	織維含む。	棒状工具による沈線文による連続刻突文。口縁。
144	G25	12	FB	暗褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。沈痕文。
145	F25	132	FB	暗褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。半纖竹管状工具による刻突文。
146	G25	23	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
147	E27	9	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
148	G25	174	FB	にぶい褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
149	H25		搅乱	灰黃褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
150	G24	138	FB	褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
151	G25	223	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
152	H25	54	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
153	H25	212	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
154	H25	114	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
155	G23	50	FB	明赤褐色	織維含む。	連続刻突文。口縁。
156	H26	56	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
157	H26	33	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
158	H21	25	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
159	H25	31	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
160	H25	32	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
161	H26	22	FB	褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。
162	G26	30	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
163	H24	139	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	半纖竹管状工具による連続刻突文。口縁。
164	F26	12	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。
165	G25	393	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
166	G25	323	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具・棒状工具による連続刻突文。口縁。
167	G25	93	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
168	F24	1	FB	赤褐色	織維含む。	連続刻突文。口縁。
169	F24	57	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	連続刻突文。口縁。
170	G25	86	FB	黒褐色	織維含む。	連続刻突文。口縁。
171	F25	43	FB	明黄褐色	織維含む。	連続刻突文。
172	F25	67	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。浅い凹線。口縁。
173	G24	22	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。浅い凹線。口縁。
174	H23		搅乱	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。凹線。口縁。
175	H24	103	FB	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
176	G25	274	FB	明褐色	織維含む。	連続刻突文。口縁。
177	G24	133	FB	赤褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。
178	G23	71	FB	明赤褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
179	H24	34	FB	褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縁。
180	H24	30	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縫。突起。
181	G25	157	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縫。
182	H25	90	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縫。
183	H25	47	FB	明褐色	織維含む。	棒状工具による連続刻突文。口縫。
184	H25	38	FB	褐色	織維含む。	半纖竹管状工具による連続刻突文。口縫。

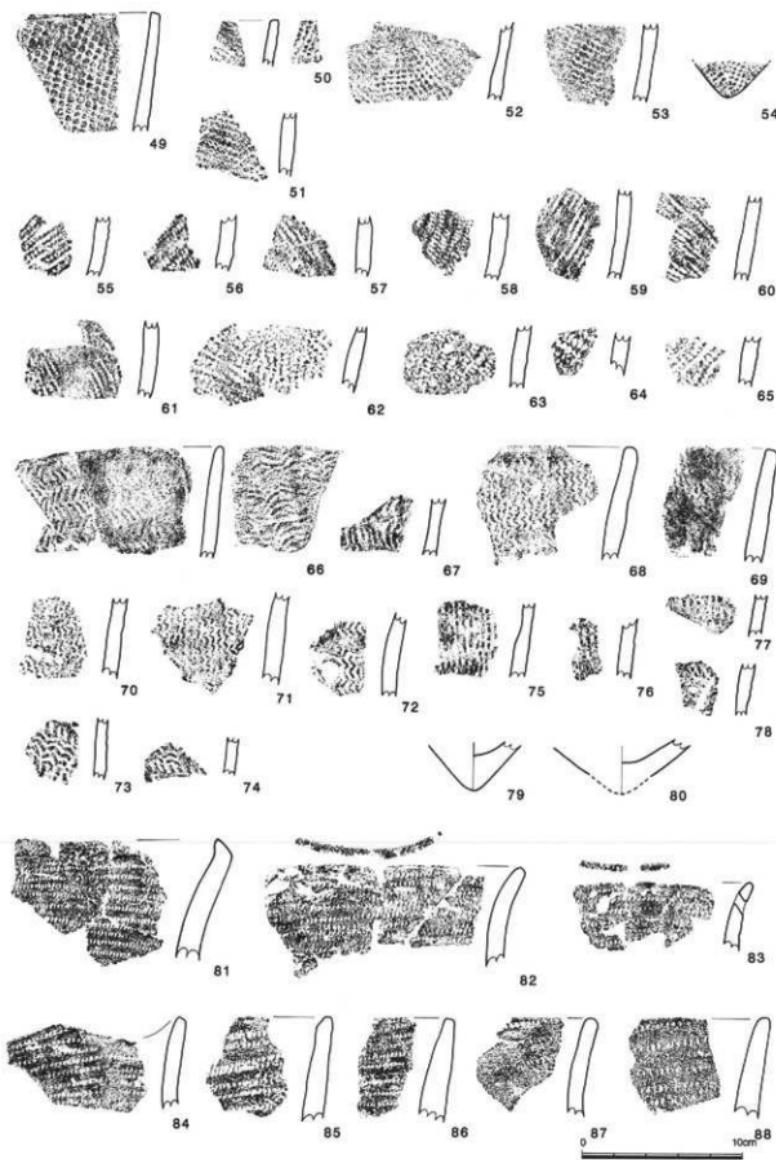
図版番号	区	取上番号	番	色調	胎土	文様
185	G25	6	FG	明褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。口縁。
186	F24	13	FB	褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。口縁。
187	G25	76	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
188	H23	35	FB	にぶい褐色	織維含む。	連續刻突文。
189	F25	27	FB	明黃褐色	織維含む。	爪形状の縦かい刺突文。
190	F24	56	FB	赤褐色	織維含む。	波状の押引き文。口縁部。
191	G24	178	FB	明褐色	織維含む。	刺突文による区画。枝状の押引き文。底位の沈線文。
192	G24	表探	明黄褐色	織維含む。	棒状工具による連續刻突文と凹線文。	
193	E25	2	FB	褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文と凹線文。
194	E25	9	FB	明黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
195	G23	17	FB	褐褐色	織維含む。	爪形状の刺突文。
196	E27	2	FB	赤褐色	織維含む。	底帶上に刺突文。条痕が残る。
197	B25	24・25	FB	明褐色	織維含む。	爪形状の刺突文。
198	H24	157	FB	褐色	織維含む。	半截竹管状工具による連續刻突文。
199	H24	48	FB	暗褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
200	G25	40	FB	明褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
201	G25	291	FB	褐色	織維含む。	半截竹管状工具による連續刻突文。
202	H26	53	FB	赤褐色	織維含む。	底帶上に連續刻突文。
203	G26	89	FB	褐色	織維含む。	底帶上に連續刻突文。
204	G25	290	FB	明黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。条痕が残る。
205	G26	表探	黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。	
206	G25	148	FB	明黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
207	H23	3	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。条痕が残る。
208	H25	215	FB	明黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。条痕が残る。
209	H25	33・36	FB	灰黄褐色	織維含む。	爪形状の刺突文。条痕が残る。
210	G24	表探	明黄褐色	織維含む。	爪形状の刺突文。	
211	H18	1	FB	明黄褐色	織維含む。	爪形状の刺突文。
212	F24	表探	にぶい黄褐色	織維含む。	連續刻突文。	
213	H25	98	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
214	H24	18	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	口縁に削目。
215	H25	66	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状刻突文。
216	G25	133	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	連續刻突文。
217	G23	56	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	連續刻突文。
218	G23	35	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	連續刻突文。
219	G24	132	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	連續刻突文。
220	F24	22	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	棒状工具による連續刻突文。突起。
221	F24			灰黄褐色	織維含む。	連續刻突文。平縁。
222	H23	複数	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。平縁。	
223	F24			にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
224	F24			にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
225	E25	4	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。平縁。
226	G24	83	FB	浅黄色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。平縁。
227	G24	72	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
228	G26	44	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。
229	H23	1	Y u	にぶい黄褐色	織維含む。	棒状工具による連續刻突文。
230	F24	4	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	葉状工具による連續刻突文。

図版番号	区	東上番号	層	色調	胎土	文様
231	G24	125	FB	浅褐色	織維含む。	単筋の縞文を地文とする。利突文無し。
232				にぶい黄褐色	織維含む。	単筋の縞文を地文とする。利突文無し。
233	G25	204	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	単筋の縞文を地文とする。連続網突文。
234	G25	320	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	単筋の縞文を地文とする。
235	G24	26	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	
236	H24	176	FB	にぶい褐色	織維含む。	
237	H25	65	FB	にぶい褐色	織維含む。	
238	F25	40	FB	灰褐色	織維含む。	
239	F25	20	FB	褐色灰褐色	織維含む。	單筋の縞文を地文とする。
240	G25	49		褐色	織維含む。	單筋の縞文を地文とする。
241	G25	391	FB	褐色	織維含む。	單筋の縞文を地文とする。
242	F25	79	FB	褐色	織維含む。	單筋の縞文を地文とする。
243	G25	13	FB	褐色	織維含む。	単筋の縞文を地文とする。
244	G25	507	FB	褐色	織維含む。	単筋の縞文を地文とする。
245	G25	88	FB	明赤褐色	織維含む。	彫刻あり。底部片。
246	E25		表深	灰褐色	織維含む。	彫刻あり。底部片。
247	F25	82	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	鋸状工具による連続網突文。
248	G25	13・5	FB	にぶい褐色	織維含む。	彫刻有り。底部片。
249	G25	21	FB	明赤褐色	織維含む。	彫刻有り。底部片。
250	G23	113	FB	褐色		口縁部の破片。
251	H26		表深	にぶい褐色		口縫部の破片。
252	G25	140	FB	にぶい褐色		口縫部の破片。
253	H24	33	FB	にぶい褐色	織維含む。	口縫部に棒状の工具による割目あり。
254	G25	140	FB	にぶい褐色		口縫部の破片。
255	H25	178	FB	褐色	織維含む。	口縫部の破片。
256	F26	23	FB	にぶい褐色	織維含む。	口縫部に爪形状の割目あり。
257	G26	18	FB	にぶい褐色		口縫部の破片。
258	G25	121	FB	にぶい褐色	織維含む。	口縫部に爪形状の割目あり。
259	G25	390	FB	にぶい褐色	織維含む。	口縫部に棒状の工具による割目あり。
260	H23		褐色	にぶい黄褐色	織維含む。	口縫部に縞文を施す。
261	G23	31	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	口縫部に縞文を施す。
262	G26	87	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	胸面部に縞文を施す。
263	H24	81	FB	にぶい褐色	織維含む。	胸面部に縞文を施す。
264	H23	17	FB	赤褐色	織維含む。	口縫部に縞文を施す。
265	G24	21	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	口縫部直下に棒状工具あるいは半乾竹管による連続的な刺突列。
266	G24	14	FB	明赤褐色	織維含む。	口縫部直下に棒状工具あるいは半乾竹管による連続的な刺突列。
267	F25	151	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	口縫部直下に棒状工具あるいは半乾竹管による連続的な刺突列。
268	G25	343	FB	黄褐色	織維含む。	口縫部直下に棒状工具あるいは半乾竹管による連続的な刺突列。
269	G24		表深	にぶい褐色	織維含む。	口縫部直下に縞文がめぐる。
270	C25	450	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	口縫部直下に縞文がめぐる。
271	G26	24	FB	明赤褐色	織維含む。	胸面部下半に長い絶状帶を押しつける。
272	G24	205	FB	明赤褐色	織維含む。	波状口縫の口縫部に縞文を底面に張り付け
273	G24	134	FB	明赤褐色	織維含む。	唇面部に窓状工具による刺突列が巡る。
274	H26	9	FB	灰褐色	織維含む。	底感。
275	G26	17	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	底感。
276	G26	68	FB	明赤褐色	織維含む。	底部。貝殻条痕が認められる。

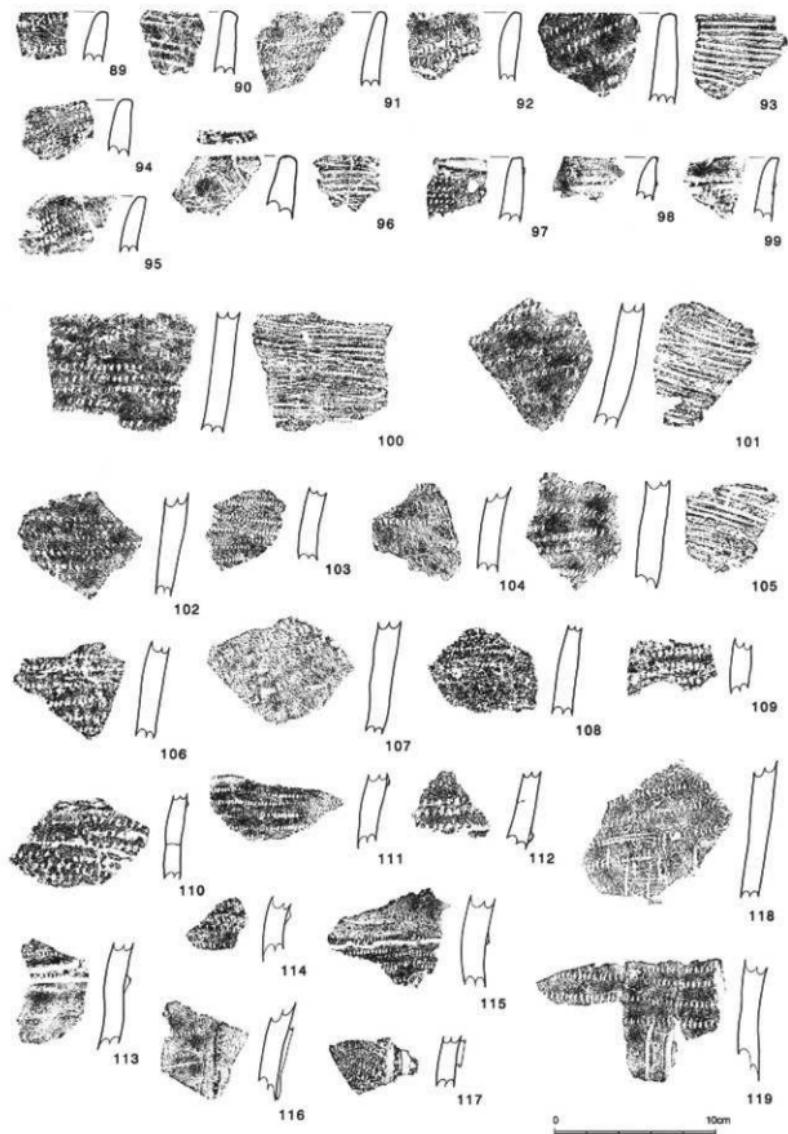
器物番号	区	取上番号	番	色調	胎土	文様
277	H23	1	FB	淡黄褐色	織維含む。	直線。
278	G25	224	FB	明黄褐色		直線。
279	H24	110	FB	明赤褐色	織維含む。	直線。
280	G26	76	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	直線。
281	F25	55	FB	明赤褐色	織維含む。	直線。
282	G25	94	FB	橙色	織維含む。	直線。
283	G26	52	FB	にぶい黄褐色	織維含む。	直線。
284	G24	51	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	直線。
285	H25	39	FB	暗赤褐色	織維含む。	直線。
286	G25	298	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	直線。
287	H25	22	FB	にぶい赤褐色	織維含む。	直線。
288	G24	104	FB	暗赤褐色		半截竹管による平行沈線文。
289	H22	11	FB	褐色		半截竹管による平行沈線文。
290	G22	9	FB	にぶい赤褐色		半截竹管による平行沈線文。
291	G24	58	FB	にぶい赤褐色		櫛齒状工具による集合沈線。
292	G20	153	FB	褐色		櫛齒状工具による集合沈線。
293	F24	3	FB	にぶい赤褐色		小形の有孔土器。
294	H23	8	FB	明赤褐色		連續爪形文のD字状爪形文。
295	G25	309	FB	にぶい赤褐色		帯と連續爪形文のD字状爪形文。
296	G25	156	FB	赤褐色		平行沈線。
297	F25	35	FB	明赤褐色		半截竹管による平行沈線と連續爪形文の組み合わせ。
298				橙色		羅帶と連續爪形文の組み合わせ
299	G24	16	FB	にぶい褐色		
300	H25	128	FB	にぶい褐色		
301	F27	5	FB	暗赤褐色		波状口縁の外間に凹線状が施される。



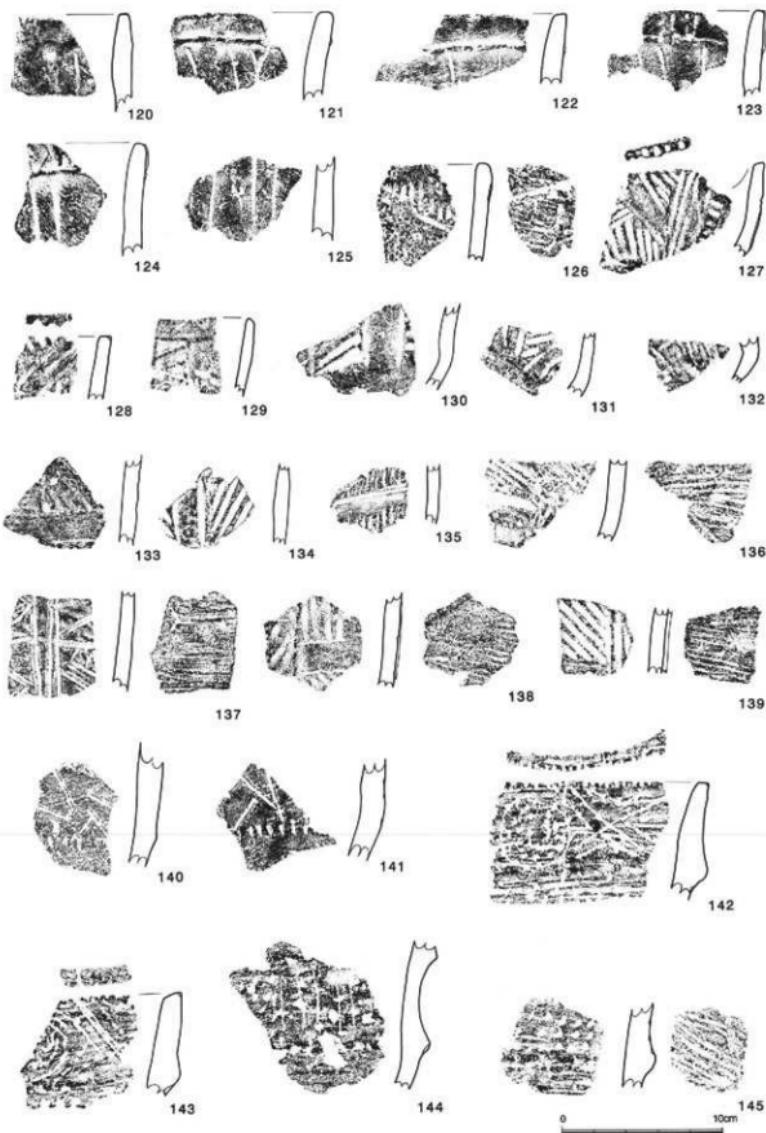
第17図 土器実測図1



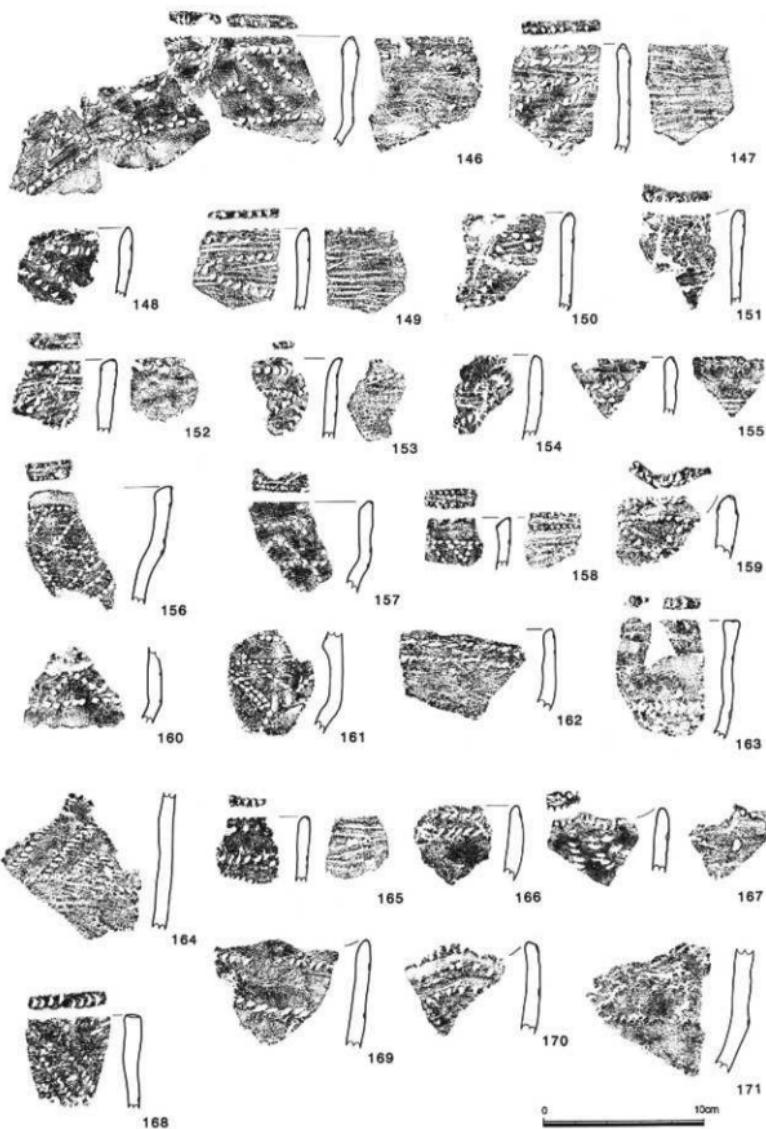
第18図 土器実測図2



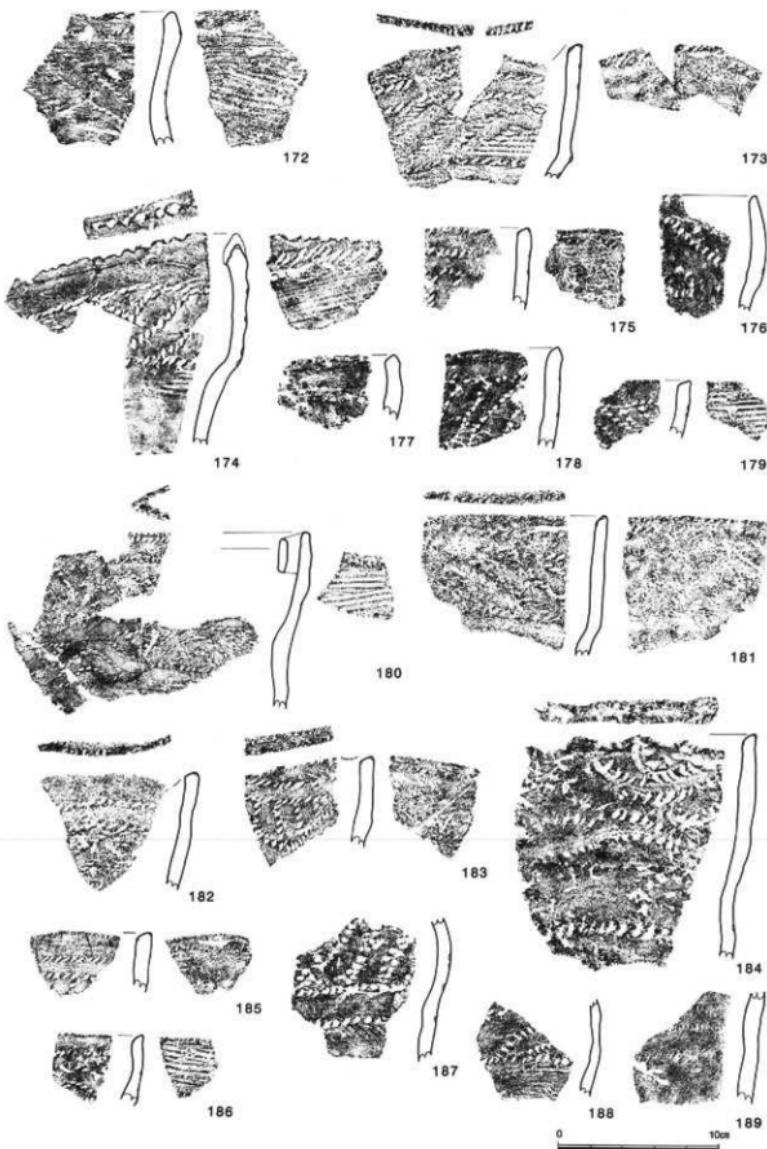
第19図 土器実測図3



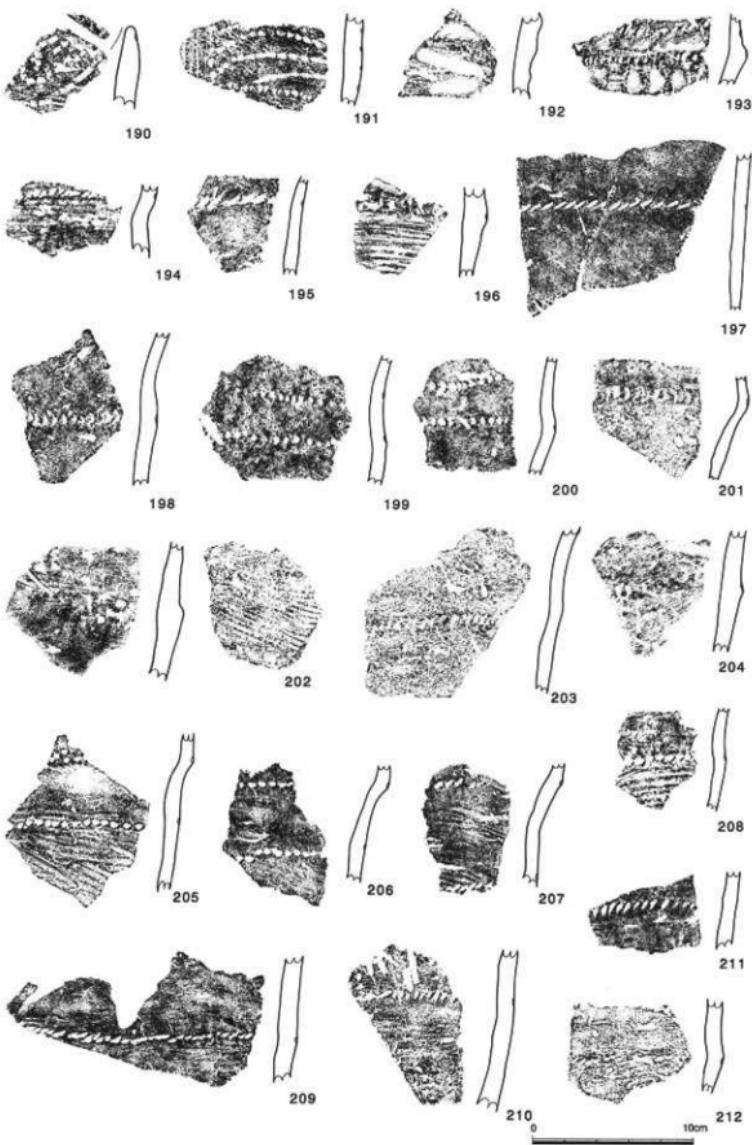
第20図 土器実測図 4



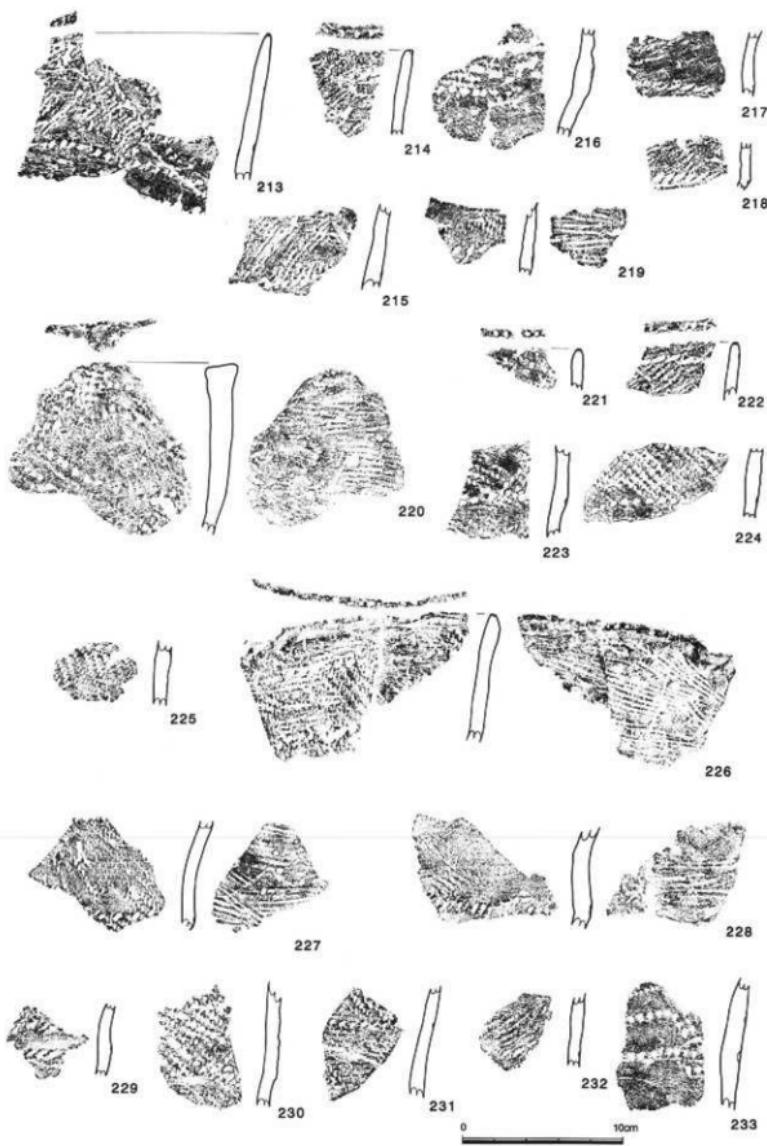
第21図 土器実測図 5



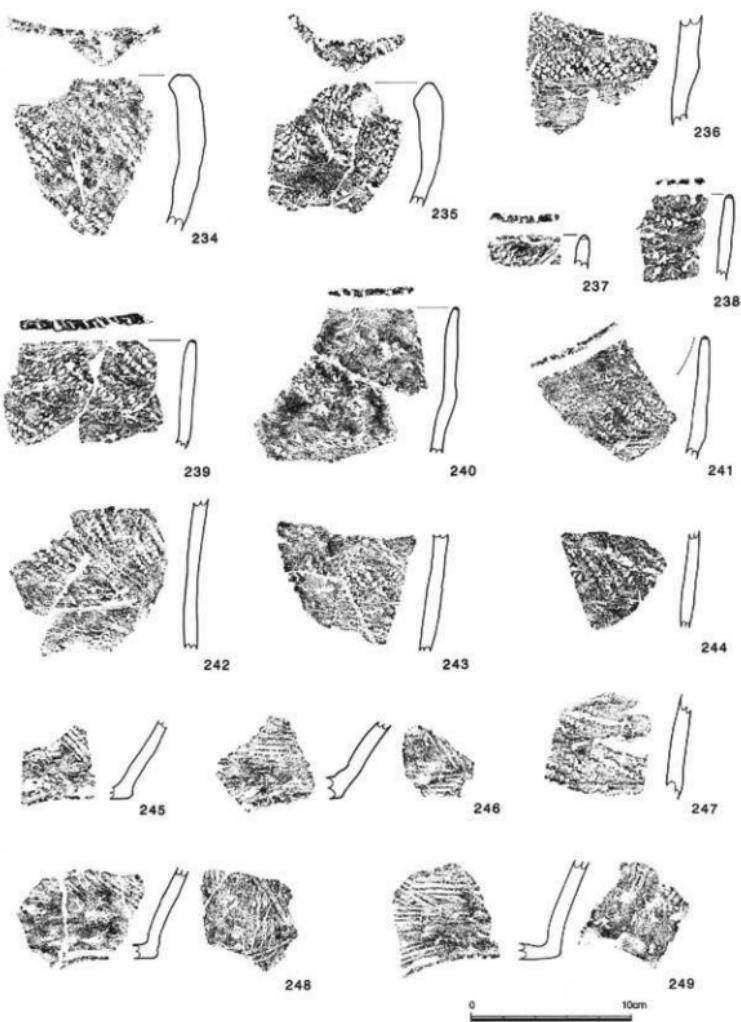
第22図 土器実測図 6



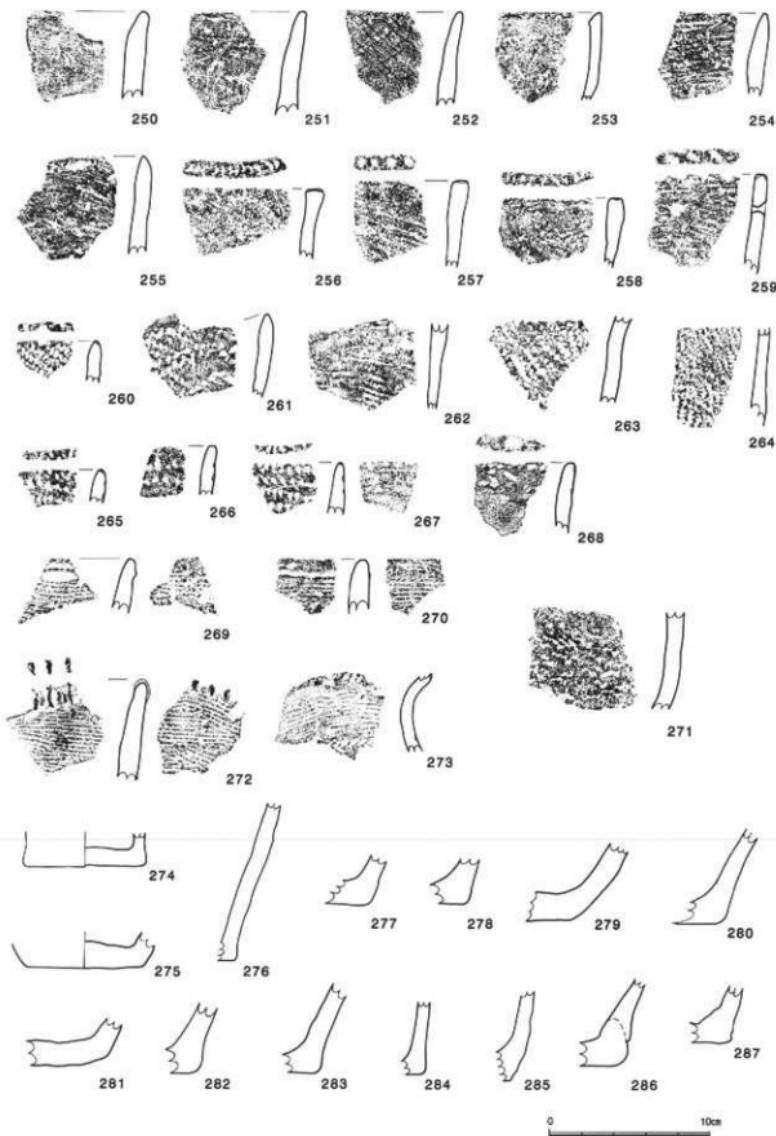
第23図 土器実測図7



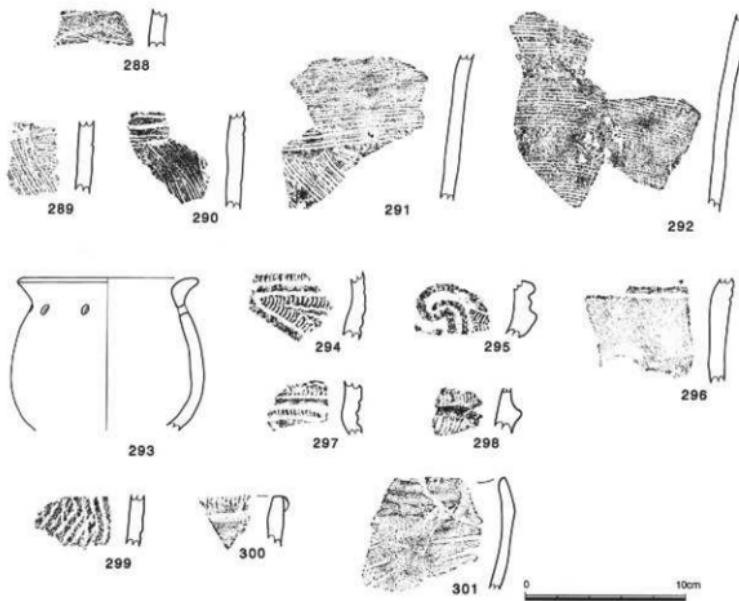
第24図 土器実測図 8



第25図 土器実測図9



第26図 土器実測図10



第27圖 土器実測図11

+



■
205

+

H-18

131.0m



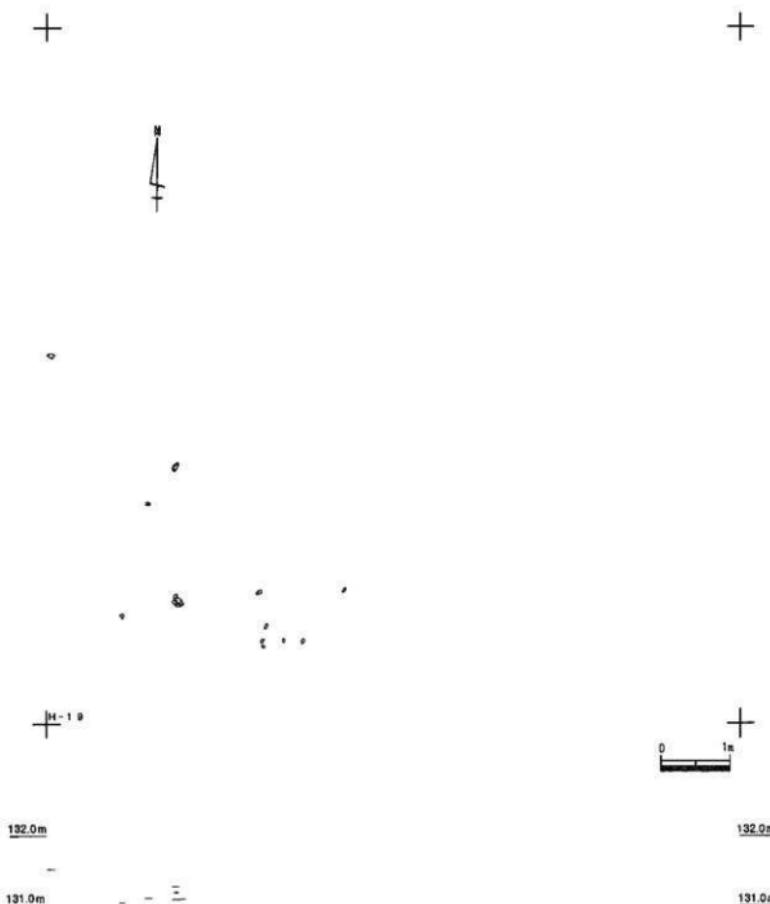
131.0m

130.0m

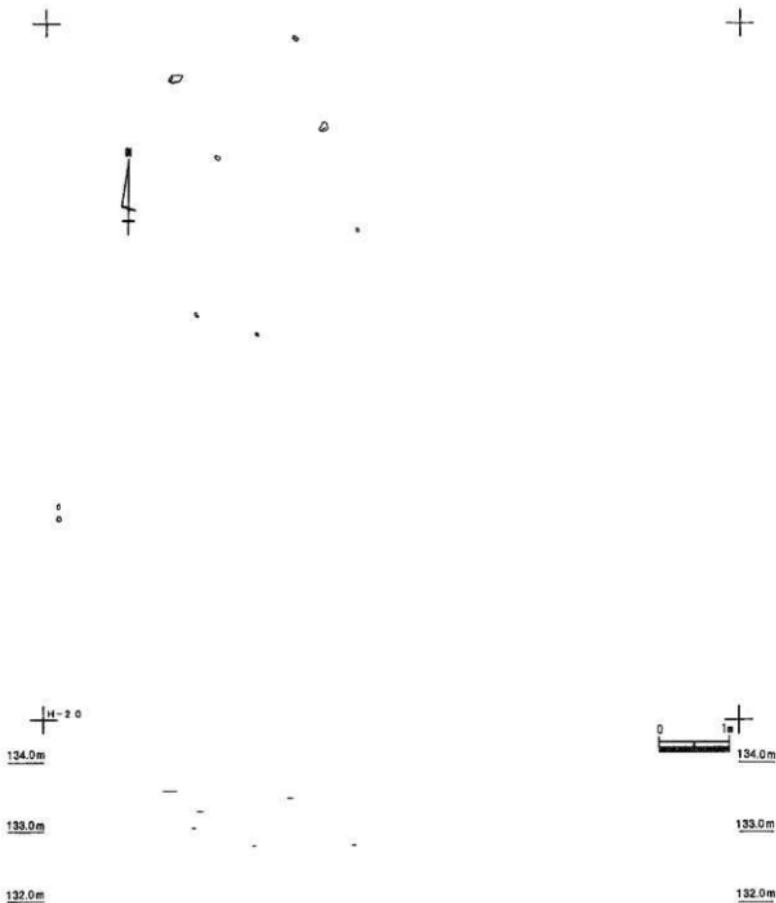


130.0m

第28図 H-18グリッド遺物出土状況図



第29図 H-19グリッド遺物出土状況図



第30図 H-20グリッド遺物出土状況図

+

+



215

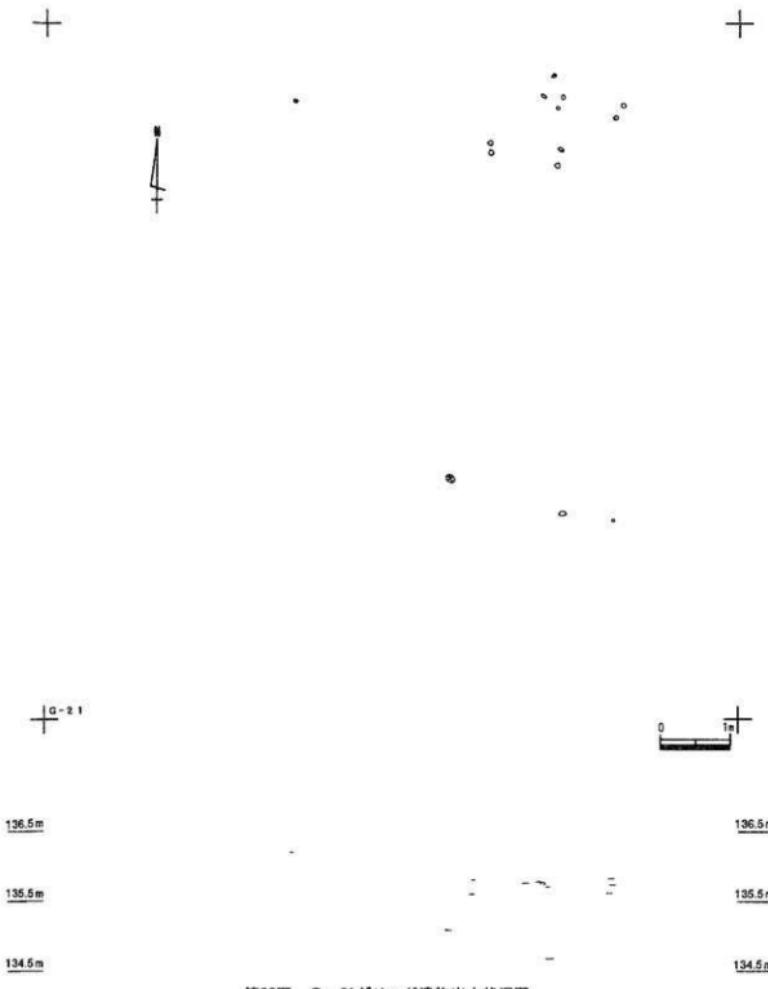
S
79

+

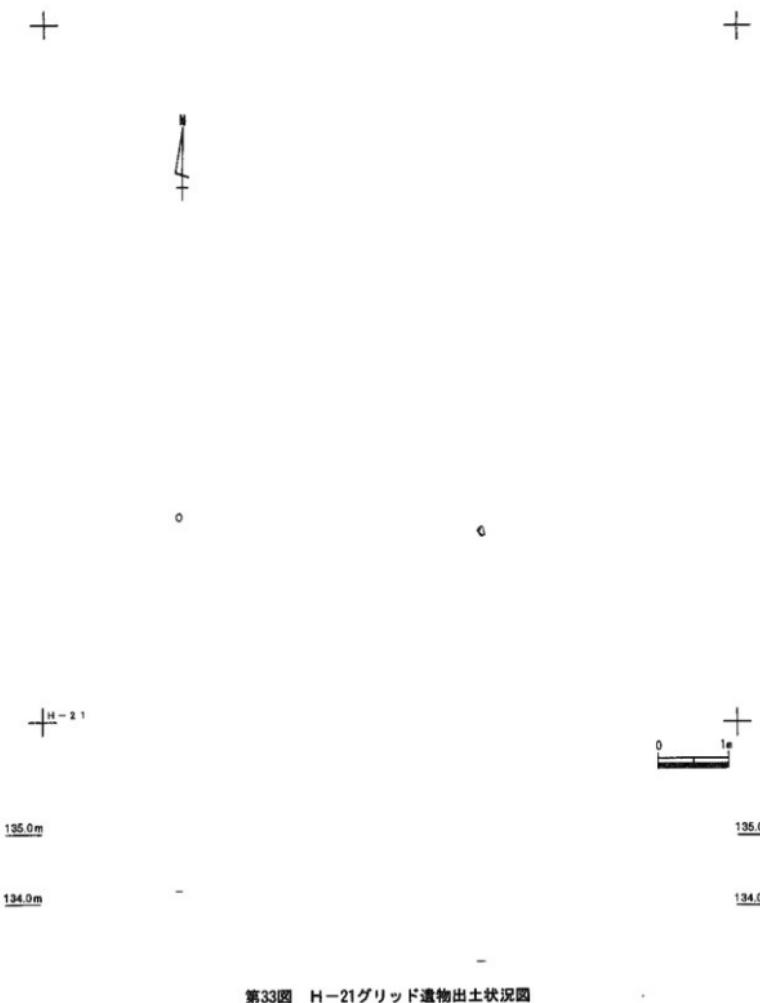
+

134.0m134.0m133.0m133.0m

第31図 G-20グリッド遺物出土状況図



第32図 G-21グリッド遺物出土状況図



第33図 H-21グリッド遺物出土状況図

+

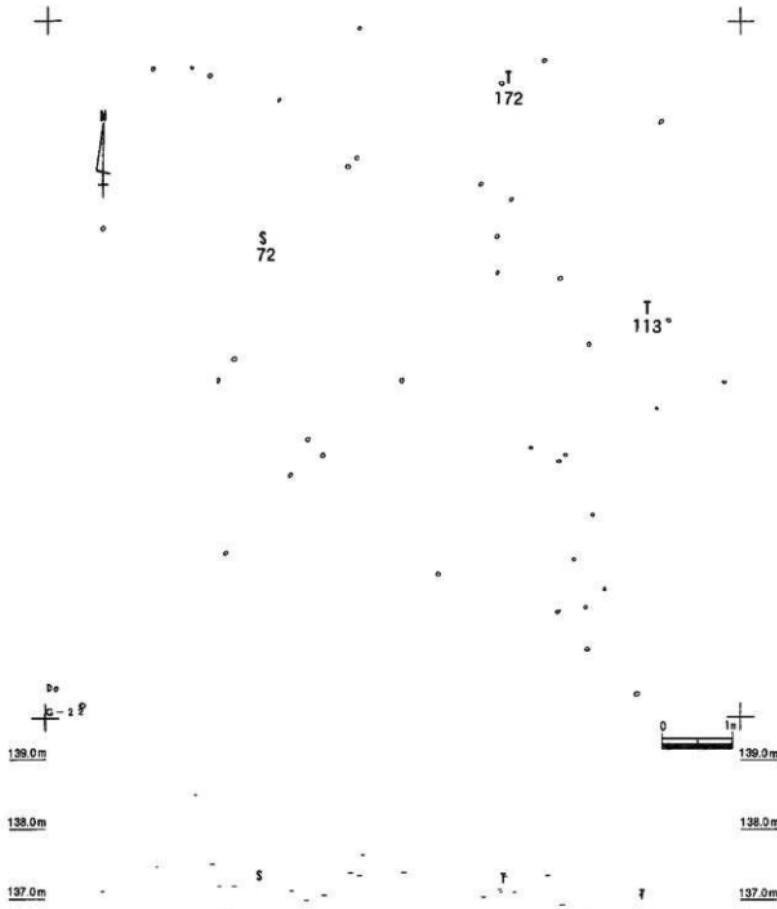
+



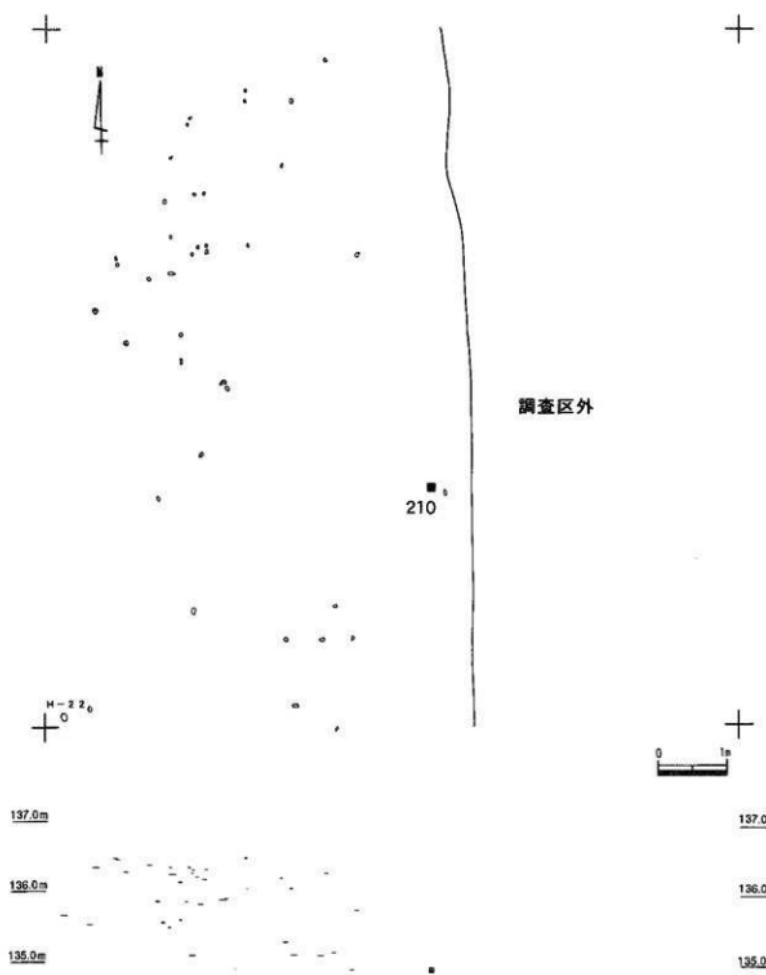
F-22

137.0m136.0m137.0m136.0m

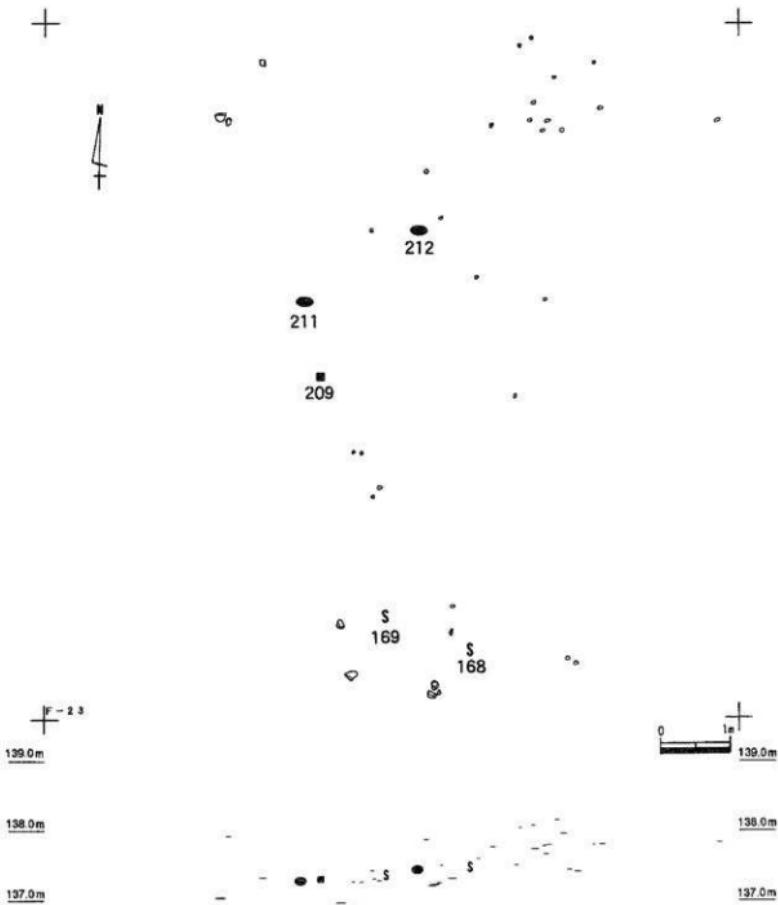
第34図 F-22グリッド遺物出土状況図



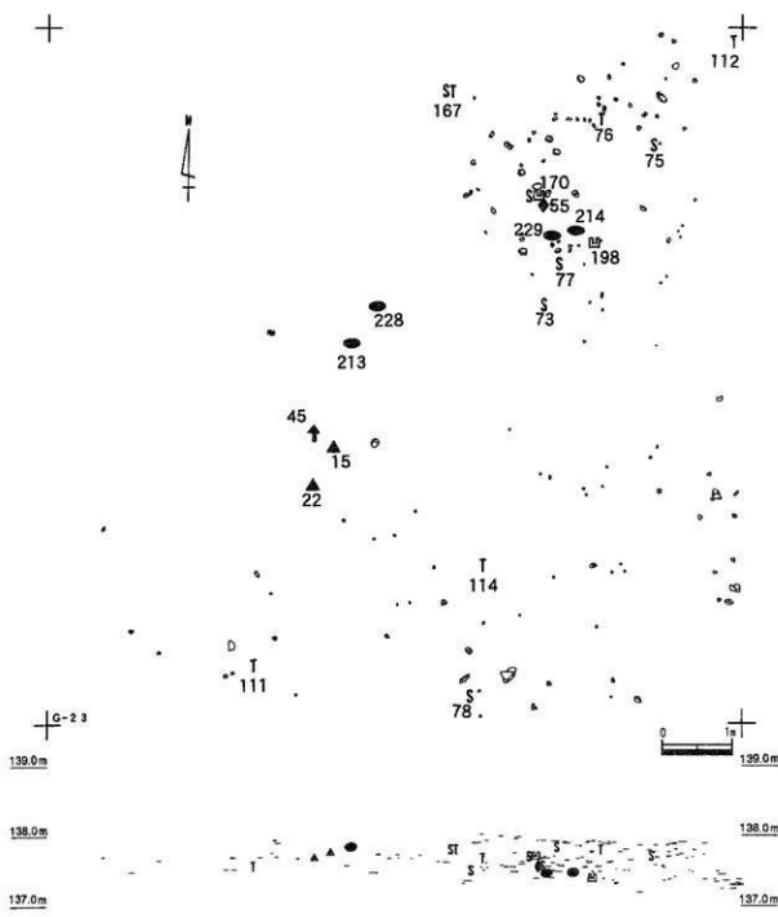
第35図 G-22グリッド遺物出土状況図



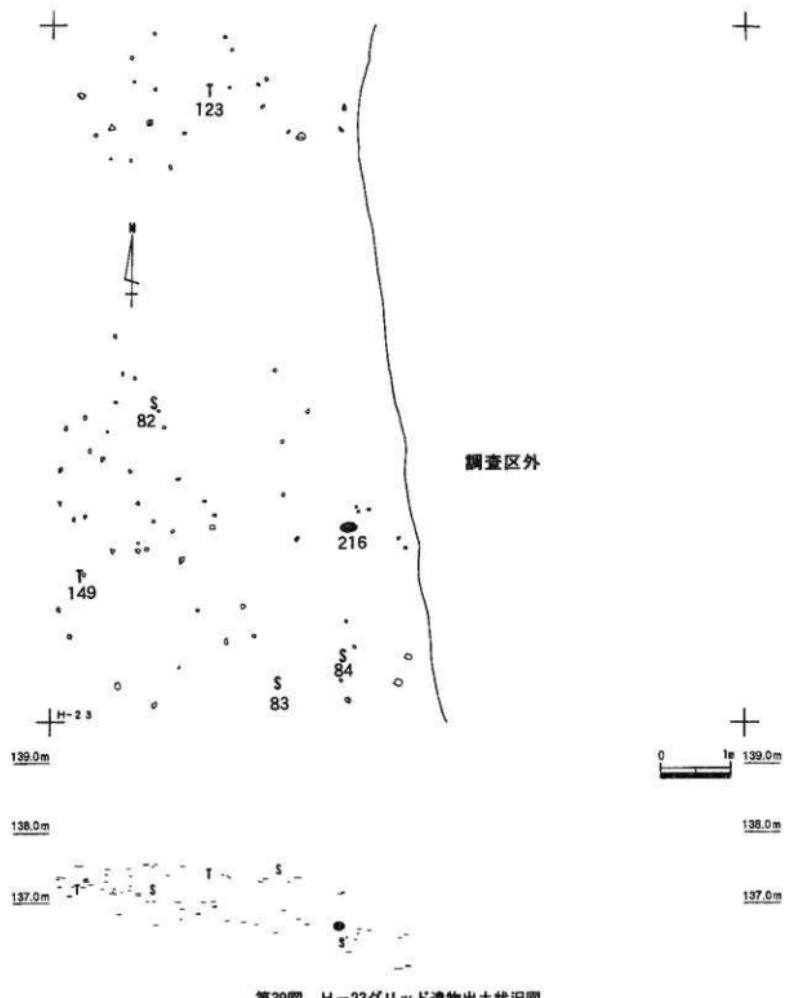
第36図 H-22グリッド遺物出土状況図



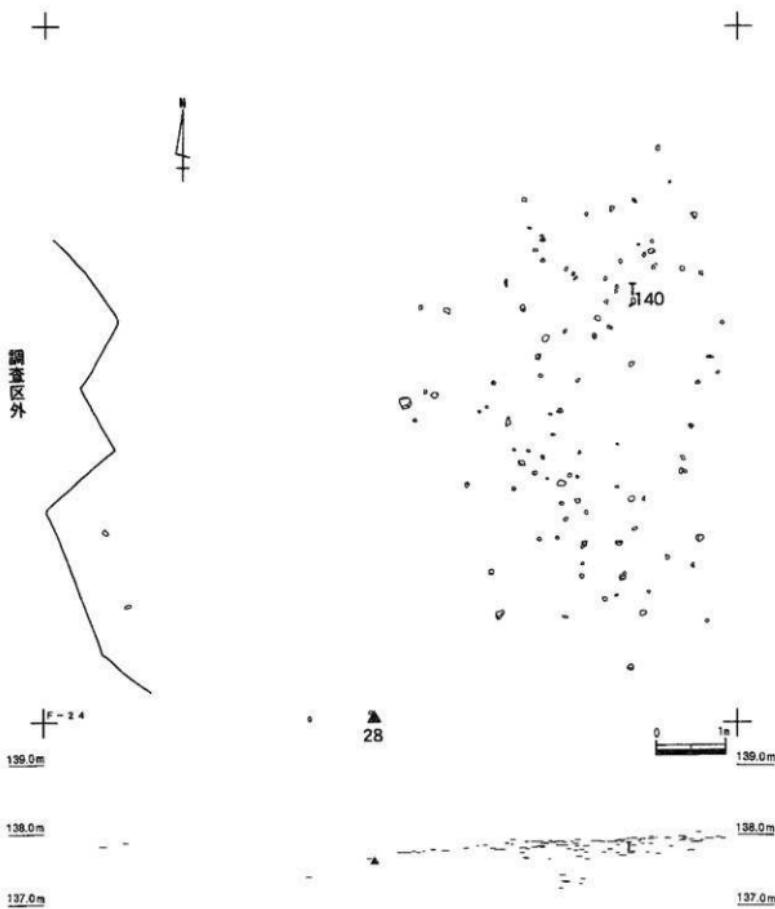
第37図 F-23グリッド遺物出土状況図



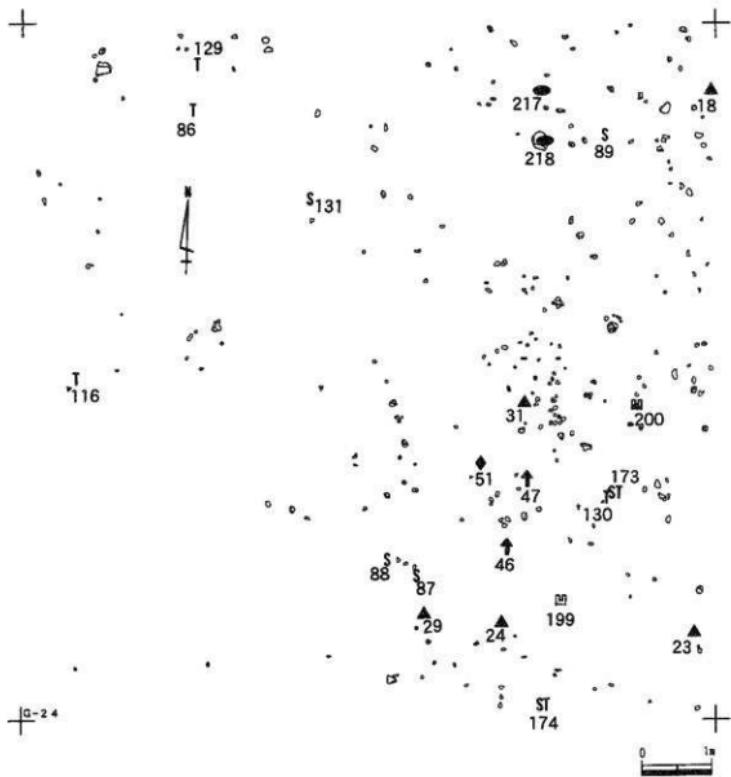
第38図 G-23グリッド遺物出土状況図



第39図 H-23グリッド遺物出土状況図



第40図 F-24グリッド遺物出土状況図



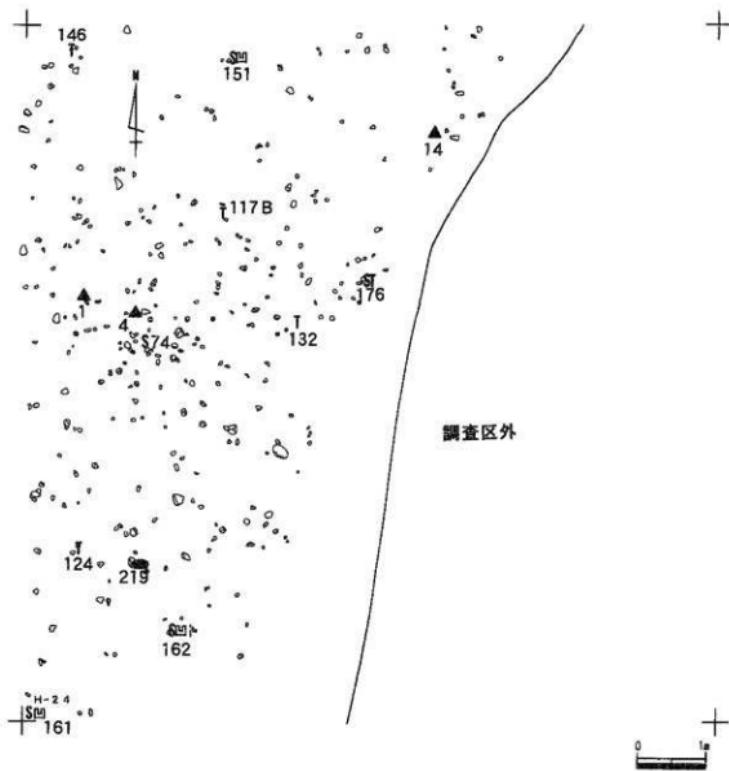
138.0m

138.0m

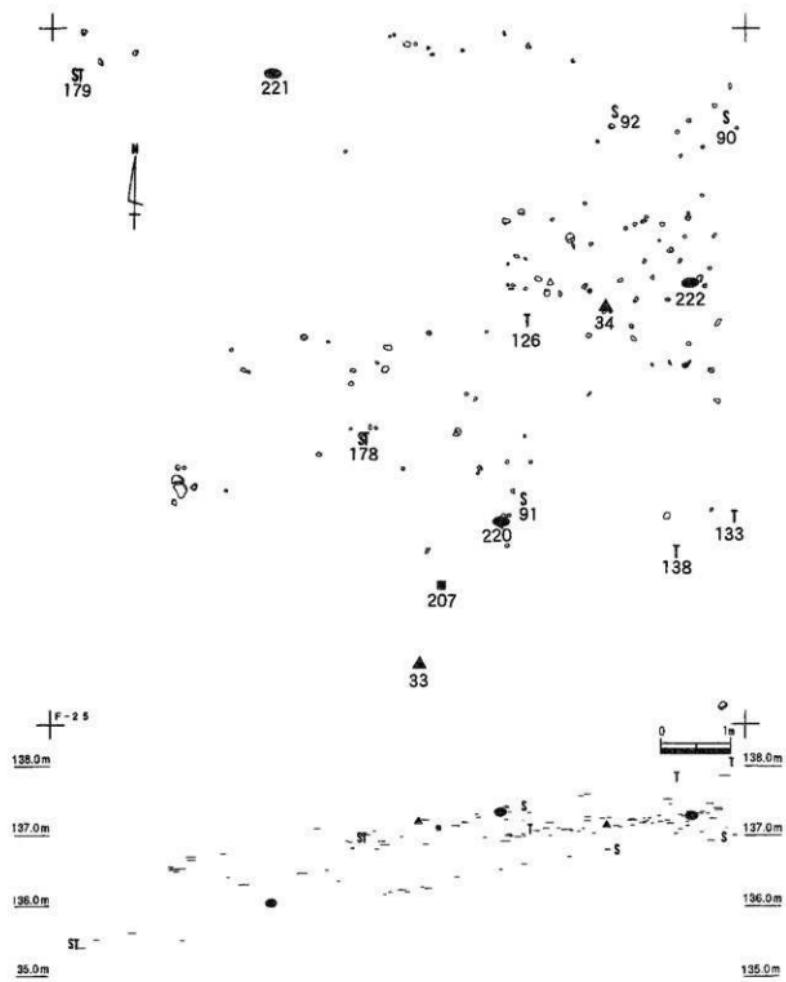
138.0m

138.0m

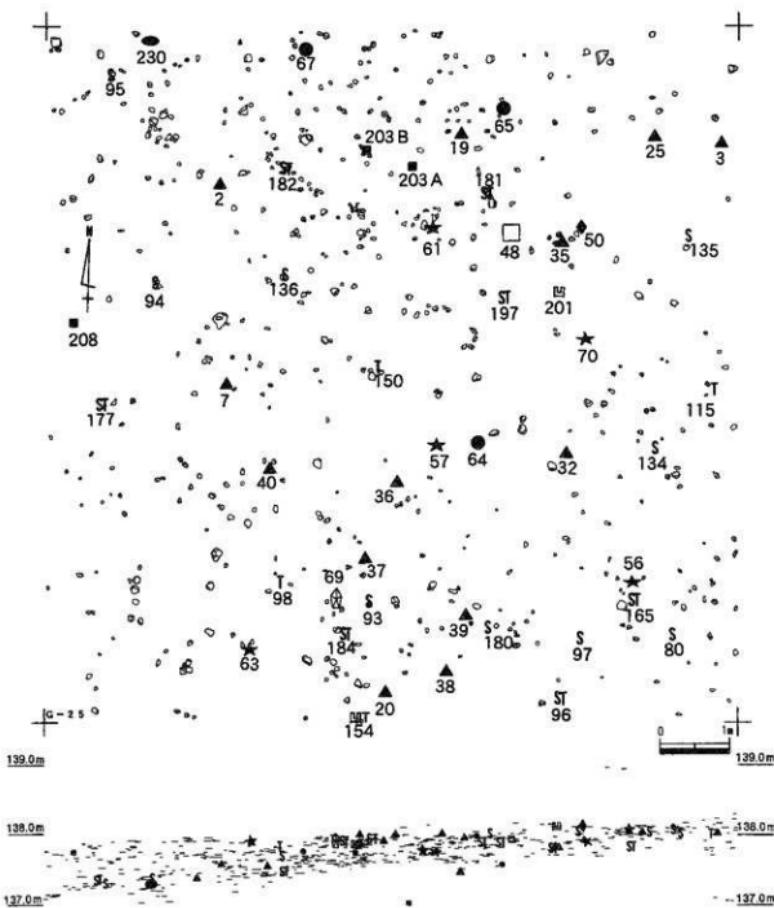
第41図 G-24グリッド遺物出土状況図



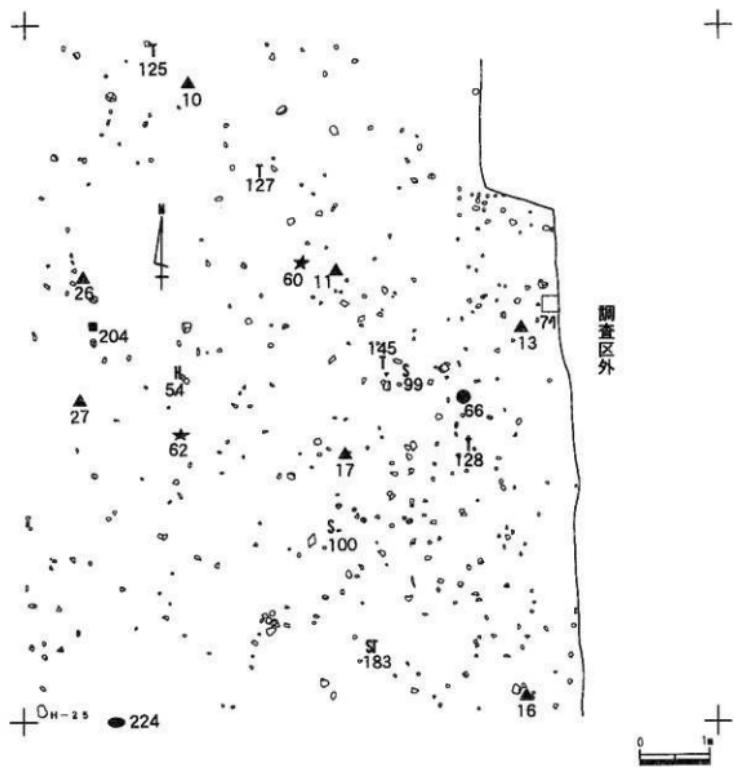
第42図 H-24グリッド遺物出土状況図



第43図 F-25グリッド遺物出土状況図



第44図 G-25グリッド遺物出土状況図



139.0m

139.0m

138.0m

138.0m

第45図 H-25グリッド遺物出土状況図

223

226

34.0m

A scale bar diagram. The left side has tick marks at 0 and 1m. The right side has a horizontal line with tick marks at 0 and 134.0m. A vertical crossbar extends from the 1m mark to the 134.0m mark.

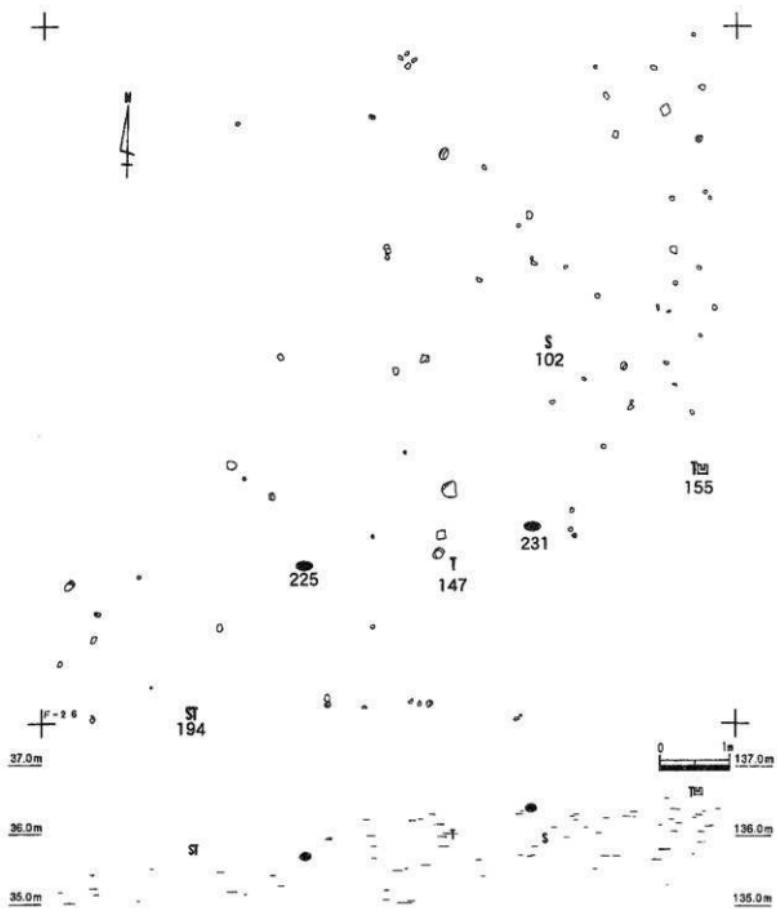
33.0 m

133.0m

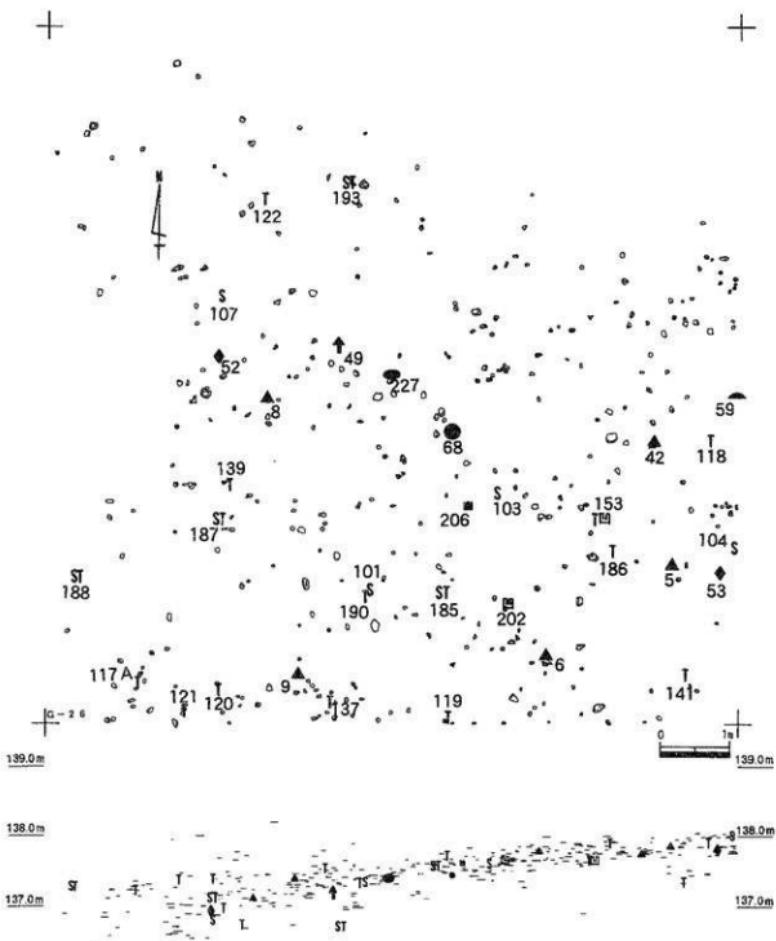
132.0m

132.0m

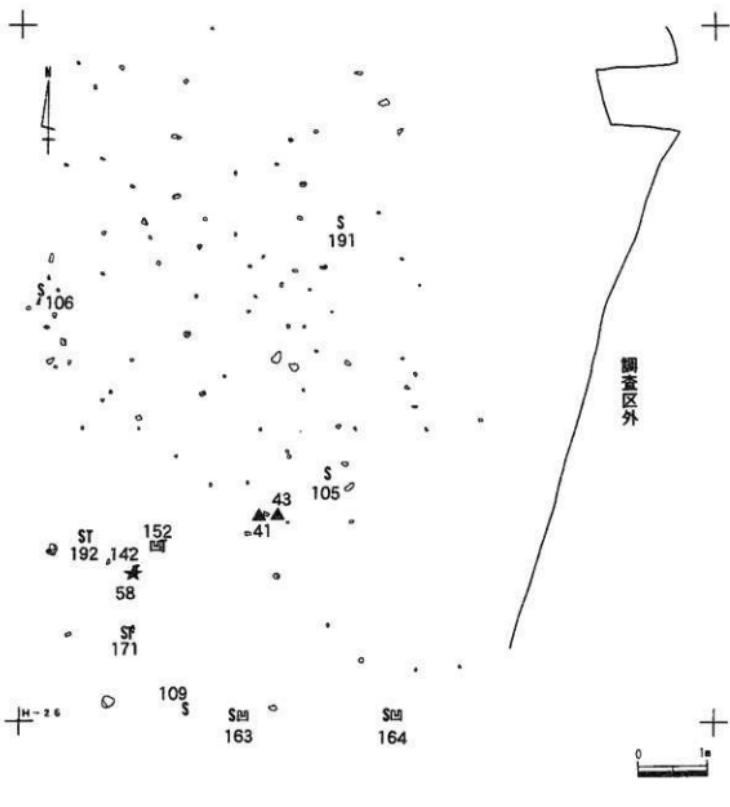
第46図 E-26グリッド遺物出土状況図



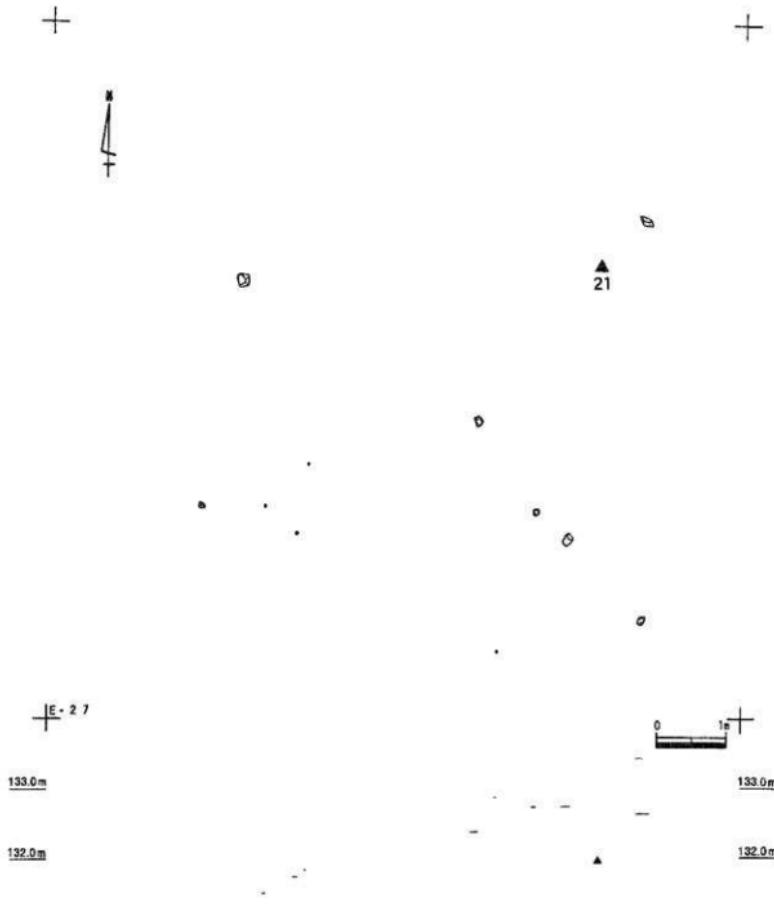
第47図 F-26グリッド遺物出土状況図



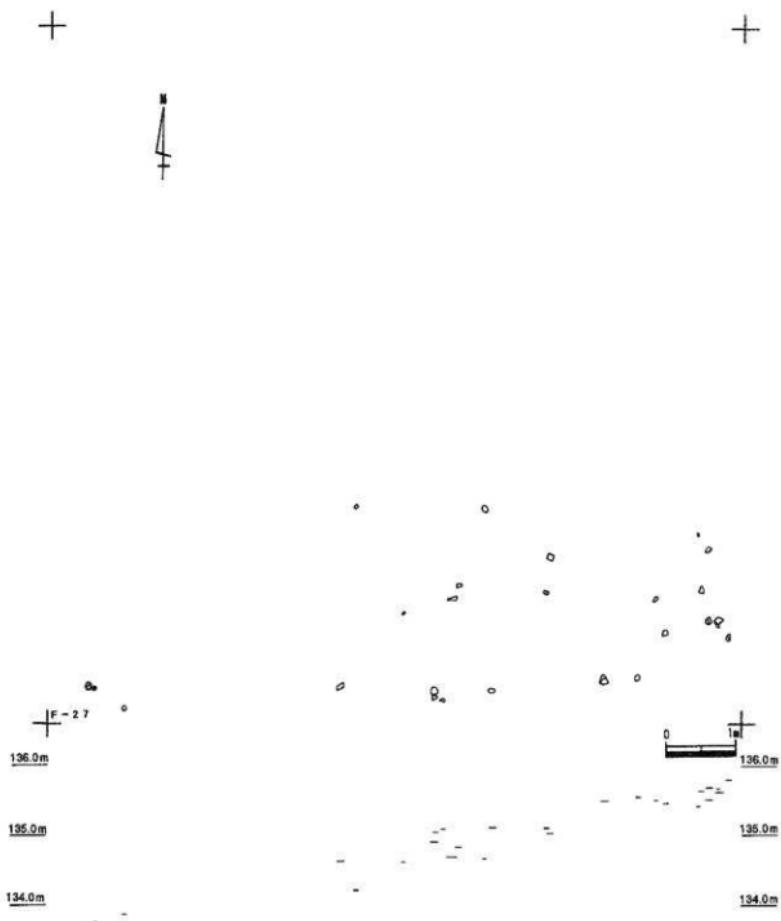
第48図 G-26グリッド遺物出土状況図



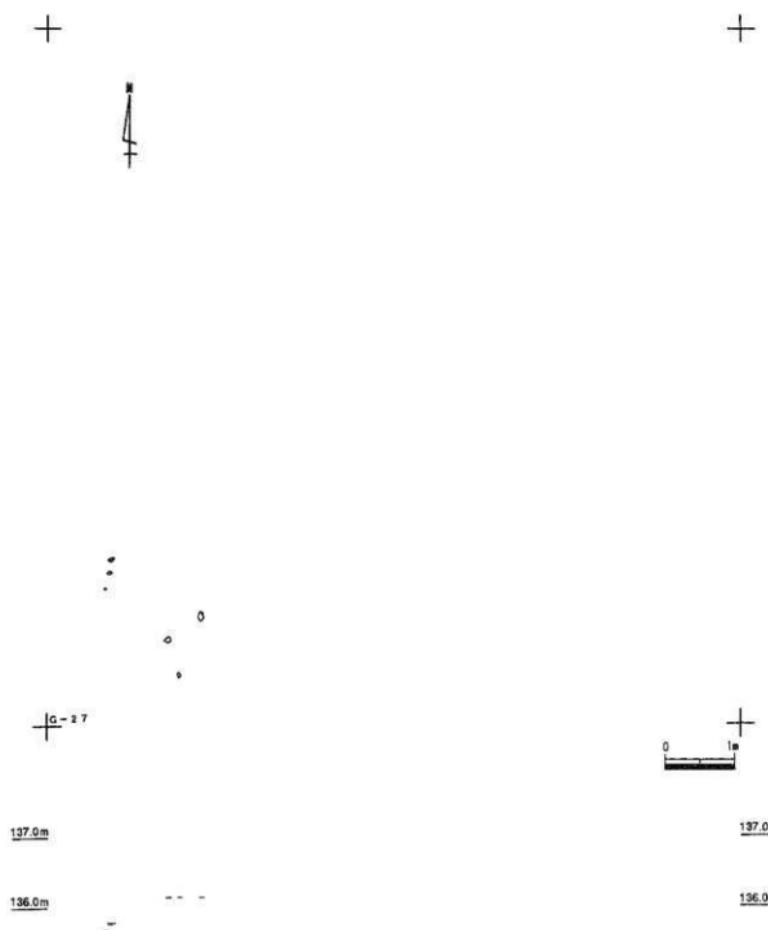
第49図 H-26グリッド遺物出土状況図



第50図 E-27グリッド遺物出土状況図



第51図 F-27グリッド遺物出土状況図



第52図 G-27グリッド遺物出土状況図

+

+



調査区外



138.0m

139.0m

138.0m

138.0m

A

第53図 H-27グリッド遺物出土状況図

石 器

石器は231点を図示した。

石器は43点を図示した。形態的には凹基式（1・2・3・4・5・7・9・11・12・13・14・16・17・18・19・20・21・22・23・25）が主体を占め（46%）、平基式（29・30・31・32・35・36・40）7点（16%）と凸基式（27）1点（2%）が僅かに含まれる。

完形品の法量は長さ3.05～1.15cm、幅1.7～1.1cm、重さ1.3～0.3gの範囲にあり、重量の分布を概観すると1.3～0.9gと0.6～0.3gに集中する傾向にあった。

残存状況をみると完形品（3・5・7・9・17・18・19・20・23・25・29・30・31・32・35・36）が16点（34%）とやや少なく、欠損品は30点（65%）を占める。欠損部位は、頭部（12・21・22・40）4点、頭部と両脚（6・11・26・28・41）5点、頭部と片脚（10・15・33・39）4点、片脚（1・2・14・16・24・34）6点、頭部と凸基（27）1点、両脚（4・13・37・38）4点、片側一側縁（43）1点、脚部（42）1点と多様な欠損部位を示しているが頭部の欠損を含むものは欠損部位の46%を占める。この他、未製品（8）がある。

両面加工石器

44は自然面を残す剥片を素材とし、表裏面に粗い細部加工を施す。周辺部に細かな剥離が行われず、かなり肉厚であることから尖頭器の未製品と思われる。

有舌尖頭器

45は細身の有舌尖頭器。表裏面全体に入念な調整加工を施し、両側縁を鋸歯状に整える。断面形はレンズ状で先端部と基部を欠損する。

46は形状や調整加工の様子から石器の可能性がある。

47は表裏面にやや粗い細部加工を施す有舌尖頭器である。両側縁は細かな剥離で直線状に整え先端部と基部を欠損する。

49は表裏全面に丁寧な調整加工を施した有舌尖頭器である。先端部は両側縁からの細かな剥離で鋭く整える。基部は逆三角形を呈し、両側縁まで直線的に張り出す。断面形はレンズ状である。

石 核

48は小型の亜角礫を素材とした石核で正面を剥片剥離作業面とする。打面は上下に設定され、自然面を利用している。剥離作業面の剥離痕を見ると不定型な剥片が剥離されたと思われる。

楔形石器

50は上面を打面とする細部調整が認められ、縦長剥片の両側縁を利用した削器の可能性もある。

51は上下両端部に線状の潰れがあり、対向する剥離が認められる楔形石器。一部に素材の原礫面を残す。

52は幅の広い剥片を素材とする両面加工の石器で両側縁は裏面側から細かい剥離により直線的に整える。左側縁は微細な潰れが観察できる。削器的な用途も考えられる。

53は使用痕のある剥片。

54は左側縁に裏面側からの細部調整が認められ楔形石器を転用した削器と思われる。

55は密集するリングや線状に潰れた打面に特徴がある楔形石器の破片である。

56は亜角礫面が残る剥片を素材とする削器で表裏面側から入念な調整が行われ刃部を作出する。刃部は一部摩耗が認められる。

57は不定型な剥片を素材とする小形の削器で表裏両面側からの細かな剥離により刃部を作出する。

58は欠損が著しく詳細不明。

59は裏面に大きく素材のポジ面を残す楔形石器で上下両端に線状の潰れが観察できる。

60は幅の広い剥片の端部に表裏面側からの細かい調整が認められ、左側縁を欠損する。
61は一部に搔器のエッジが認められることから刃部再生剥片か。

62は分厚い剥片の端部に裏面側からの調整剥離により一部にスクレイバーエッジを作出したもの。
63は分厚い剥片の端部に抉状のスクレイバーエッジを作出している。

64~67は石礫の一部。
68~70は二次加工剥片。

磨石・敲石

磨面の様子により

曲面的な磨面

・磨面だけ 73・74

・側縁に敲打痕

・凹 石

平面的な磨面

・曲面的磨面 側面が平面的磨面

・全て平坦磨面

1 敲打痕無し 72

2 敲打痕

3 敲打痕と凹石

打製石斧

203と204は扁平な円礫を素材とした打製石斧である。203は両側縁を表裏面側からの調整剥離と入念な敲打により断面が円形になるように整えられるほぼ完形品。刃部は表面側から細かな剥離で作出され、使用による摩耗が認められる。204は表面側からの調整剥離と一部敲打により小判型に整えられる。刃部は表面側から細かな剥離で作出され、使用による摩耗が認められる。完形品。

205は円礫面が残る厚い剥片を素材とした半両面加工の石器で主にネガ面側からの調整により整えられる。比較的大きな剥離が多く、周辺部に細かな調整が認められないことから44に類似した素材ではないだろうか。

磨製石斧

扁平な円礫を素材とした磨製石斧で表裏面に調整剥離を残す。ほぼ全面を研磨しているが風化が著しいことから細部は不明。刃部は両凸刃で摩耗が認められる。

207は小形の磨製石斧ではほぼ全面を研磨するが裏面を中心に調整剥離が残る。刃部は弱凸強凸片刃。

208は扁平な円礫を素材とした磨製石斧で左側縁は裏面側からの調整剥離と入念な研磨により両側縁が平行するように整えられ、ほぼ全面が研磨が及ぶ。刃部は弱凸強凸片刃に研磨される。

209は磨製石斧の刃部破片である。表裏面に研磨痕が著しい。

石皿・台石

232は縦長剥片を素材とし基部両側縁と刃部右側縁にプランティングを施す。素材の打面を残置し基部右側縁の調整は一部対向剥離である。

233は縦長剥片を素材とし右側縁基部側と左側縁に浅い角度のプランティングが施される。左側縁基部側は折面を利用して平坦な調整、素材の打面は表面側からの剥離で除去される。

234・236・237は石刃状剥片。

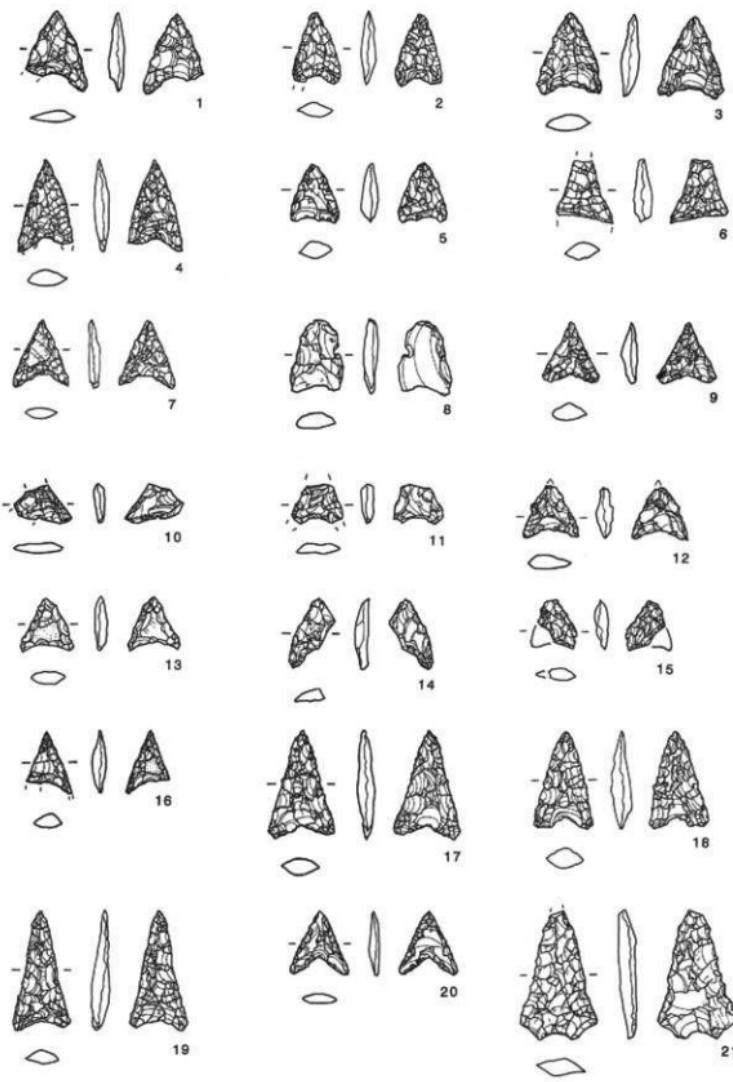
235は肉厚の縦長剥片。

第4表 石器観察表

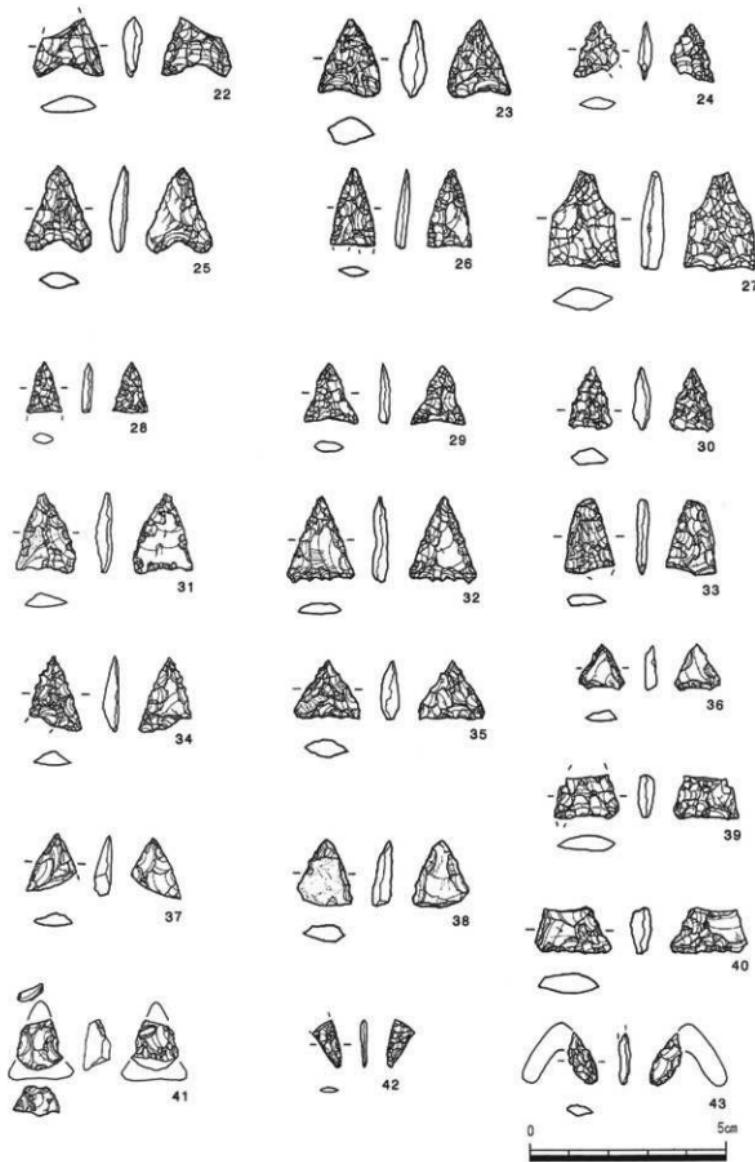
器種番号	グリッド	遺跡番号	場所	石種	最大幅cm	最大奥行きcm	最大厚cm	重量g	X軸(東→北) Y軸(西→東)	標高m	備考
2	H-2-4	25	F.B	石英	1.05	1.55	0.55	0.70	246.101	70.460	137.796
2	G-2-5	180	F.B	石英	1.80	1.20	0.40	0.60	235.925	62.571	137.366
4	G-2-3	181	F.B	石英	2.10	1.70	0.45	1.00	258.245	63.025	138.026
4	H-2-4	3	F.B	石英	2.30	1.40	0.40	0.90	245.850	71.170	137.603
5	G-2-5	15	F.B	石英	1.50	1.30	0.45	0.60	262.295	69.036	137.789
5	G-2-8	15	F.B	石英	7.60	3.55	0.75	23.20	266.270	62.340	134.845
5	G-2-5	17	F.B	石英	1.55	1.40	0.45	0.77	260.875	67.140	137.579
7	G-2-5	183	F.B	石英	1.70	1.40	0.25	0.40	254.817	62.870	137.579
8	G-2-5	27	F.B	硬度未知	1.65	1.40	0.35	0.80	264.854	63.235	137.121
9	G-2-5	42	F.B	石英	1.60	1.50	0.40	0.50	260.726	63.669	137.345
10	H-2-5	14	F.B	石英	1.00	1.50	0.30	0.30	259.160	72.380	136.288
11	H-2-5	62	F.B	石英	1.00	1.30	0.30	0.40	256.451	74.534	136.179
12	G-2-3	周	Y.L.U	石英	13.00	14.00	4.60	0.40			
13	H-2-5	109	F.B	硬度未知	1.30	1.40	0.30	0.50	255.659	72.199	137.998
14	H-2-4	34	F.B	石英	1.80	1.15	0.35	0.40	248.495	75.872	137.640
15	H-2-5	97	F.B	石英	(12.00)	(10.00)	(4.00)	(0.10)	253.862	74.102	137.756
16	H-2-5	82	F.B	石英	1.60	1.15	0.40	0.40	250.385	77.286	137.625
17	H-2-5	126	F.B	石英	2.75	1.70	0.45	1.20	253.847	74.675	137.835
18	G-2-4	89	F.B	石英	2.40	1.50	0.50	1.20	249.118	69.981	137.782
19	G-2-5	307	F.B	CH	3.05	1.48	0.45	1.20	258.442	66.025	137.439
20	G-2-5	99	F.B	石英	1.60	1.50	0.25	0.30	250.406	64.540	137.858
21	E-2-7	4	F.B	CH	3.30	2.00	0.45	2.30	276.570	48.000	131.946
22	G-2-3	527	F.S	石英	1.50	1.90	0.40	0.80	233.419	63.970	137.725
23	G-2-4	71	F.B	石英	2.00	1.60	0.60	1.30	241.242	68.733	137.767
24	G-2-4	25	F.B	石英	1.50	1.15	0.30	0.30	241.340	68.980	136.035
25	G-2-5	23	F.B	CH	2.20	1.20	0.45	1.00	258.380	68.000	136.008
26	H-2-5	140	F.B	石英	2.00	1.10	0.30	0.50	256.320	70.410	136.031
27	H-2-5	134	F.B	石英	2.45	1.80	0.60	2.00	254.590	70.010	136.008
28	F-2-4	15	F.B	石英	1.30	0.90	0.30	0.20	246.914	54.099	137.622
29	G-2-4	34	F.B	石英	1.50	1.40	0.30	0.30	241.520	65.840	137.932
30	G-2-4	96	F.B	石英	16.00	11.00	4.50	0.40			
31	G-2-4	97	F.B	石英	2.00	1.60	0.50	0.90	244.160	67.311	137.811
32	G-2-5	169	F.B	石英	2.20	1.70	0.40	1.00			
33	F-2-5	2	F.B	石英	1.50	1.80	0.40	0.60	251.080	55.340	137.245
34	F-2-5	22	F.B	石英	1.90	1.35	0.40	0.60	258.974	56.022	137.213
35	G-2-5	174	F.B	CH	1.60	1.70	0.45	0.90	256.485	67.480	137.846
36	G-2-5	35	F.B	石英	1.15	1.15	0.30	0.30	253.399	65.120	137.984
37	G-2-5	45	F.B	石英	1.90	1.30	0.40	0.50	252.330	64.660	137.905
38	G-2-5	49	F.B	硬度未知	1.70	1.40	0.40	1.00	250.700	65.830	137.950
39	G-2-5	54	F.B	石英	1.10	1.65	0.40	0.70	251.500	65.110	137.869
40	G-2-5	162	F.B	石英	1.20	1.90	0.50	1.00	253.611	63.244	137.562
41	H-2-6	3	F.B	石英	(19.00)	(12.00)	(6.00)	(0.60)	262.970	73.900	136.268
42	G-2-6	19	F.B	石英	1.20	0.75	0.15	0.18	246.015	68.766	137.736
43	H-2-6	13	F.B	石英	(13.00)	(8.00)	(3.00)	(0.10)	262.872	73.746	136.124
44	H-2-7	1	硬度未知	同属加工石器	10.00	5.30	2.75	12.50			大刀頭の本體
45	G-2-3	29	F.B	硬度未知	2.20	1.10	0.40	1.10	234.148	63.873	137.823
46	G-2-4	32	F.B	青玉	1.75	0.90	0.45	0.60	242.280	66.970	137.845 石劍か
47	G-2-4	27	F.B	硬度未知	2.20	1.60	0.55	1.80	245.400	67.320	136.210
48	G-2-5	22	F.B	石英	45.00	27.50	20.00	20.70	256.990	66.730	137.940
49	G-2-5	26	F.B	硬度未知	6.10	1.80	0.75	6.50	265.423	64.135	137.201
50	G-2-5	10	F.B	ビニス	37.50	43.00	12.00	18.30	287.320	67.760	136.104 紋面か
51	G-2-4	47	F.B	硬度未知	4.80	3.10	0.85	12.40	243.650	66.560	136.221
52	G-2-8	8	F.B	硬度未知	7.60	3.50	0.75	23.20	265.370	62.480	136.985
53	G-2-6	24	ガラス質莫高島安山岩	ビニス?	5.75	4.30	0.70	27.00	262.160	66.888	137.826
54	H-2-5	11	F.B	ビニス	30.00	18.00	7.00	2.87	265.030	72.220	136.122 紹介か
55	G-2-3	571	F.B	ビニス	24.00	16.00	7.60	2.20			
56	E-1-1	1	硬度未知	スクリッパー	47.00	84.5	16.00	28.30			
57	G-2-5	312	F.B	スクリッパー	1.60	2.25	0.65	1.80	293.350	65.700	137.708
58	H-2-6	25	F.B	スクリッパー	24.00	17.50	9.50	2.30			不規
59	G-2-6	58	F.B	スクリッパー	53.00	40.00	1.15	15.40	264.789	69.885	137.786
60	H-2-5	137	F.B	スクリッパー	36.5	24.00	9.00	19.60	253.390	70.240	138.086
61	G-2-5	85	F.B	スクリッパー	31.00	15.00	8.00	5.20	267.056	65.600	137.863 刃部再生削りか
62	H-2-5	72	F.B	スクリッパー	27.50	34.00	15.50	11.30	252.270	74.130	137.914
63	G-2-5	106	F.B	スクリッパー	35.50	35.00	16.00	15.30	261.060	62.970	137.792
64	G-2-5	68	*	石片	1.00	1.15	0.35	0.40	253.970	66.290	137.908 石劍の一部
65	G-2-5	287	*	石片	1.25	0.80	0.25	0.30	258.434	66.432	137.563 石劍の一部
66	G-2-5	320	*	石片	1.20	0.80	0.15	0.10	259.746	63.718	137.444 石劍の一部
67	G-2-6	58	F.B	硬度未知	1.35	1.10	0.45	0.40	263.672	63.883	137.261 石劍の一部
68	H-2-5	45	*	硬度未知	3.00	1.40	0.60	3.00	254.873	76.354	136.020 二次加工削片
69	G-2-5	53	*	硬度未知	2.70	2.40	0.65	3.90	251.710	64.230	137.964 二次加工削片
70	G-2-5	165	*	石片	2.00	2.55	0.40	1.60	255.326	67.782	137.887
71	H-2-5	152	F.B	硬度未知	55.00	141.00	114.50	1228.47			
72	G-2-2	1	Y.L.U	磨石	113.00	100.50	65.00	1238.00	236.200	67.170	137.571
73	G-2-5	589	*	磨石	(86)	(93)	(52)	(236.8)	227.700	61.640	137.177
74	H-2-4	65	寶石	磨石	(84)	(62)	(47)	(235.3)			
75	G-2-5	547	*	寶石	(67.5)	(87.0)	(40.0)	(281.7)	238.302	68.724	137.733
76	C-2-5	550	*	寶石	(67.5)	(26)	(35)	(73.2)	238.690	67.970	137.859
77	G-2-3	564	*	寶石	(57.5)	(107.5)	55.00	(556.0)	238.400	67.370	137.775
78	G-2-3	565	*	寶石	(60.0)	(80.5)	(47.0)	(345.4)	230.400	66.130	137.496
79	G-2-0	2	K.u	寶石	(45)	48.00	38.00	(104.3)	205.332	65.281	133.106
80	E-1-1	9	F.B	寶石	52.50	53.00	47.00	182.90			

81	C - 2 3		麻石安山岩	麻石	(77.00)	(162.00)	(63.00)	(193.60)				
82	H - 2 3	16	F B	安山岩	麻石	(78.5)	59.50	48.00	(262.2)	234.570	71.480	137.238
83	H - 2 3	26	F B	安山岩	麻石	(60.0)	88.00	30.00	214.90	230.490	73.270	137.495
84	H - 2 3	28	F B	麻石安山岩	麻石	(82.00)	(73.00)	(32.00)	(209.50)	230.978	74.424	136.475
85	H - 2 3		安山岩真武岩	麻石	103.00	93.50	47.00	670.90				
86	G - 2 4	4	F B	安山岩	麻石	(66.5)	52.50	43.00	(257.9)	248.730	61.490	137.856
87	G - 2 4	43	F B	安山岩	麻石	73.50	59.50	35.00	228.60	242.100	66.700	138.077
88	G - 2 4	45	F B	安山岩	麻石	(69)	62.50	55.00	280.80	242.300	65.300	137.879
89	G - 2 4	65	F B	安山岩	麻石	52.00	48.50	32.00	136.40	245.380	68.420	136.076
90	F - 2 5	39		安山岩	麻石	61.50	50.00	44.40	182.10	268.740	59.750	137.099
91	F - 2 5	26		安山岩	麻石·砾石	(89.5)	(63)	(34)	(246.4)	263.230	56.840	137.430
92	F - 2 5	38		安山岩	麻石	(115.5)	88.00	51.00	(681.1)	254.790	58.130	136.859
93	G - 2 5	334	F B	麻石安山岩	麻石	(55.00)	(62.00)	(31.00)	(184.10)	261.690	64.720	137.922
94	G - 2 5	227	F B	麻石安山岩	麻石	(99.00)	(92.00)	(49.00)	(322.40)	256.300	61.600	137.365
95	G - 2 5	328	F B	麻石安山岩	麻石	(91.00)	(85.50)	(42.00)	(242.50)	268.300	60.950	137.250
96	G - 2 5	59	*	安山岩	麻石·砾石	74.50	63.00	43.00	223.10	250.340	57.430	137.561
97	G - 2 5	60	*	安山岩	麻石	(93)	86.00	42.00	(446.8)	261.170	67.760	137.584
98	G - 2 5	74	*	安山岩	砾石	(60.5)	63.00	50.00	(226.5)	252.010	63.440	137.423
99	H - 2 5	144		安山岩	麻石·砾石	(45.8)	(85)	(40)	(23.4)	265.000	75.560	137.569
100	H - 2 5	143		安山岩	麻石·砾石·一 年	(72.5)	(33)	(40)	(96.5)	262.790	74.480	137.927
101	G - 2 6	36		砂岩	麻石	(44.5)	74.00	(37)	(146.7)	261.800	64.700	137.566
102	F - 2 6	12		砂岩	麻石	116.50	84.00	60.00	884.80	265.410	57.310	136.580
103	G - 2 6	41		砂岩	麻石	63.00	56.50	31.00	164.30	268.350	58.550	137.672
104	G - 2 6	56		砂岩	麻石	87.00	74.00	37.00	417.70	262.493	69.880	136.014
105	H - 2 6	8		露岩真武山岩	麻石·砾石	(47)	(44)	(31)	(62.4)	263.590	74.470	136.599
106	H - 2 6	21	F B	砂岩	麻石	(78.5)	(40.5)	(38)	(136.9)	266.230	70.290	136.137
107	G - 2 6	65		露岩真武山岩	麻石	114.00	93.00	54.00	884.80	266.124	62.533	136.788
108	真武			露岩真武山岩	麻石	(93.6)	(53.00)	(54.00)	(309.3)			
109	H - 2 6	14	F B		麻石	127.00	100.00	68.00	1215.00			
110	H - 2 6			露岩真武山岩	麻石	88.50	87.50	37.00	329.80			
111	C - 2 3	583	*	斑状岩	麻石	(126.50)	43.50	30.00	230.90	230.820	62.990	137.598
112	C - 2 3	590	*	斑状岩	麻石	(89.50)	45.50	26.50	165.60			
113	C - 2 2	76	F B	斑状岩	麻石	(76)	56.00	(45)	(247.8)	225.850	68.660	137.148
114	C - 2 3	543	*	斑状岩	麻石	(87.5)	52.00	34.00	(446.1)	232.252	66.311	137.696
115	C - 2 5	210		斑状岩	麻石	(61)	55.00	31.00	(117.5)	264.700	59.760	137.141
116	C - 2 5	55	F B	斑状岩	麻石·砾石	87.60	87.00	58.50	405.50	265.000	65.200	137.502
117	H - 2 4	12		砂岩	麻石·砾石·一 年	98.50	86.00	26.50	177.80	247.340	72.880	137.615
117	G - 2 6	88		砂岩	麻石	(52)	41.00	33.00	113.70	264.073	61.360	137.321
118	G - 2 6	82		砂岩	麻石	93.00	30.50	18.00	82.30	260.100	65.860	137.663
119	G - 2 6	70		泥质岩	麻石	93.00	30.50	39.00	222.40	260.490	62.570	137.396
120	G - 2 6	60		泥质岩	麻石	(76)	86.00	47.00	(307.7)	260.220	62.030	137.056
122	G - 2 5	86		砂岩	麻石	121.85	45.00	29.50	246.80	267.577	63.170	136.703
123	H - 2 3	6	F B	砂岩	砾石·砾石·一 年	(104.0)	70	49	(472.2)	235.070	72.280	137.428
124	H - 2 4	73	F B	麻石安山岩	麻石	(77.50)	(63.50)	(54.00)	(299.00)	342.470	70.800	137.621
125	H - 2 5	147		砂岩	麻石	110.00	42.00	28.00	187.70	258.840	71.880	135.158
126	F - 2 5	24		砂岩	麻石(45.1)	99.00	44.00	22.00	140.00	258.830	56.880	137.051
127	H - 2 5	139	F B	麻石安山岩	麻石	102.00	82.50	23.00	178.5	257.920	73.400	137.884
128	H - 2 5	160	F B	麻石安山岩	麻石	97.00	36.00	22.50	108.20	264.000	76.430	137.995
129	G - 2 4	5	F B	砂岩	砾石·麻石	44.50	47.00	28.00	78.50	248.430	61.560	137.948
130	G - 2 4	50	F B	砂岩	麻石	60.00	46.00	42.00	118.00	243.190	68.490	138.007
131	G - 2 4	61	F B	砂岩	麻石	87.50	81.00	43.00	276.10	247.460	65.940	138.006
132	H - 2 4	66		砂岩	麻石	66.00	86.50	33.00	161.10			
133	E - 1 1	8		麻石安山岩	麻石	126.00	72.50	36.00	63.30			
134	G - 2 5	63	F B	麻石安山岩	麻石	88.50	82.00	40.00	566.00	253.920	68.820	137.971
135	G - 2 5	131	*	安山岩	麻石	109.00	90.00	36.00	513.90	256.970	69.290	137.909
136	G - 2 5	137	*	安山岩	麻石	(42)	40.00	30.00	(68.4)	256.410	53.510	137.642
137	G - 2 6	79		砂岩	麻石	58.50	43.50	15.00	50.80	260.349	64.140	137.462
138	F - 1 1	1	F B	安山岩真武岩	麻石	(61.00)	(84.00)	(52.00)	(319.10)			
139	G - 2 6	47		麻石安山岩	麻石	81.60	83.50	44.00	408.20	263.432	62.654	137.074
140	F - 2 4	13	F B	安山岩	麻石	(80.0)	(74.5)	(41.0)	(316.2)	246.290	58.460	137.633
141	D - 2 6	78		砂岩	麻石	(70.6)	(42.3)	(24)	82.40			
142	H - 2 6	11		泥质岩?	砾石·砾石	98.00	95.00	49.00	595.50	262.149	71.580	138.028
143	H - 2 6			麻石安山岩	麻石	107.50	76.00	40.50	542.60			
144	G - 2 4			砾石·砾石	砾石	45.00	42.00	36.00	76.30			
145	H - 2 3	158	F B	麻石安山岩	麻石	125.00	91.00	62.00	1052.90	255.170	75.400	137.971
146	H - 2 4	71	F B	砂岩	砾石	62.00	50.00	20.00	89.00	249.640	70.640	137.683
147	F - 2 6	14		安山岩	麻石	91.00	67.00	45.50	346.50	262.302	55.950	136.057
148	H - 2 5	29	F B	麻石安山岩	麻石	111.00	85.50	35.00	370.90			
149	G - 2 5	333	F B	麻石安山岩	麻石	60.00	45.00	41.00	145.30	230.130	70.430	137.246
150	G - 2 5	55	F B	安山岩	麻石	91.00	61.00	44.00	403.50	256.120	64.820	137.925
151	H - 2 4	55	F B	安山岩	麻石	(53)	(65.5)	42.00	(158.3)	246.528	67.032	137.376
152	E - 1 3	2	F B	麻石安山岩	砾石·砾石	(56.00)	(83.50)	(46.80)	(254.60)			
153	G - 2 6	38		安山岩	砾石	98.00	87.50	58.00	548.20	262.950	68.200	137.864
154	G - 2 5	330	F B	麻石安山岩	砾石·砾石	90.00	70.00	50.00	399.90	250.550	64.660	137.728
155	F - 2 6	13		麻石安山岩	砾石	89.50	73.50	30.50	342.00	263.760	59.370	136.521
156	G - 2 2	2	Y L L	安山岩	砾石	(77)	95.50	53.00	409.80	227.780	61.760	137.147
157	G - 2 2	1	F B	安山岩	砾石	(49.5)	60.50	(48.5)	194.80	226.838	63.134	137.341
158	G - 2 3	12	F B	基质岩	砾石	110.00	85.00	36.00	442.50	235.960	64.180	137.814
159	H - 2 3	8	Y U	安山岩	砾石	(66.5)	(59.5)	(50)	(161.8)	239.100	74.180	137.258
160	H - 2 3	10	Y U	安山岩	砾石	93.00	63.50	48.50	392.80	232.540	73.620	136.574
161	H - 2 4	69		安山岩	砾石·砾石	86.50	(73.5)	53.00	(399.2)	240.230	70.080	137.704

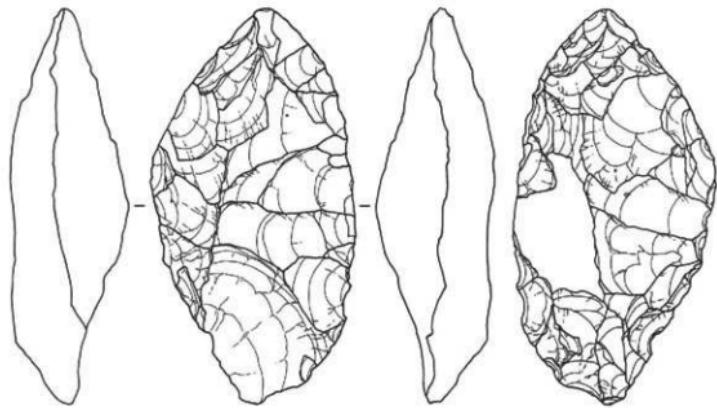
162	H - 2 4	61	安山岩	秋石	107.00	83.00	51.00	579.00	241.320	72.370	137.567	
163	H - 2 6	15	安山岩	磨石	59.00	88.50	53.00	513.50	260.100	73.090	138.309	
164	H - 2 6	23	安山岩	磨石	101.00	77.00	30.00	290.50	260.280	75.560	138.322	
165	F - 1 2	2	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	128.00	57.00	45.00	419.90			
166	F - 2 3	1	BBD	砂纸	磨石	104.00	75.00	41.00	446.40	231.720	51.180	
167	G - 2 3	549	*		磨石	48.00	36.50	31.50	68.70	239.050	65.790	137.972
168	F - 2 3	2	FBS	安山岩	磨石	118.00	92.00	42.50	844.60	234.589	56.143	137.497
169	F - 2 3	1	FBS	砂纸	磨石	(88.0)	81.00	57.00	530.00	238.085	54.916	137.399
170	G - 2 3	556	*		磨石	113.50	106.00	55.00	932.40	237.560	67.930	137.692
171	G - 1 3	3	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	73.00	53.50	27.00	139.60			
172	G - 2 2	3	FBS		磨石	91.50	79.50	53.00	440.20	229.173	66.657	137.331
173	G - 2 4	39	FBS	安山岩	磨石	87.50	70.50	38.50	334.40	242.220	68.500	138.022
174	G - 2 4	58	FBS	安山岩	磨石	100.50	92.50	47.50	887.90	240.100	57.500	138.087
175	H - 2 3	142		磨石尖端带 砂纸	磨石	103.00	93.50	47.00	670.90			
176	H - 2 4	74	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	(82.00)	(78.00)	(32.50)	(286.10)	246.340	74.810	137.516
177	G - 2 5	352	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	(52.00)	(42.00)	(31.50)	(97.70)	284.600	60.850	137.332
178	F - 2 5	45	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	133.00	70.00	62.00	621.60	254.080	54.530	137.009
179	F - 2 5	45	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	(63.00)	(67.00)	(40.00)	(271.90)	259.370	50.330	136.473
180	G - 2 5	55	*		磨石	100.00	88.50	42.00	629.60	251.360	66.620	137.961
181	G - 2 5	339	FBS	石英闪长岩	磨石	105.00	95.00	40.00	501.00	287.600	66.380	137.788
182	G - 2 5	335	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	127.00	57.00	32.00	422.30	257.950	63.500	137.459
183	H - 2 5	142		磨石尖端带 砂纸	磨石	82.50	74.00	31.50	280.70	251.10	75.200	137.65
184	D - 2 5	326		石英闪长岩	磨石	134.40	76.00	43.00	615.60	251.260	64.500	137.497
185	C - 2 6	37		安山岩	磨石	84.50	(60.5)	36.50	320.80	250.900	54.580	137.572
186	D - 2 6	38		安山岩	磨石	(82)	71.00	56.50	(442.4)	262.450	68.200	137.444
187	G - 2 5	40		安山岩	磨石	92.00	73.50	40.00	335.10	262.930	62.480	137.132
188	G - 2 5	29	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	(92.00)	(57.00)	(34.00)	(236.20)	266.423	64.135	137.201
189	G - 2 6	28		磨石尖端带 砂纸	磨石	102.50	103.50	40.00	585.10			
190	G - 2 6	44	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	158.50	81.50	46.00	927.50	261.847	64.645	137.318
191	H - 2 6	16		安山岩	磨石	(61)	(51.8)	(39.0)	136.00	267.240	74.820	136.18
192	H - 2 6	20	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	(97.50)	(79.00)	(50.00)	(527.94)			
193	G - 2 6	92		安山岩	磨石	(112.5)	81.00	67.00	(751.6)	267.770	64.320	136.681
194	F - 2 5	21	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	170.00	109.50	57.00	1954.00	280.120	52.150	135.734
195	H - 2 6	26		磨石尖端带 砂纸	磨石	99.50	57.50	36.50	150.20			
196				磨石尖端带 砂纸	磨石	(85.00)	(54.00)	(46.00)	(297.60)			
197	G - 2 5	326		磨石尖端带 砂纸	磨石	111.50	102.50	66.00	1053.00	256.100	56.330	137.824
198	G - 2 3	581	*	安山岩	磨石	(74.5)	(65.0)	(53.0)	(386.6)	234.900	57.870	137.397
199	G - 2 4	37	FBS	安山岩	磨石	87.50	83.00	44.00	574.40	241.700	67.600	137.959
200	G - 2 4	127	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	(90.50)	(84.00)	(41.00)	(213.00)	244.490	68.900	137.584
201	G - 2 5	50	FBS	磨石尖端带 砂纸	磨石	84.50	48.00	45.00	266.34	256.200	67.520	137.070
202	G - 2 6	25		砂纸	磨石	101.50	88.00	43.00	612.70	265.260	56.070	137.940
203	G - 2 5	3	*		打磨石膏	106.00	56.00	26.00	122.80	258.170	64.640	137.002
204	G - 2 5	4	*		打磨石膏	106.00	56.00	26.00	122.80	257.920	65.350	137.000
205	H - 2 5	12	*		打磨石膏	98.50	53.00	22.00	118.60	256.900	50.150	137.567
206	H - 2 5	18	1	FBS	瓦砾	60.00	53.00	25.00	126.50	188.027	72.489	136.655 高温加工石砾砂
206	G - 2 5	28		磨石尖端带 砂纸	磨石	95.50	84.50	20.50	92.70	263.120	66.123	137.598
207	F - 2 5	24		磨石尖端带 砂纸	磨石	58.00	38.50	15.00	46.80	251.976	55.066	137.139
208	G - 2 5	23	*	磨石尖端带 砂纸	磨石	41.00	27.00	9.00	12.20	255.710	60.410	137.678
209	F - 2 3	2	FBS	砾状灰岩	磨石	90.00	58.00	23.00	163.90	234.920	54.000	137.392
210	H - 2 2	6	FBS	页岩	磨石	55.50	52.00	22.00	61.30	233.480	75.528	128.946
211	F - 2 3	14	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	(263.00)	(218.5)	(105)	886.00	235.970	63.740	137.271
212	F - 2 3	4	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	261.00	186.50	72.00	5400.00	237.000	55.410	137.420
213	G - 2 3	11	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	(192)	203.00	81.00	3850.00	235.450	64.370	137.961
214	G - 2 3	578	*	磨石尖端带 砂纸	页岩	114.50	132.50	67.00	1225.00	237.060	67.570	137.599
215	G - 2 0	3	KU	安山岩	页岩	(139.5)	(70)	(49)	558.90	208.628	68.564	135.780
216	H - 2 3	17	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	218.00	127.00	78.00	2835.00	232.930	74.290	136.505
217	G - 2 4	89	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	325.50	291.00	86.00	13800.00	249.000	67.500	136.030
218	G - 2 4	70	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	272.00	208.00	98.00	7900.00	248.300	67.500	137.952
219	H - 2 4	22	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	206.50	171.00	57.00	2415.00	242.240	71.650	137.775
220	F - 2 5	42	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	129.00	204.50	77.00	2748.00	252.870	66.549	137.378
221	F - 2 5	43	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	172.50	182.50	58.00	2630.00	258.370	53.399	136.970
222	F - 2 5	27		磨石尖端带 砂纸	页岩	179.50	169.50	70.00	2209.00	256.350	59.180	137.340
223	E - 2 8	5		磨石尖端带 砂纸	页岩	(203)	(237)	(71)	(5600)	263.250	43.730	133.231
224	H - 2 5	10	*	磨石尖端带 砂纸	页岩	278.00	201.50	64.00	5300.00	250.000	71.309	136.940
225	F - 2 8	22	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	(190.5)	(162.00)	(57.00)	(2860.00)	25.990	54.510	136.372
226	E - 2 8	10		磨石尖端带 砂纸	页岩	(126.00)	(222.00)	(88.00)	(2409.00)	261.760	47.430	133.421
227	G - 2 3	83	FBS	磨石尖端带 砂纸	页岩	(111.00)	(101.00)	(63.00)	(946.90)	263.000	65.110	137.411
228	G - 2 3	541	*	磨石尖端带 砂纸	页岩	288.00	340.50	120.00	245.5 x	262.970	64.785	137.54
229	G - 2 3	577	*	磨石尖端带 砂纸	页岩	288.00	419.60	83.00	13.8 x	237.000	67.286	137.400
230	G - 2 5	323		磨石尖端带 砂纸	页岩	(274)	(281)	(117)	(14000)	269.780	61.460	137.348
231	F - 2 6	16		磨石尖端带 砂纸	页岩	464.50	401.00	60.00	15.5 x	262.850	57.900	136.470
232	G - 2 2	1	YLM	砾状灰岩	ナイフ	4.15	1.80	0.60	3.60	220.020	67.170	136.193
233	G - 2 6	2	YLM	砾状灰岩	ナイフ	3.60	1.80	0.50	2.80			
234	G - 2 3	14	YLM	頁岩	石刀状剥片	93.00	34.00	15.00	36.00	238.500	67.930	137.899
235	H - 2 6	19	YLM	酸化玄武岩	磨石	88.00	56.50	30.00	106.00	260.240	73.860	136.259
236	E - 2 6	2	YLM	磨石尖端带 砂纸	石刀状剥片	70.50	22.00	9.00	9.70	267.570	48.440	133.879
237	G - 2 3	2	YLM	頁岩	石刀状剥片	67.50	26.50	13.50	14.20			



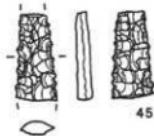
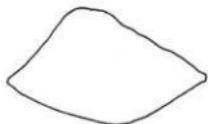
第54図 石器実測図 1



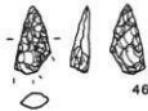
第55図 石器実測図 2



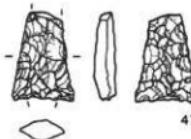
44



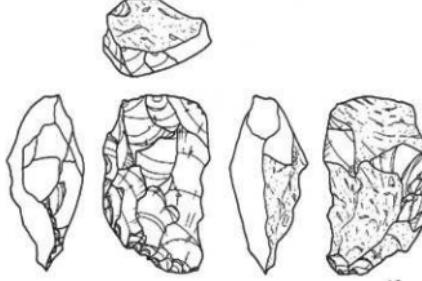
45



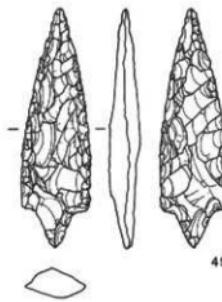
46



47



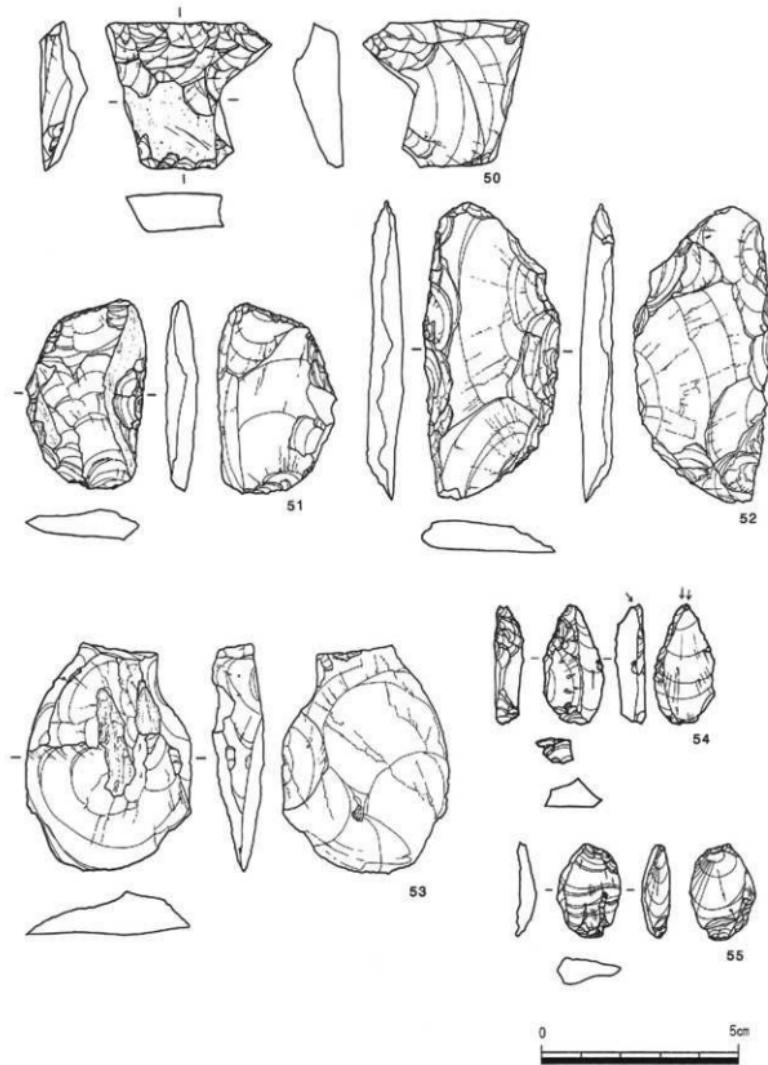
48



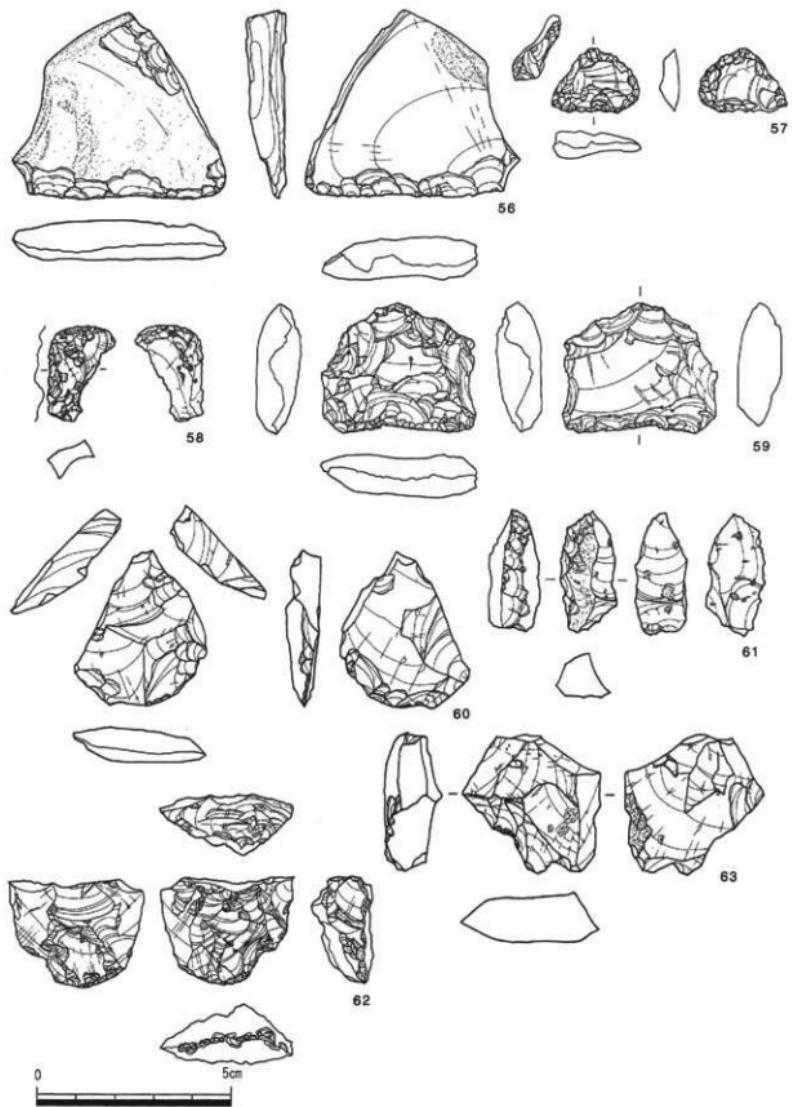
49



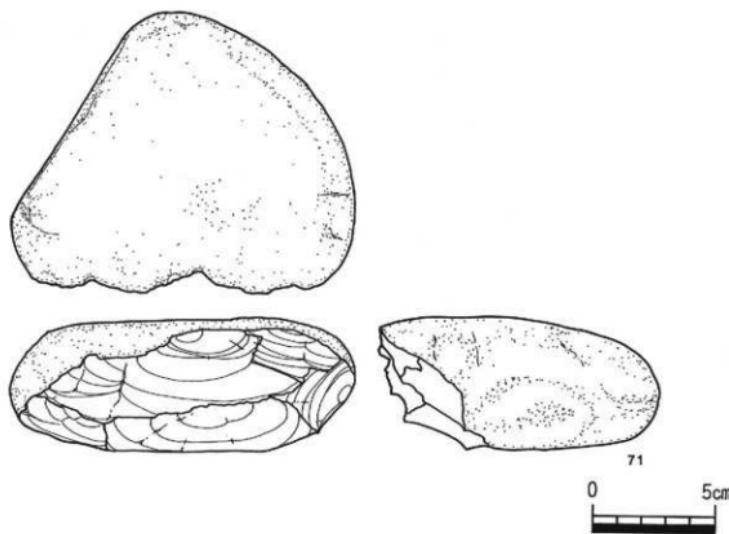
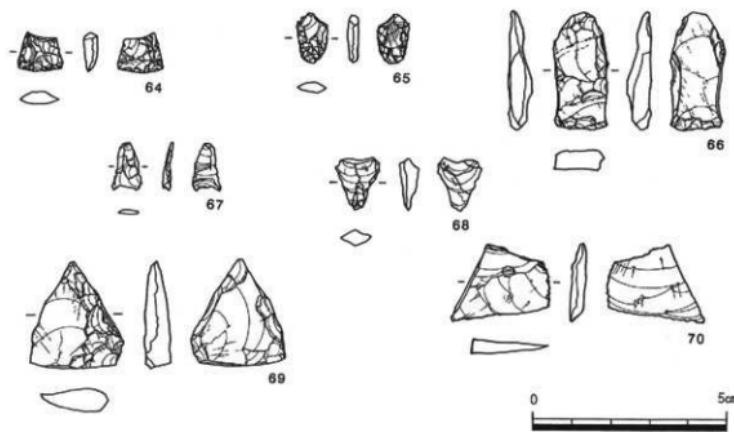
第56図 石器実測図 3



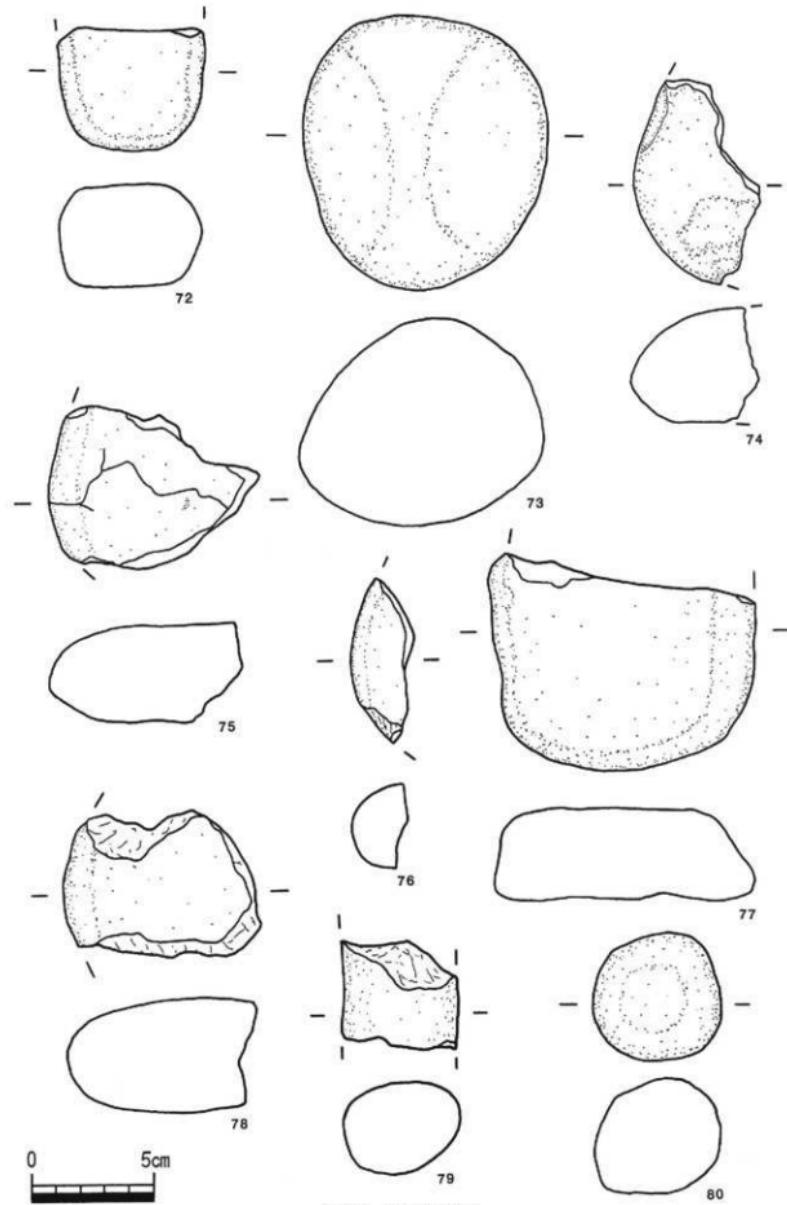
第57圖 石器實測圖 4



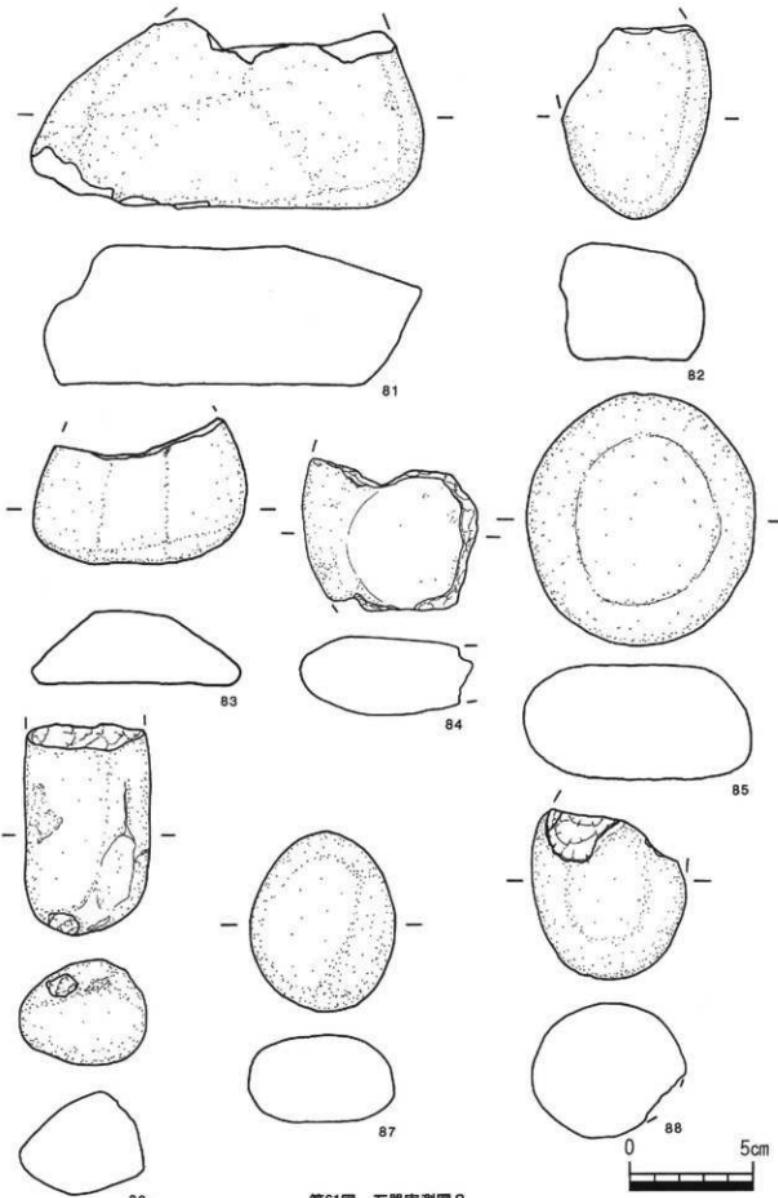
第58図 石器実測図5



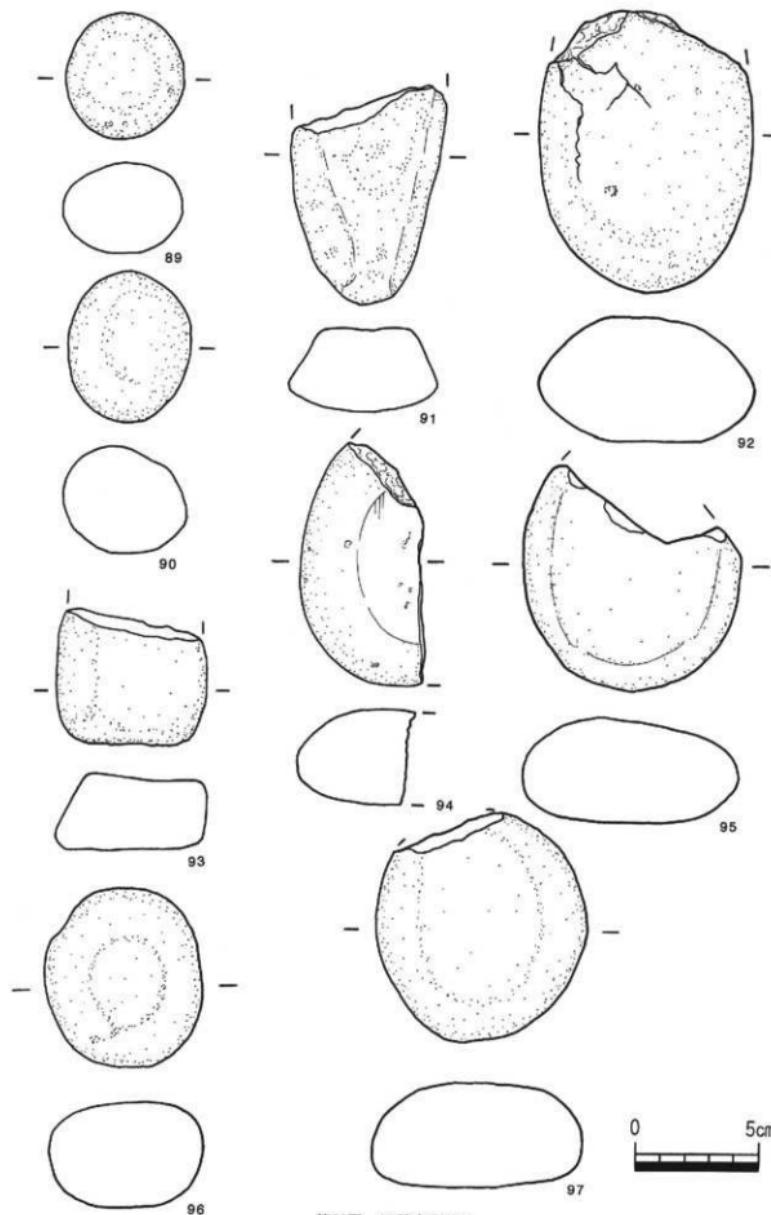
第59図 石器実測図 6



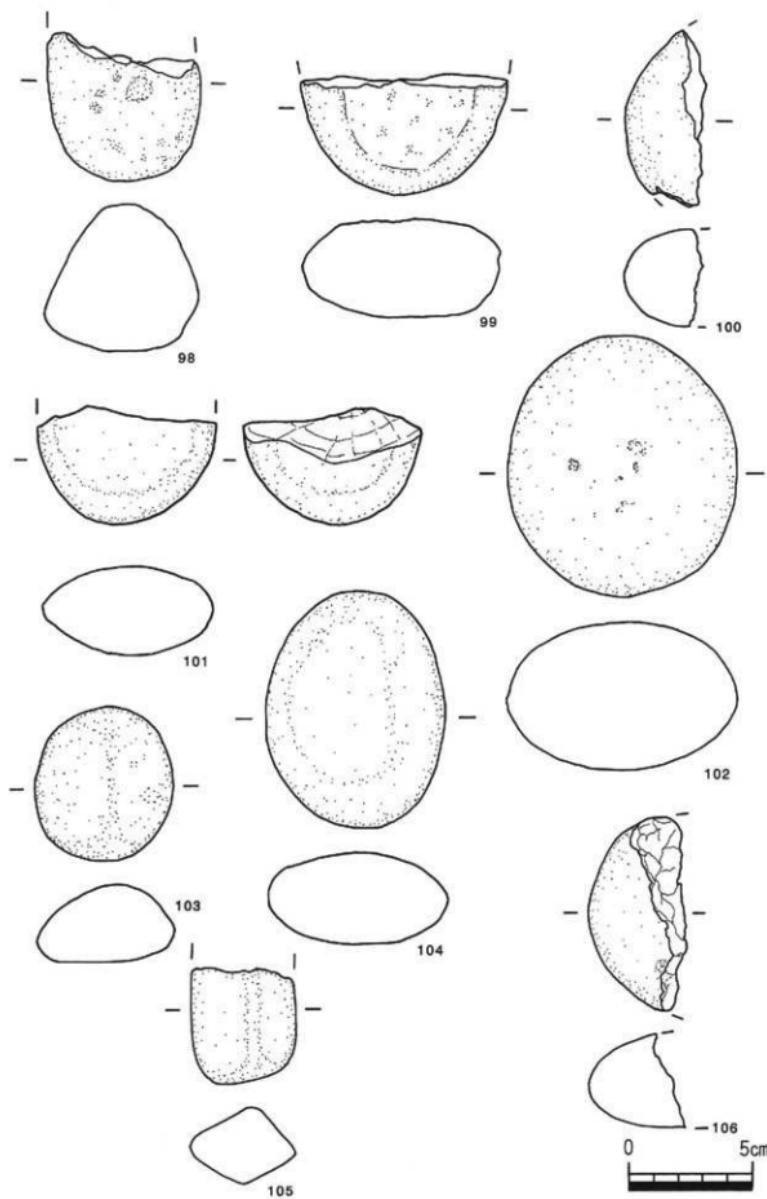
第60図 石器実測図 7



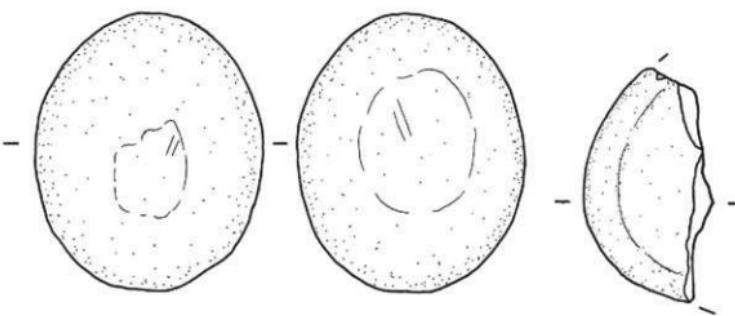
第61図 石器実測図 8



第62図 石器実測図9

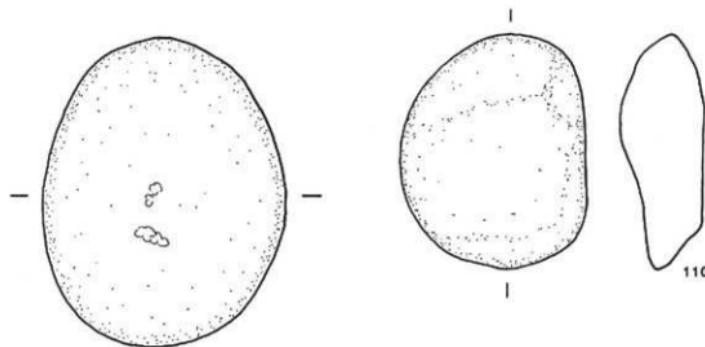


第63図 石器実測図10



107

108

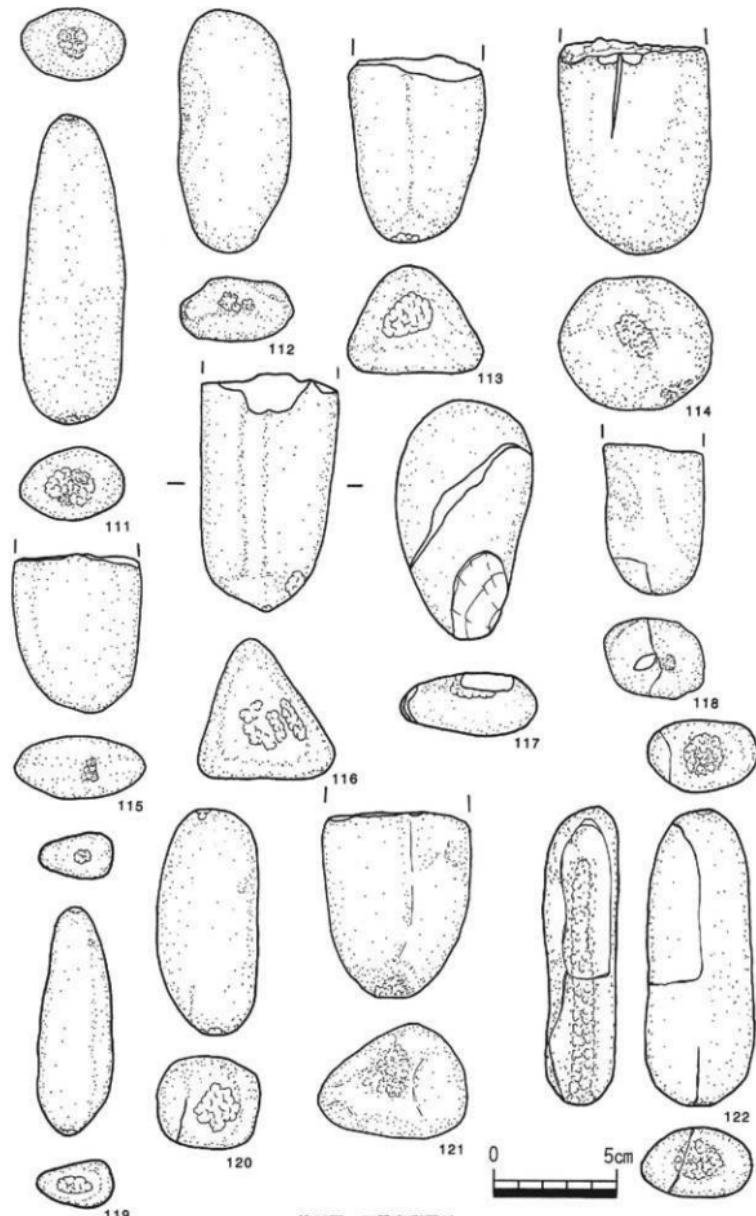


109

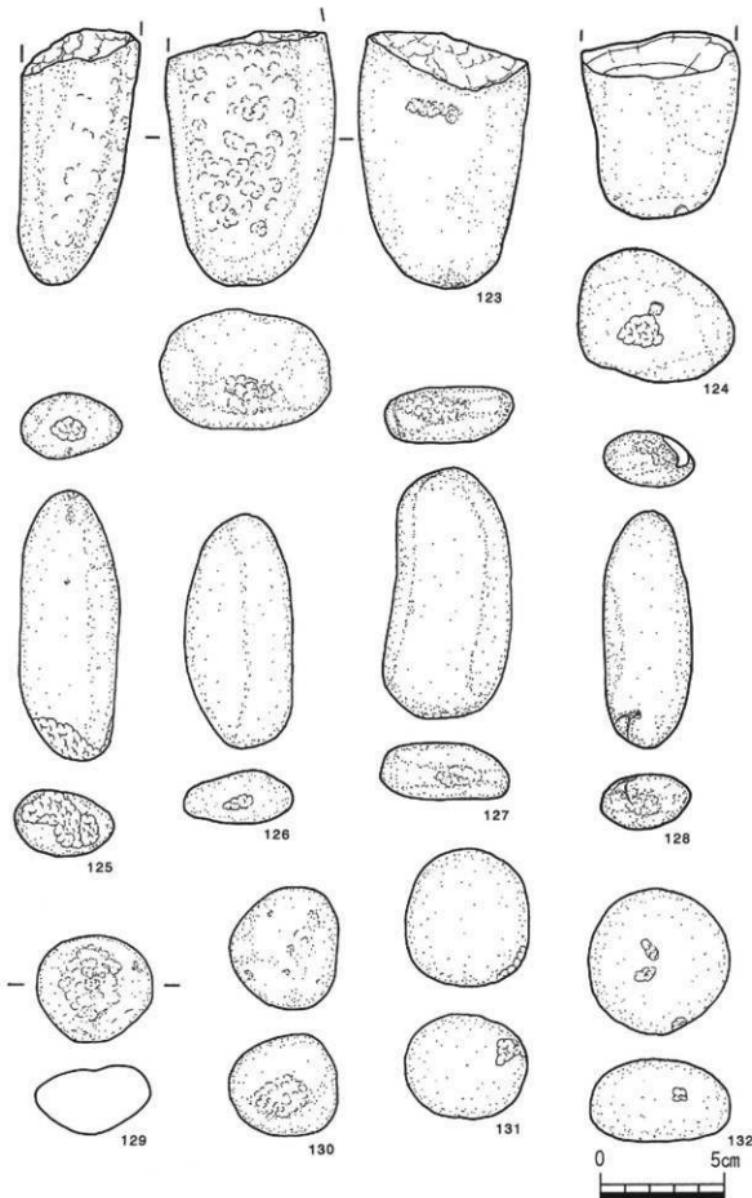
110



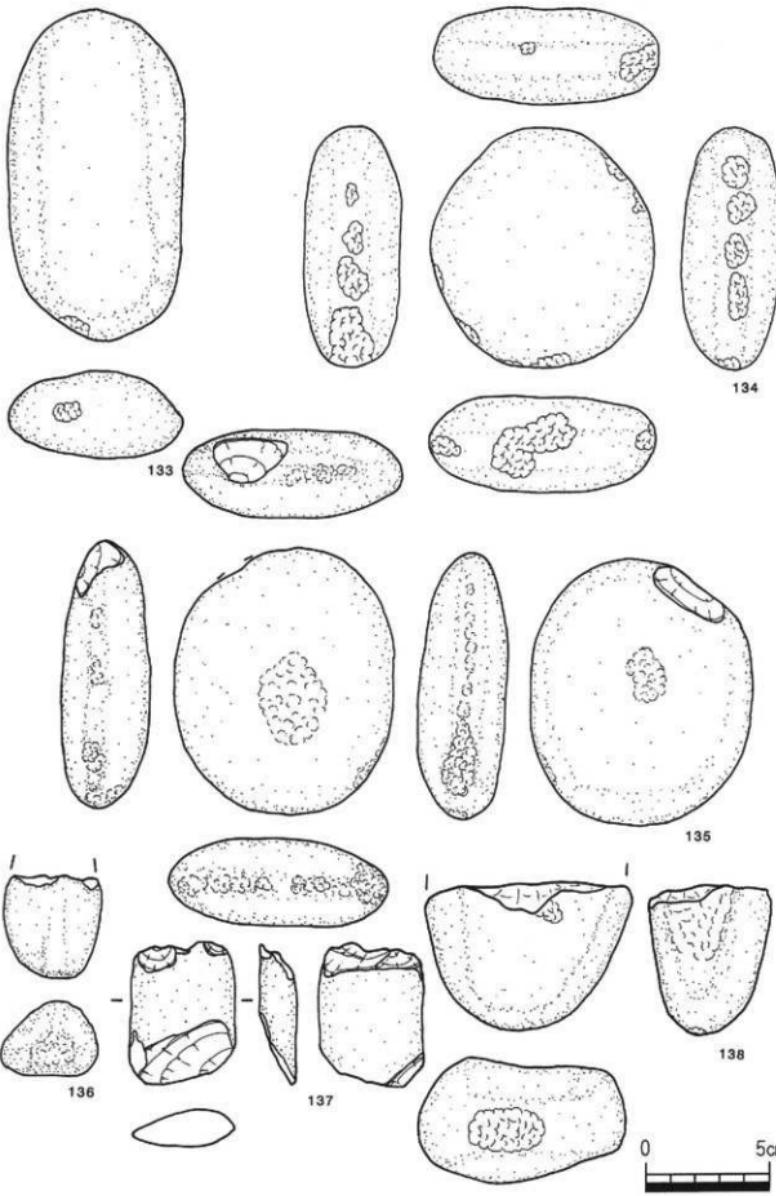
第64図 石器実測図11



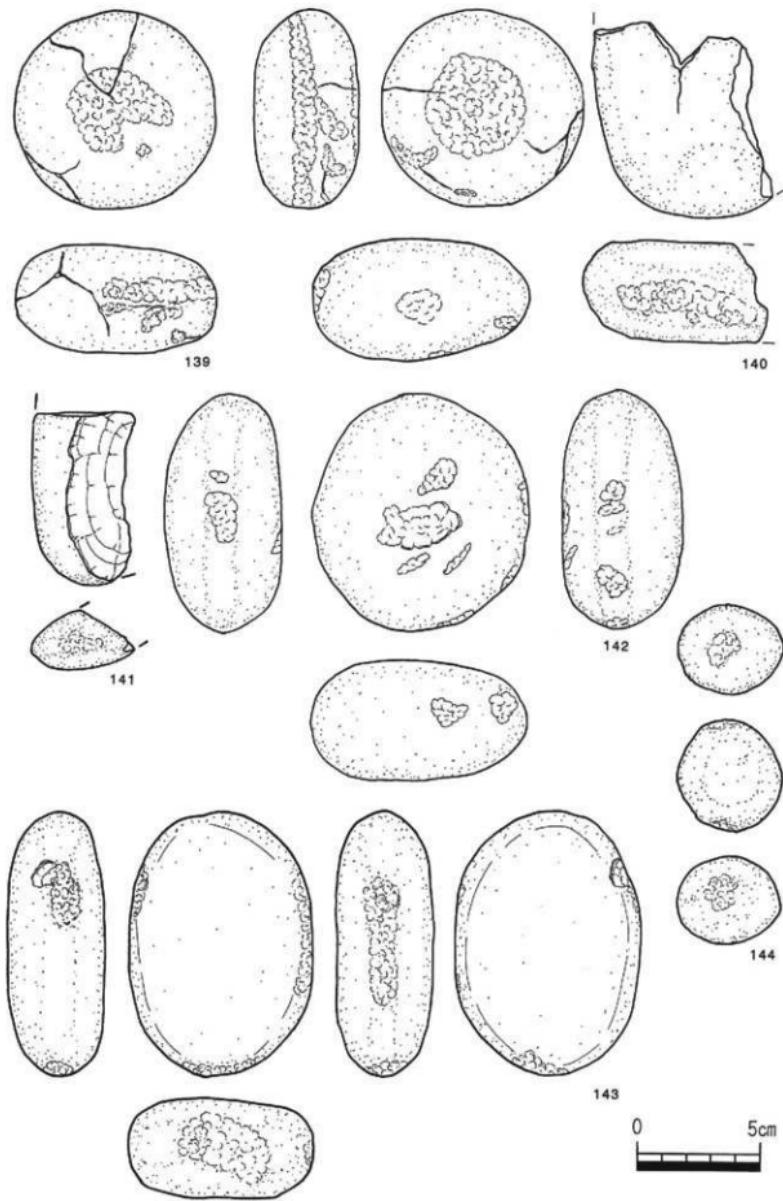
第65図 石器実測図12



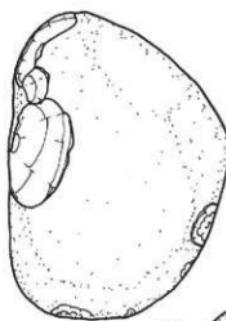
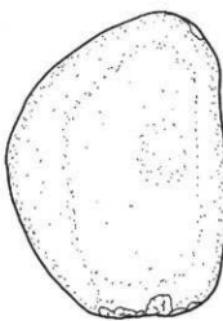
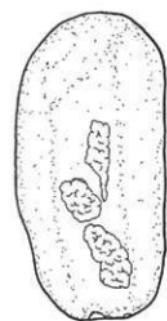
第66図 石器実測図13



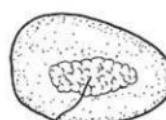
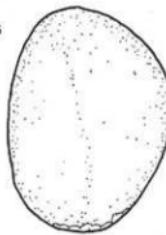
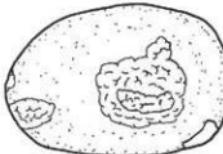
第67図 石器実測図14



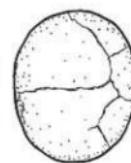
第68図 石器実測図15



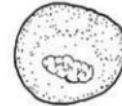
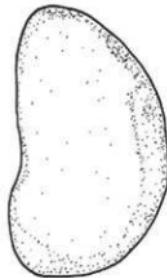
145



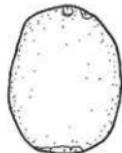
146



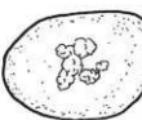
147



148



148



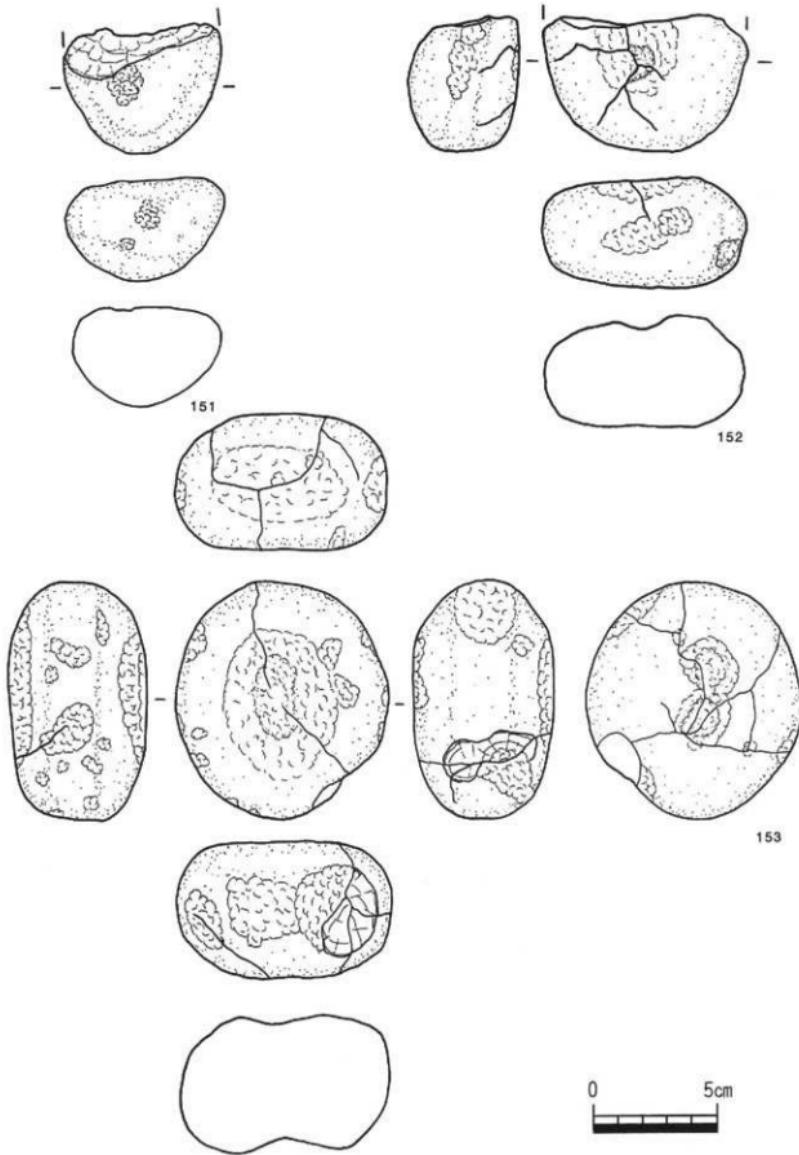
149



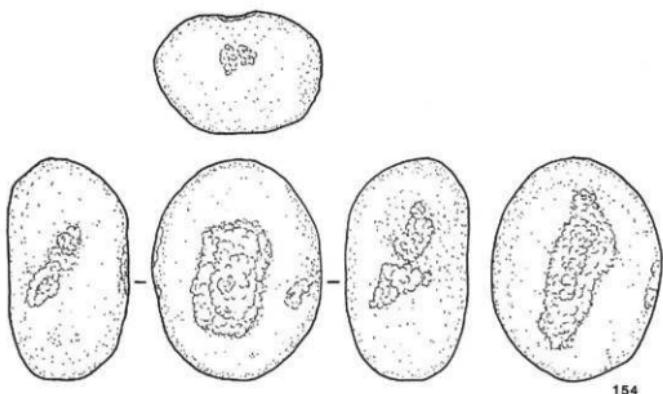
150



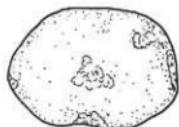
第69圖 石器実測図16



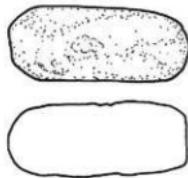
第70図 石器実測図17



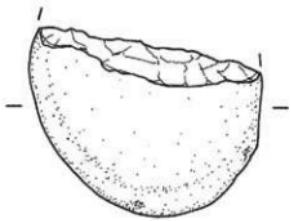
154



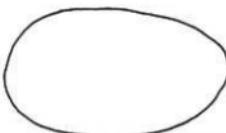
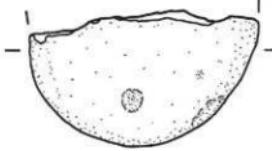
155



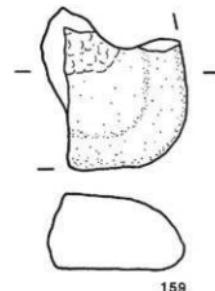
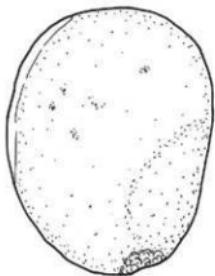
第71図 石器実測図18



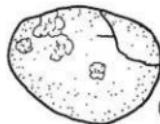
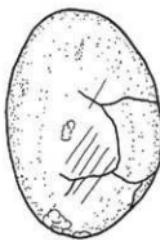
156



157



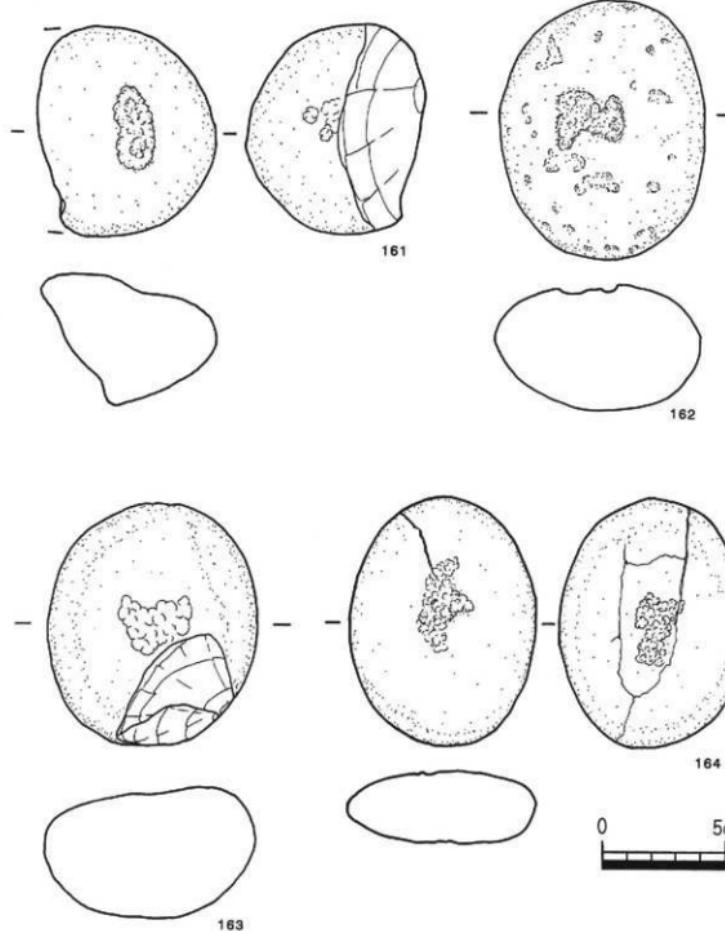
158



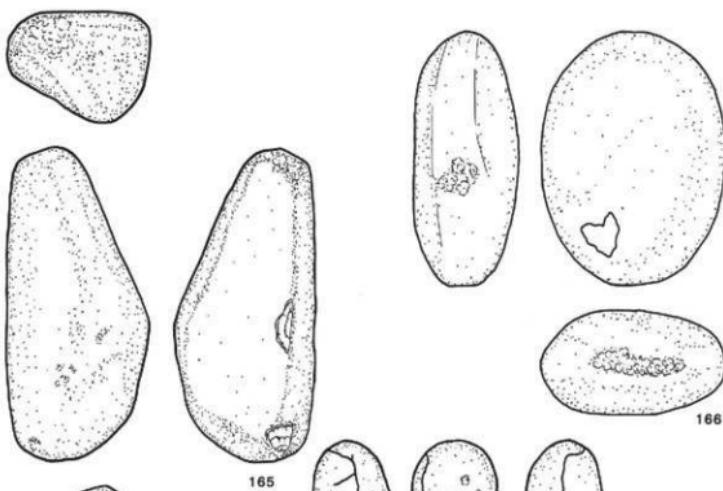
160



第72図 石器実測図19



第73図 石器実測図20

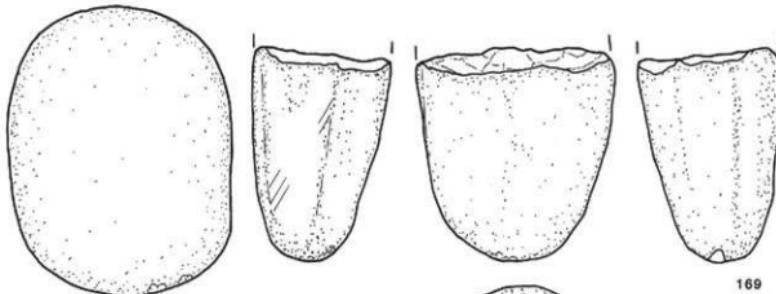


165

166



167

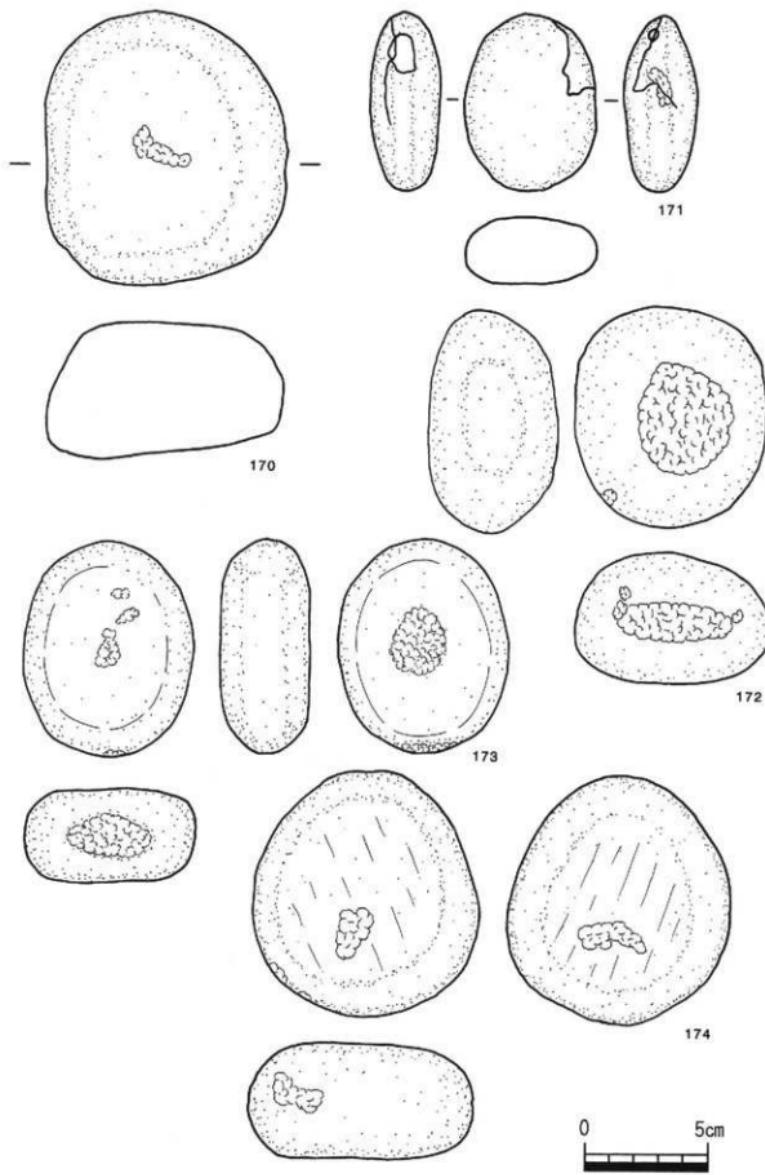


169

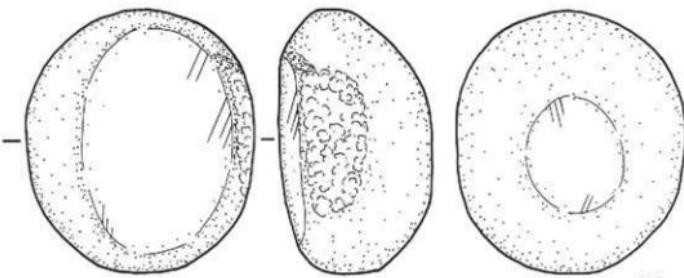


0 5cm

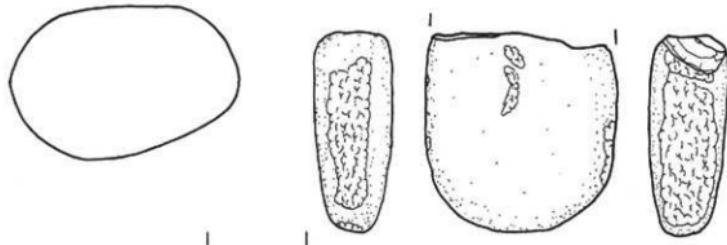
第74図 石器実測図21



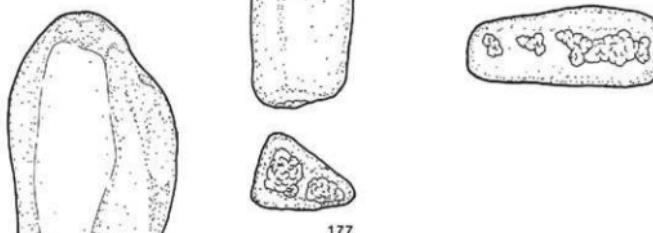
第75図 石器実測図22



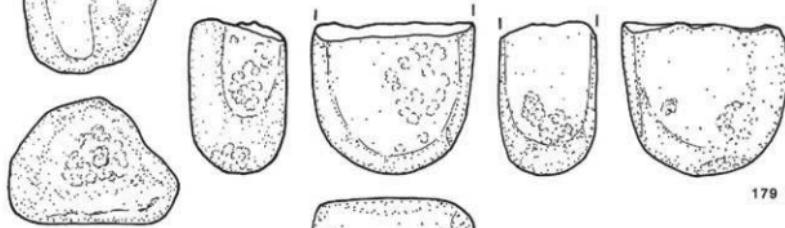
175



176



177

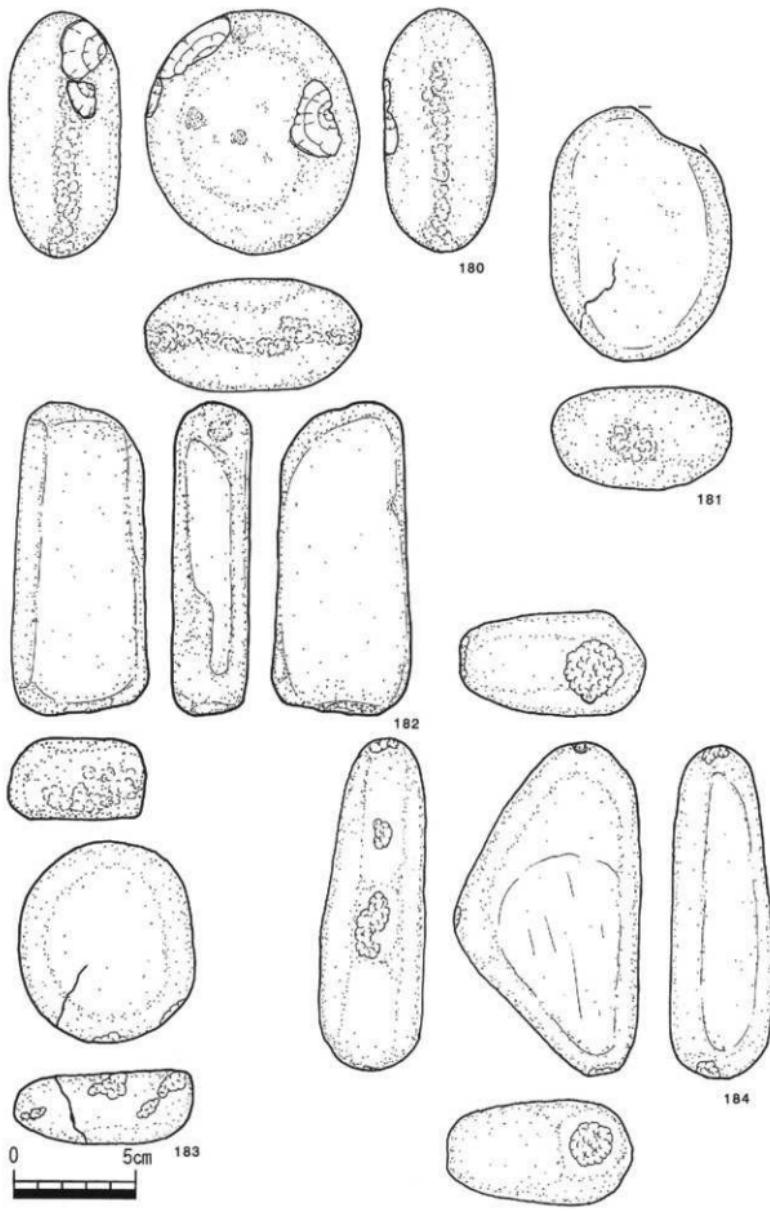


178

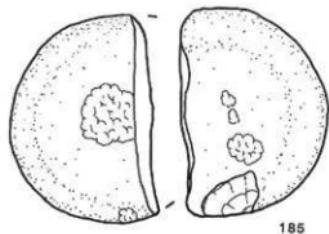
179



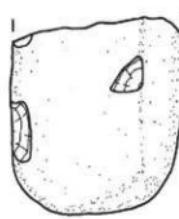
第76図 石器実測図23



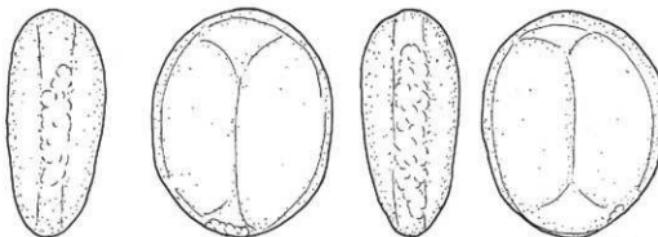
第77図 石器実測図24



185



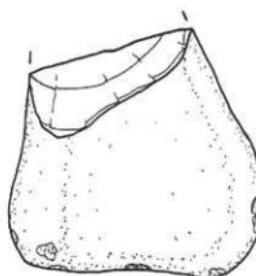
186



187



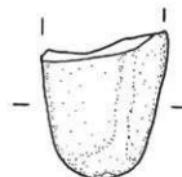
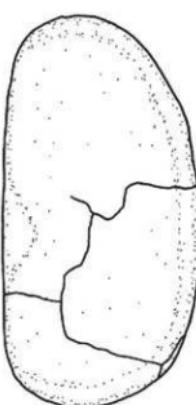
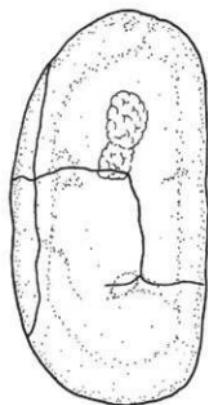
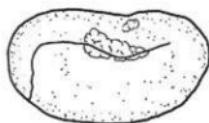
188



189

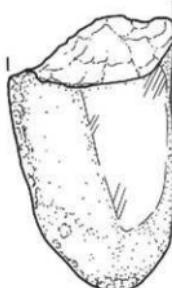
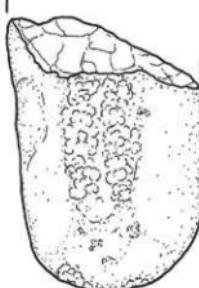
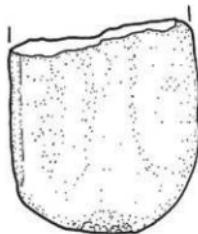


第78図 石器実測図25

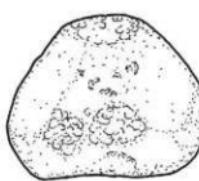
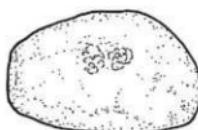


191

190



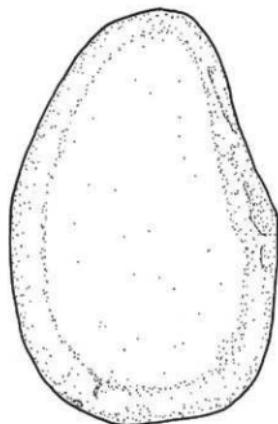
193



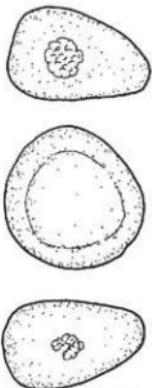
192



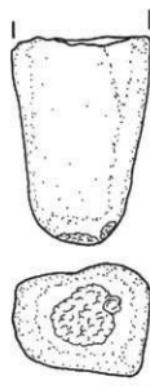
第79図 石器実測図26



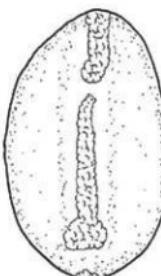
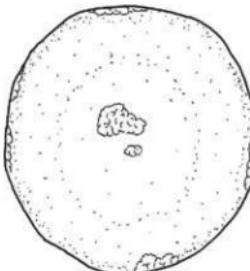
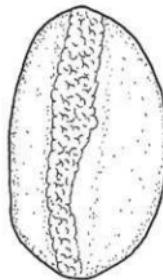
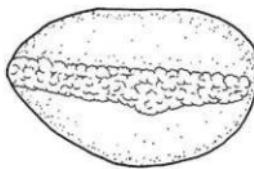
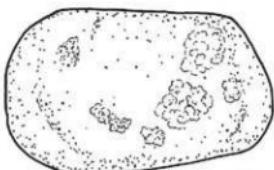
194



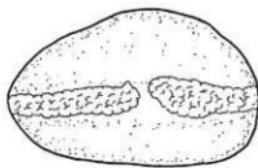
195



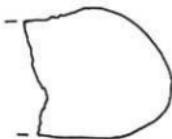
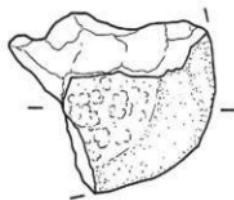
196



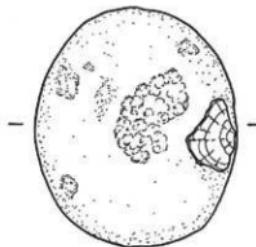
197



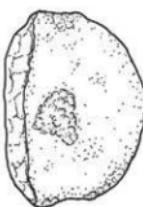
第80圖 石器実測図27



198



199



200



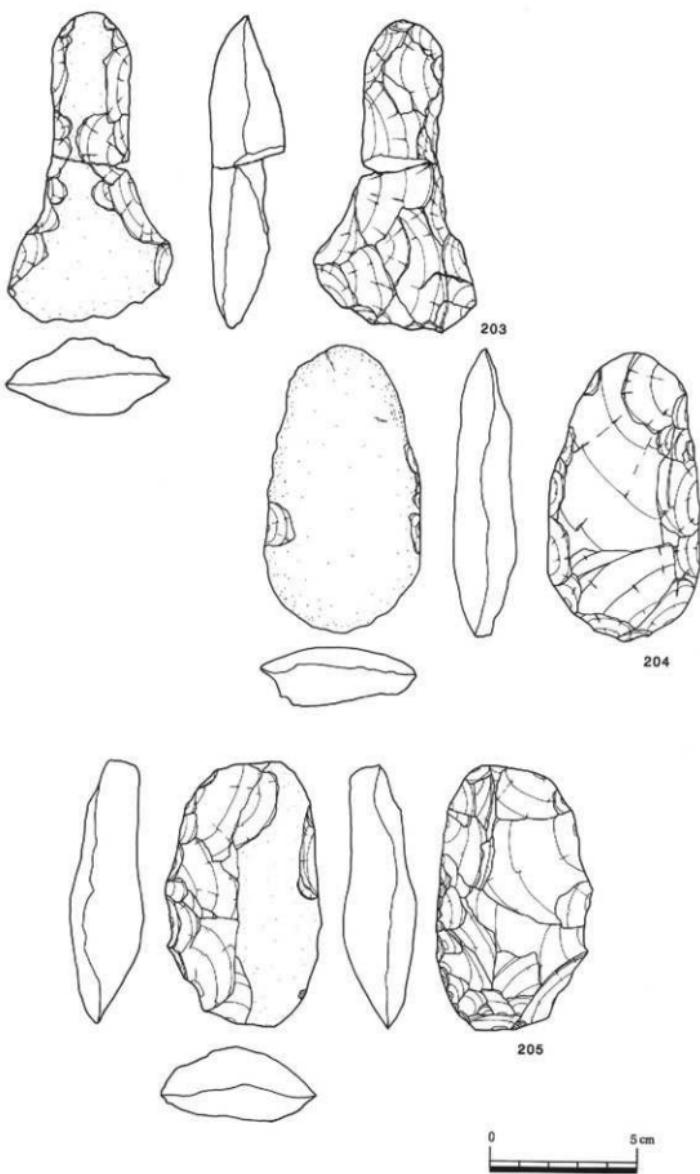
201



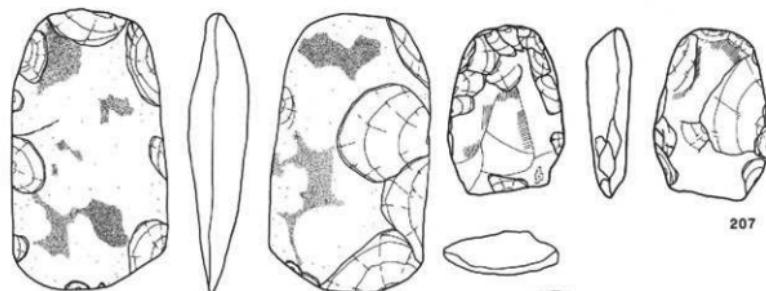
202



第81図 石器実測図28



第82圖 石器実測図29

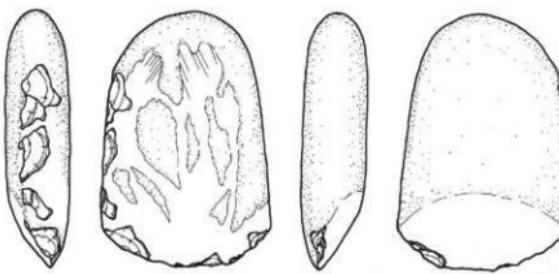


206

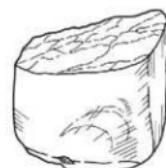
207



208



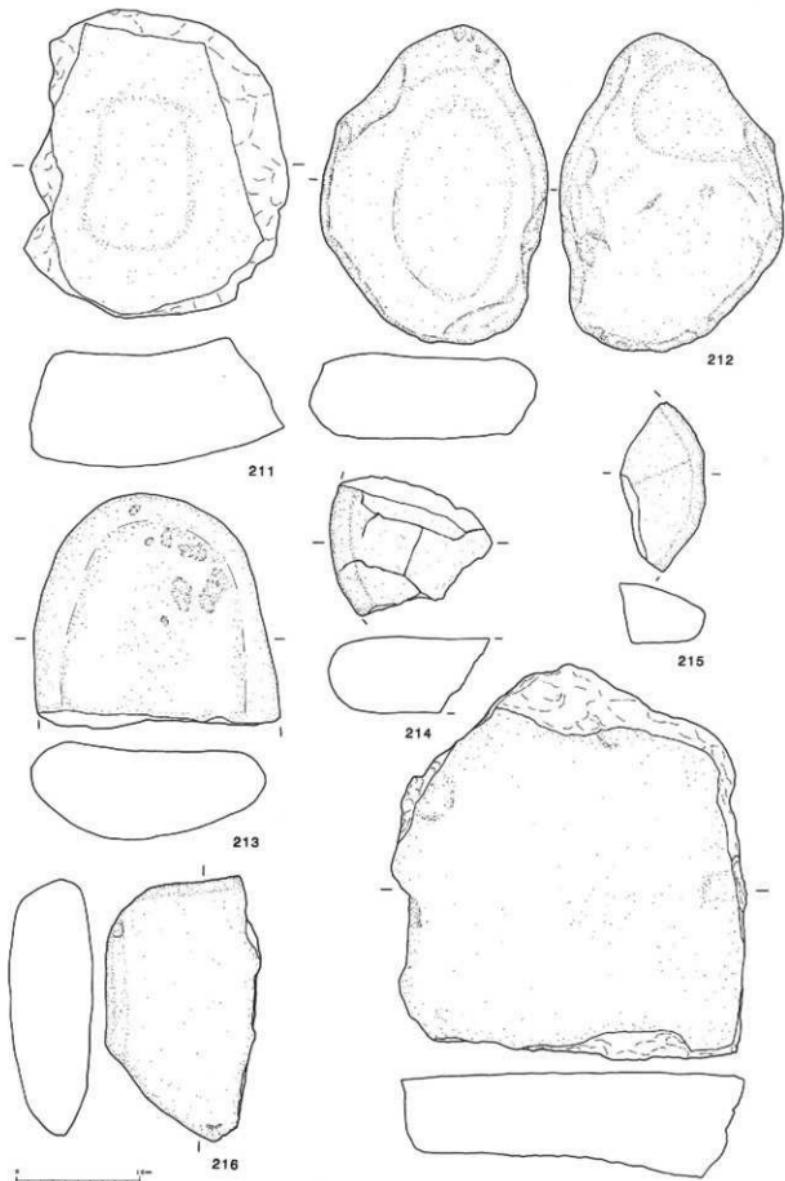
209



210

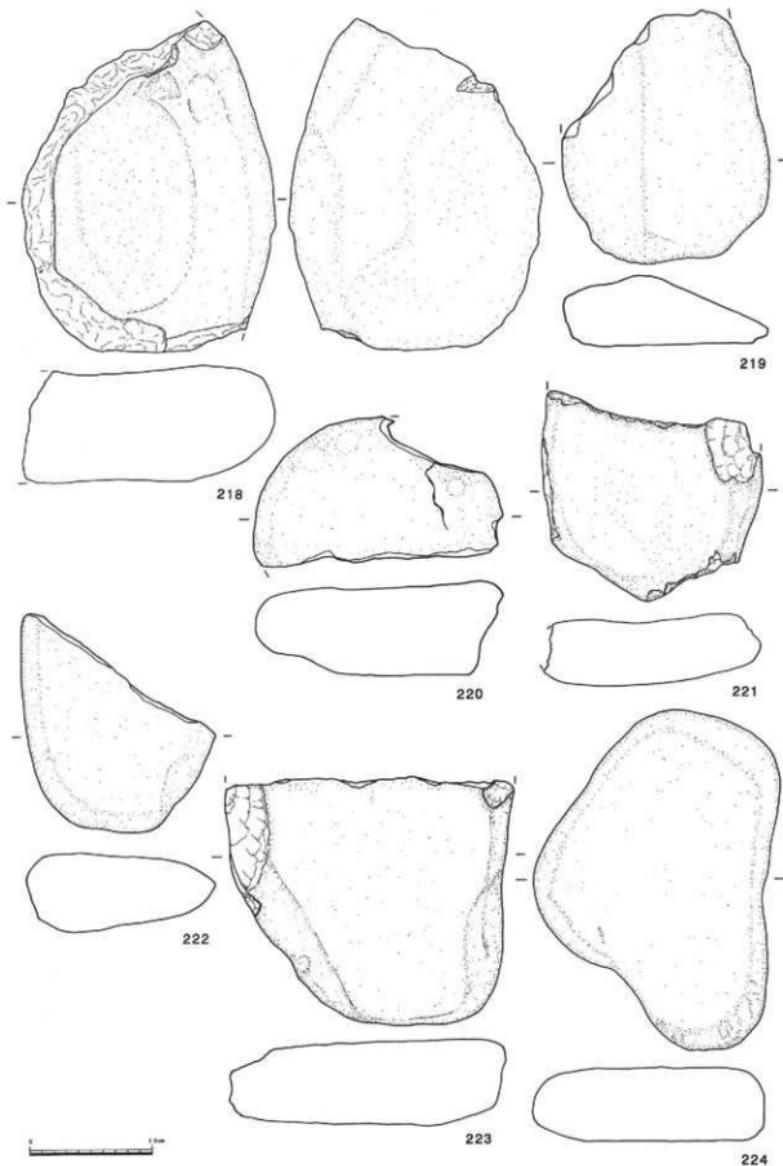


第83図 石器実測図30

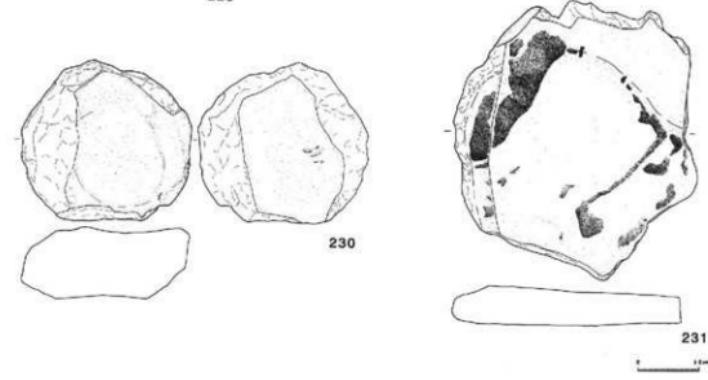
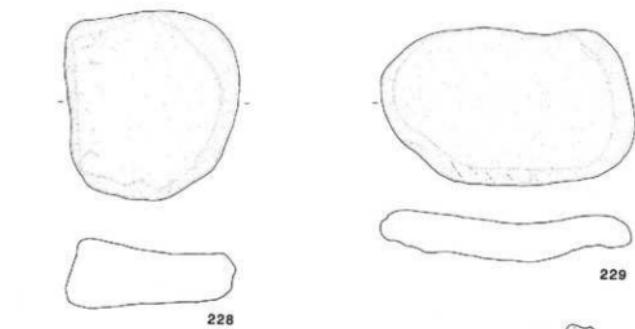
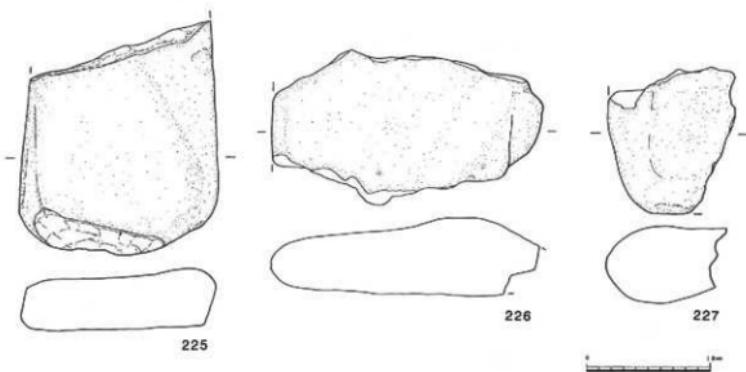


第84図 石器実測図31

217



第85圖 石器實測圖32



第86図 石器実測図33

第4節 黒曜石原産地同定分析

はじめに

遺跡から出土する黒い輝きを放つ黒曜石は、製品・剥片・碎片と様々な形態をもつ。これらは人工的に運ばれ、加工されたものに疑いはない。なぜなら黒曜石の産地は限られているからである。

もともと黒曜石は流紋岩ディサイト質の火山ガラスでマグマが地表近くで急に冷やされて生成している。その条件に合致し、今なお黒曜石が産出でき、遺跡に搬入されていると推定できる箇所は中部地方では大きく3ヶ所である。一つは長野県、いわゆる中部高地と呼ばれる蓼科・和田峠・霧ヶ峰などである。二つ目は伊豆七島にある神津島の周囲、そして静岡・神奈川にまたがる箱根山中および天城山系である。

考古学的発掘調査で得られた資料の産出地の特定は様々な方法が開発されてきた。今回の報告書では、物理光学的研究から得られた成果を基にして、エネルギー分散蛍光X線による原産地別分布を実施した。

この方法は二つの利点をもつ。第一に資料を非破壊で測定できること、第二に測定に要する時間が短時間であること、逆に統計的な処理を必要とするため、多くの資料を分析することが困難とされてきた。

しかし、国立沼津工業高等専門学校助教授望月明彦氏をはじめとするグループによって、比較的単純な数理的処理によっても原産地を推定できる方法が考え出された。

この方法による黒曜石原産地分析は沼津市教育委員会の手による土手上遺跡の調査が端緒となり、当研究所では、下原遺跡・加茂ノ洞B遺跡などでも実施され、成果を上げている。しかしそれらの遺跡の対象文化層は、YL層以下の旧石器時代におかれており、当遺跡の文化層が縄文層にあるところは相違点である。また望月先生による詳細な特論は、「下原遺跡Ⅱ」に所載されている。併せて参照されたい。

1 分析方法

望月先生の分析方法は、遺跡に搬入されている可能性のある原産地資料を各地点ごとに30点以上、採取・収集を行い、表面の水和層の影響を除くため割った後、超音波洗浄器で15分洗浄した資料をそのまま測定することから始まった。定量を行った元素はアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の11種類である。原産地の判別を考古学に応用することを考え、以下の計算式を用いて各原産地を指標化した。

$$Rb\text{ 分率} = Rb\text{ 強度} \times 100 / (Rb\text{ 強度} + Sr\text{ 強度} + Y\text{ 強度} + Zr\text{ 強度})$$

$$Mn / Fe = Mn\text{ 強度} \times 100 / Fe\text{ 強度}$$

この二つの数値をプロットすることによって得られた和田峠系、霧ヶ峰系、蓼科系、天城系、箱根系はそれぞれ1つの群になり、男女倉系は3群、神津島系が2つの群に分けられた。

また、上記の判別では箱根系の各原産地の区別が充分ではないことが判明した。そこで以下の指標を箱根系に用い分類を行った。

$$Sr\text{ 分率} = Sr\text{ 強度} \times 100 / (Rb\text{ 強度} + Sr\text{ 強度} + Y\text{ 強度} + Zr\text{ 強度})$$

$$Fe / K = Fe\text{ 強度} / K\text{ 強度}$$

参考文献 「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡 BB V 層の原産地推定から—」望月明彦 池谷信之他 静岡県考古学会編

2 燃焼遺跡B地点の黒曜石原産地分析の方法

先生のご指導によって、本遺跡では主に二つの点について、仮説を立て、分析結果と照合することと

した。

① FB 層で検出された石器製作跡とみられる遺構より出土した黒曜石の原産地分析

調査の結果では、計500点にのぼる黒曜石片から母岩を復元することは不可能であり、その大きさや重量も不明である。しかしながら、外見上の所見では原産地は一つではないかと認識しており、この仮説を立証する。

② 石器などの製品の原産地分析

石器製作跡の原産地が1ヶ所であることから①の結果と照合したとき、黒曜石製品の原産地と齧歯が生じた場合、石器などは完成品として調査区内に持ち込まれている、という仮説。

③ 調査区全域に散布する剥片・碎片の原産地分析

①②の結果と齧歯が生じた場合は、それらがどのように持ち込まれたのかを検証する。

3 検査方法

調査区内における黒曜石の出土点数はおよそ千点に上る。このうちG-23グリッドで検出された黒曜石片の集中地点で500点を数える。その中には直径3mmに満たない碎片も含まれており、検査結果の精度を上げるために、これらを除いた500点について検査対象とした。

方法は、蛍光X線を各黒曜石につき4分間照射したのち得られた各物質の強度の数値をコンピュータに入力し、図87に示したグラフにプロットすることによって原産地を特定した。これら一連の作業は整理担当者が望月先生の研究室に赴き、実際に装置を操作し得た結果である。黒曜石の残存状態によって、数値にばらつきがあるときには先生の指導をいただいた。測定の結果、数量が多かった神津島産は正しくプロットされるものと、小さいもの、薄いものの中に数値に疑問が生じるものがあった。また、斑が多く風化している黒曜石も数値が安定せず、プロットされなかつた。これらの同定は困難であるため、測定不可としてデータから削除した。検査、検証の結果得られたグラフは図87の通りである。

4 検査結果の概要

各原産地別数量を見ると圧倒的に神津島産が多く8割を占める。「静岡県史」通史編1「第1編静岡のあけぼの第2章自然とともに生きる物資の交易」には次のようにふれられている。

「さらに注目されるのは、伊豆七島の神津島産の黒曜石が、伊豆半島南半部ではほとんど100パーセントを占め（略）縄文人は、はるばる海を渡って神津島から大量の黒曜石を運び、各地のムラへ配布していたらしい。」

伊豆半島南半部というのは、賀茂郡河津町段間遺跡の例を示す。以前より箱根西麓の発掘調査担当者の間でも、縄文時代に使用される黒曜石は神津島産が多いことは印象として述べられており、今回これが裏付けられたともいえよう。神津島産の黒曜石が箱根西麓で多く使用される理由として、箱根産や天城山（柏峰）の黒曜石よりも斑が少なく良質であったことによるのだろうか。渡航技術が進歩したことにも理由の一つにあげられよう。

和田峠系の3点はすべて石器でそれ以外にはない。このことから交易の結果得られたものでツールとして持ち込まれたと推定できる。霧ヶ峰系は剥片と石器が半分ずつ検出されている。蓼科系はわずかに2点の検出にとどまり、ツール1点、剥片1点である。

全体的に中部高地産の黒曜石の検出は少なく、旧石器時代の量と比較してその落ち込みは顕著である。それがいかなる理由によるものか、箱根西麓の縄文時代に使用された黒曜石の原産地全体の考察を待つのみである。

箱根産および畠宿産、柏峰産は当遺跡に一番近い原産地ということになるが、全体的に見てその数は

少ない。その理由は正確には不明であるが、箱根産・畠宿産はともに班が多く不良であること、柏崎産は風化が著しいことなどがあげられよう。箱根産のうち鍛冶屋産が1点検出された。望月先生によれば、発掘調査で得られた鍛冶屋産の資料ははじめてのことである。

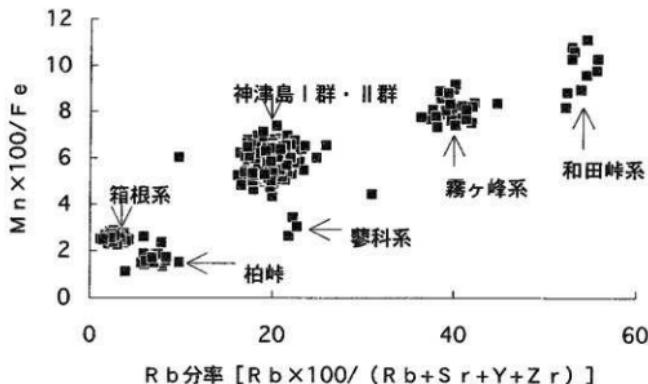
5 焼場跡B地点分布状況

前段あげた仮説の①②についての結論を述べておきたい。①は1点の畠宿産を除き、すべて神津島産を示した。畠宿産は混入と考えられる。集中する地点の全黒耀石を森鷗富士夫自身の肉眼による観察を行った結果、平面的に神津島産は調査区全域に分布しており、当時主要な黒耀石であったことが判る。

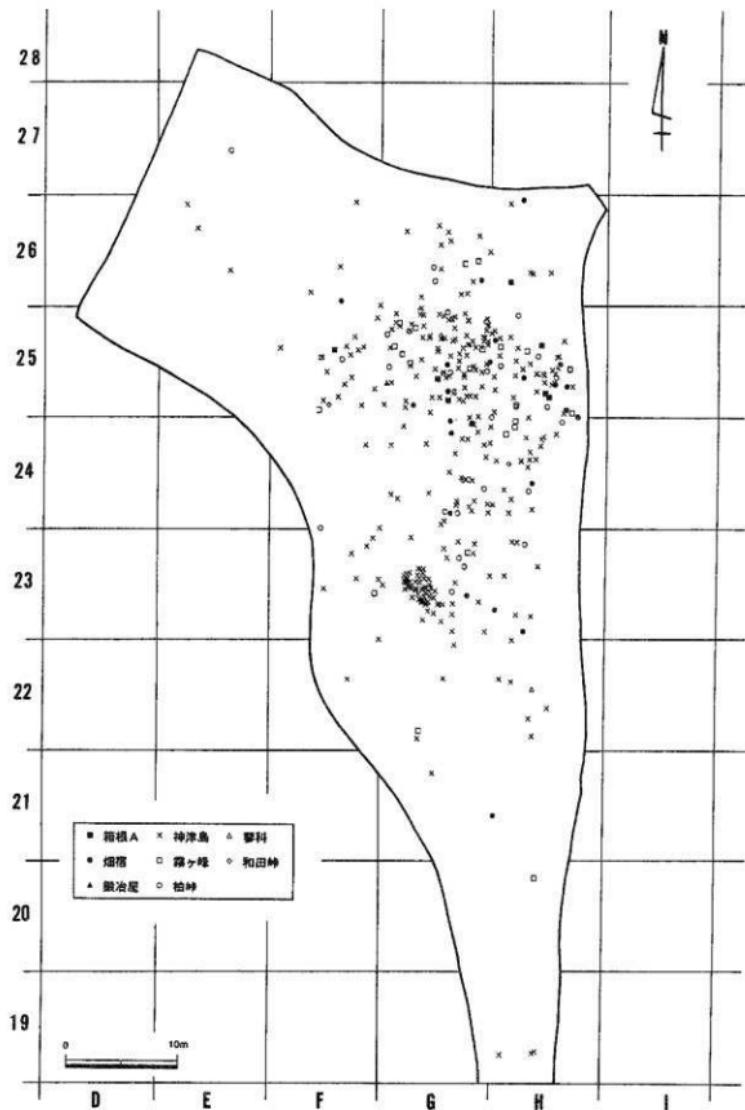
全体的な平面分布の状況から、傾向を探るのは困難であるが、遺跡の中心には全域の黒耀石が分布している。特に神津島・箱根・柏の分布率は高い。

検査対象にした遺物は100点である。500点近い剥片や碎片のうち、検査により、数値が出るもの抽出した数値である。このすべては神津島1群を示した。さらに肉眼での観察の結果、母岩が持ち込まれていると推定した。このことから原産地は神津島で石器を製作しようとしたことが想像できる。一方、ツールは霧ヶ峰産などがあり、必ずしもここで石器を製作したものが、現地に止まっているとは限らないことも原産地同定から推測できた。

縄文時代層における黒耀石の原産地同定はまだ緒についたばかりであるが、神津島産の黒耀石の使用頻度が高いことが報告されている。旧石器時代から神津島産の黒耀石は使用されているが、縄文時代に特に高いことは何を意味するのだろうか。



第87図 遺跡内出土黒耀石



第88図 黒耀石原産地別分布

第5表 黒耀石観察表

产地	色	石質	含有物	光沢	自然面
K SW-1	黒灰色不透明	灰色の縞が全体にみられ細かい裂開が一部にみられる	2 mm程度の球顆が全体に多く散在する	ガラス光沢に富む	不明
K SW-2	黒色半透明	灰黒色の微細な縞がみられる	黒色粒子が全体に散在する	ガラス光沢に富む	不明
K SW-3	黒色半透明～不透明	縞などなし	黒色粒子が全体に多く散在	ガラス光沢に富む	不明
K SW-4	黒灰色不透明	K SW-1と類似するが微細である	1 mm程度の球顆をわずかに含む	ガラス光沢に富む	不明
K SW-5 (B B 0)	黒灰色不透明	K SW-1と同じ	K SW-1と同じ	ガラス光沢に富む	不明
K SW-6	黒色不透明	全体に細かい裂開が多くみられる	1 mm程度の球顆をわずかに含む	ガラス光沢は鈍い	不明
K SW-1 (No.421)	黒色不透明	K SW-6に類似	K SW-6に類似	ガラス光沢は鈍い	不明
K SW? - 2 (No.238)	黒灰色不透明	K SW-4に類似	K SW-4に類似	ガラス光沢に富む	不明
H T J - 1	淡黒色不透明～半透明	一部に灰黒色の縞がみられ全体に細かい裂開が少しみられる	1 mm程度の球顆や白色斑晶が全体にみられ、微細な黑色粒子が全体に多く散在	ガラス光沢に富む	なめらか
H T J - 2	淡黒色不透明	流理などは目立たなく全体に細かい裂開が少しみられる	2 mm～1 mm程度の球顆や白色粒子が全体に多く含む	ガラス光沢に富む	なめらか
H T J - 3	黒色不透明	全体に細かい裂開が非常に多くみられる	1 mm程度の球顆や白色斑晶が全体に多く含む	ガラス光沢は鈍い	すりガラス状
H T J - 4	淡黒色不透明	灰色の縞が一部にみられる	1 mm程度の球顆が僅かにみられる	風化が激しくガラス光沢は鈍い	なめらか
H T J - 5	黒色不透明	全体に細かい裂開がわずかにみられる	微細な気泡が全体にすこし散在する	ガラス光沢に富む	なめらか

K J Y	淡黒色不透明	全体に細かい裂開が多くみられる	1mm程度の白色粒子が全体にみられ僅かに1mm程度の球顆が含まれる	ガラス光沢は鈍い	すりガラス状
WAD-1	薄い煙色透明	縞などなし	なし	ガラス光沢が鋭い	不明
WAD-2 (石巣)	薄煙色透明	微細な気泡が全体に細かい縞をつくる	微細な気泡が全体に散在する	ガラス光沢に富む	不明
WAD-3	薄煙色透明	黒色の縞が一部にみられる	なし	ガラス光沢に富む	不明
KRM-1	黒色半透明～薄煙色透明	薄煙色透明部に灰色微粒子の縞が少しみられる	黒色微粒子が全体にわずかに散在	ガラス光沢に富む	不明
KRM-2	黒色半透明	黒色微粒子が縞状に全体に多く散在する	5mm程度の球顆が一部にみられる。	ガラス光沢に富む	不明
KRM-3	黒色半透明	全体に黒色の縞が多くみられ細かい裂開がすこしみられる	2mm程度の球顆が一部にみられる	ガラス光沢は鈍い	不明
KRM-4	黒色透明～半透明	黒色微粒子が縞状に全体に多く散在する	なし	ガラス光沢に富む	不明
KRM-5	黒色透明	黒色微粒子が縞状に全体に多く散在する	なし	ガラス光沢が鋭い	不明
KRM-6	煙色透明	白灰色の縞が全体にみられる	1mm程度の球顆をわずかに含む	ガラス光沢に富む	不明
KRM-7	薄煙色透明	こげ茶色～黒色の縞が全体にみられる	なし	ガラス光沢は鋭い	不明
KRM-8	薄煙色透明	縞などなし	なし	ガラス光沢は鋭い	不明
KRM-9 (G22-2BB 0)	薄煙色透明	白色の縞が全体にみられる	1mm程度の球顆をわずかに含む	ガラス光沢に富む	不明
KRM-10 (BB II)	薄煙色透明	白色の縞が全体にみられる	なし	ガラス光沢に富む	

TTS-1A (YLU)	薄煙色透明	灰黒色の微細な縞が一部にみられる	全体に微細な気泡や1mm程度の球顆が少し散在する。	ガラス光沢に富む	不明
TTS-1B (BBII)	薄煙色半透明～透明	黒灰色の縞が一部にみられ、それに沿つて微細な気泡が細やかな縞をつくる	全体に微細な気泡や1mm程度の球顆が散在する	ガラス光沢に富む	すりガラス状
HKNA-1	淡黒色半透明	全体に細かい裂開が多くみられる	2mm程度の白色粒子が全体に散在する	ガラス光沢に富む	なめらか
HKENA-2 (S54石墨)	淡黒色不透明	全体に細かい気泡がみられる	1mm程度の白色粒子をわずかに含む	ガラス光沢に富む	不明

第V章 休場層で検出された遺構と遺物

1 概要

旧石器時代層とされる層は休場層上層（以下 YLU と呼称）、中層（以下 YLM）、下層（以下 YLL）、その下層に休場層直下黒色帯（以下 BB 0）、第Ⅰスコリア帯（以下 SC 1）、第Ⅱ黒色帯（BB 1）全国的な広域火山灰である AT を含むニセローム（以下 NL）、第Ⅱ黒色帯（以下 BB Ⅱ）、第Ⅲスコリア帯（以下 SC Ⅲ）第Ⅳ黒色帯（以下 BB Ⅲ）と続き、ローム質土からスコリア帯への変化を見せる。当調査区域では、地形によって制約を受けた堆積状況を示し、層準通り堆積している地点と崩落を起こし、ブロック状に土壤が散在している地点がある。

当該時期は地形的に安定しておらず、人的痕跡も乏しいのが実状である。遺構としては土坑のみである。それも時期は不明確であり、後期旧石器時代末から縄文時代草創期の幅で遺構を捉えたい。また BB Ⅱ層で礫群を検出している。自然礫が散在している状況で、周囲を拡張して調査を進めたが、半径 3 m 以内の礫群以外は検出できなかった。当調査区域における最も最下層の遺構はこの礫群である。なお A 地点ではその時期の貞岩ブロックを検出している。

遺物は YLU に集中し、ナイフ形石器 2 点、貞岩製の石刃 2 点を検出したにとどまった。

2 遺構

土坑 1（第92図-1）

H-25グリッドで検出された。平面はほぼ円形を描き、直径約 1 m、深さ約 40cm を計測する。検出層は BB 0 層で黒色硬質土の特徴をもつ同層のなかで、休場層相当の黄色褐色ローム層が落ち込んでいたことから認識できたものである。他の土坑と比べ、覆土に黒色ローム質土である FB 層土壤が含まれていないことから、時期を YL 層該当時期、旧石器時代後期末までさかのぼることも可能であるが、調査区内では、その時期の遺構や遺物は希薄である。東尾根に所在する下原遺跡で検出された縄文時代草創期の土坑と類似した特徴をもつことから同時期とみることも可能である。付近では有舌尖頭器が出土している。

土坑 2（第92図-2）

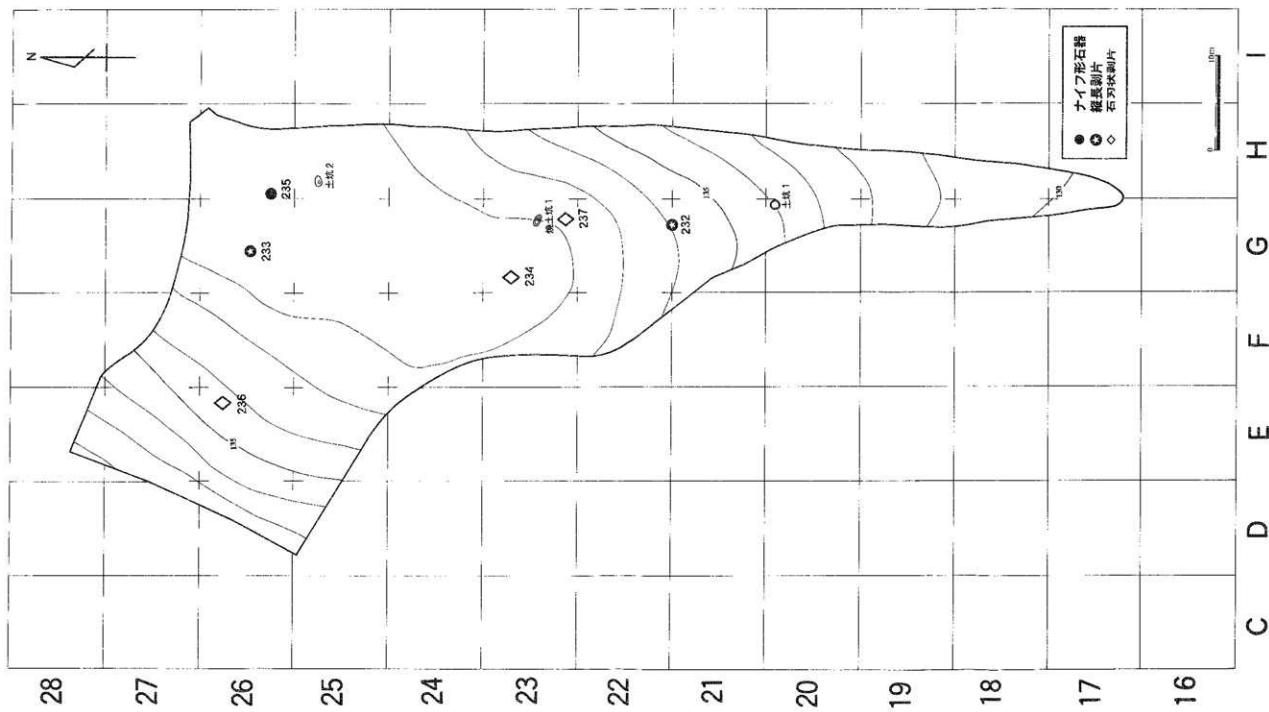
土坑 3 と同じく H-25グリッドで検出された。平面や横円形を呈し、長辺約 1 m、短辺約 50cm、深さ約 40cm を計測する。土坑 3 と同じ検出状況を示し、覆土も上層に休場層相当の土壤が入っている。

焼土坑 1（第92図-1）

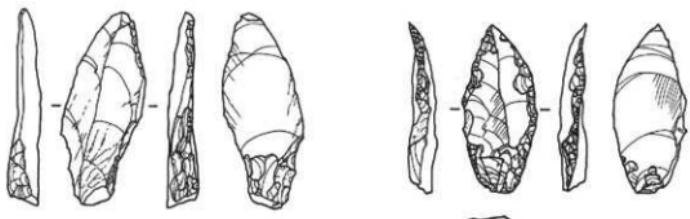
調査区ほぼ中央の G-23グリッドで検出された。平面はやや不定形な横円形を呈し、長辺約 1.2m、短辺約 50cm、深さ約 25cm を計測する。覆土は中層に橙色に変色した硬質土ブロックを含み、最下層に黑色炭を含んでいる。下端である BB 0 が黒色化している、などの点から炉などに使用されたものと推測できる。最上層に休場層相当のローム層が被覆していることから、土坑 3・4 と同時期と見られる。

3 遺物（第89図232～237）

ナイフ形石器 1 点、縦長剥片 2 点、石刃状剥片 3 点出土。

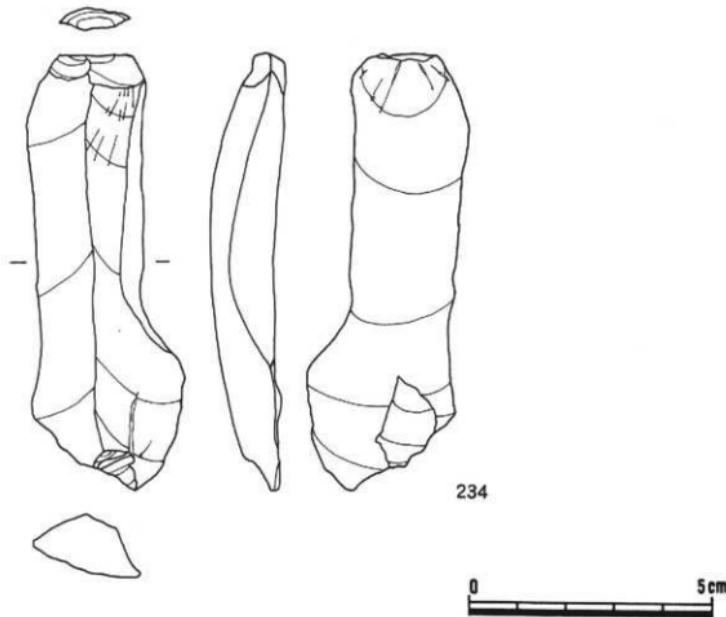


第89図 YL層遺構・遺物全休図



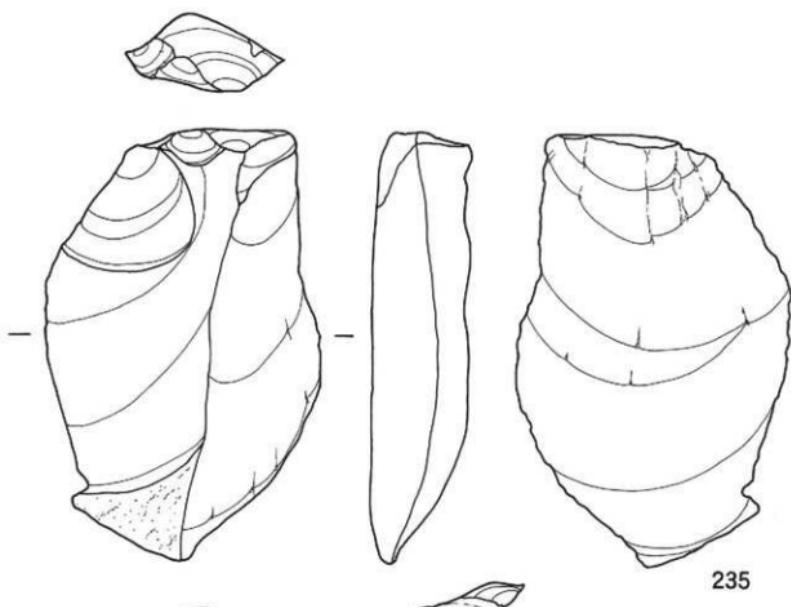
232

233

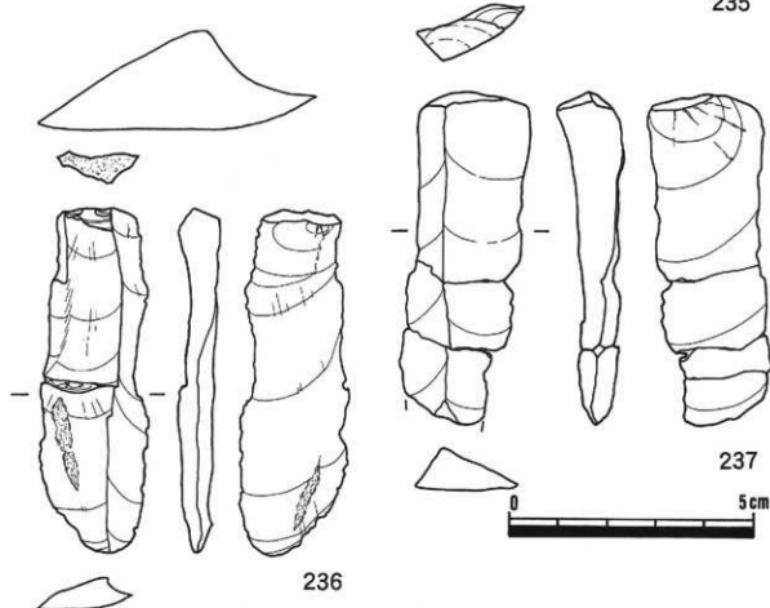


234

第90図 石器実測図34

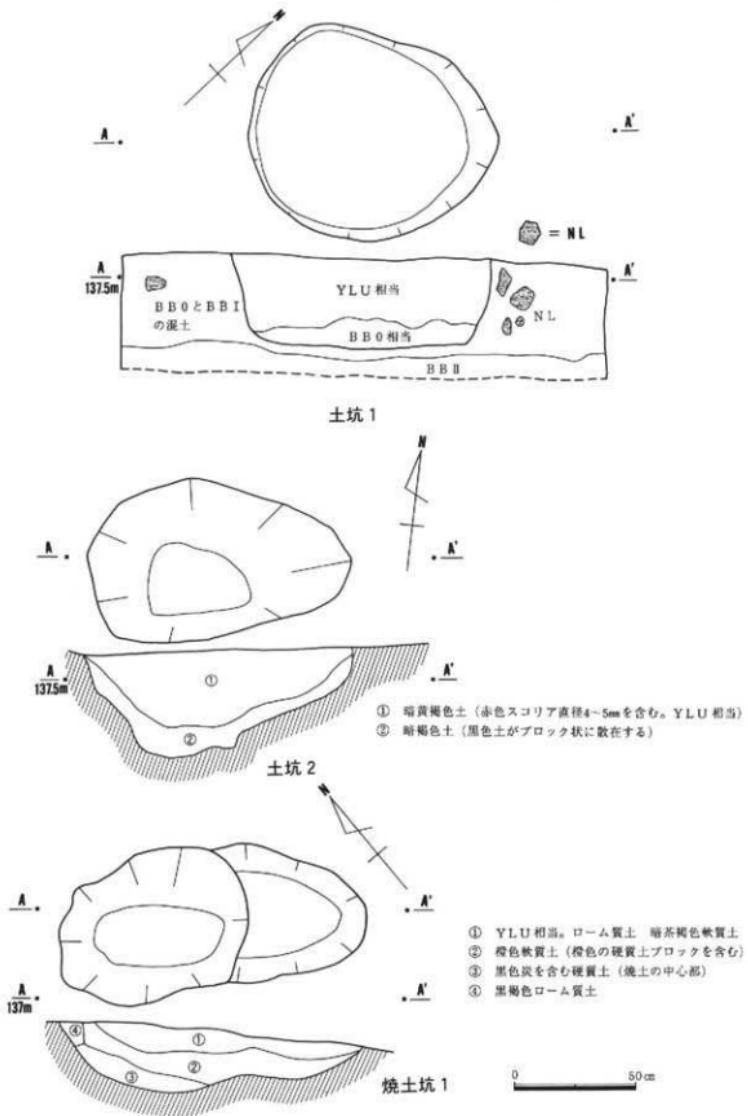


235



237

第91圖 石器實測圖35



第92図 土坑・焼土坑実測図

第VI章 調査の成果と課題

道路状遺構

箱根西麓は近世の徳川幕府による石壁を敷いた東海道が今に残されていることで有名である。それより以前のルートは古代は足柄路、中世については箱根路を想定しているが、実際に両者のルートを特定できた例は少ない。今回検出された遺構は道路である以外に説明のしようがなく、想定するルートにも合致する。考古学的手法によって明らかにされたのは元山中遺跡について2例目となった。しかしながら中世史における道路行政の在り方の解明はまだ緒についたばかりで、その道路の建設・維持・管理にどのような力が働いたかについては今後の課題であろう。中世の東海道と言いつけるにはまだ解明すべき点が多く残されている。考古学・歴史学両面からアプローチしていきたい。

縄文時代の遺構と遺物

焼場遺跡の立地する尾根は市街地からほぼ真北を指向する。箱根山から派生する尾根自体は非常に規模が大きいものであるが、標高が下がるにつれて小谷が刻まれ、さながら木の枝の様相を呈する。その一角に遺跡が残される場合、当時の環境と立地を抜きにしては考えられない。当遺跡は縄文時代早期末から前期にかけて活動の中心があった。ことに前期は縄文海進が進み、現在の三島市街地が海であった可能性が高い。そうした時期に箱根山麓は狩猟・採集にまさにうってつけの環境であったことが想像される。

立地する尾根の調査事例は十石洞遺跡以外にはなく、空白地域であった。A・B地点の調査によって、この尾根において豊かな生活を享受していた縄文時代の生活が甦った。それは出土した遺物の量に見いだせる。狩猟具・加工工具・工作具と石器はバラエティーに富んでいる。当然ながら、その石器を加工する骨製品や木製品の使用も想起されよう。石皿や磨石、凹石の出土量がA・B地点全体で200点を超えることから、堅果等の加工場であった可能性も指摘できる。土器は早期後半の茅山下層式・野島式を中心とする関東系の土器の出土量が多い。A地点では愛知系の土器も混在しているのに比して、形式が一定している。今後も早期後半を中心とする遺跡の調査事例が増すにつれて、集団性の違いも論議されよう。

旧石器時代

この時代の自然環境は厳しく、地形的に安定していなかったことが、土層観察から判明した。僅かに休場層からナイフ形石器、土坑が検出された。東尾根の下原遺跡ではこの時期の良好な石器ブロックが多く検出されていることから、人跡が及んでいることは確実である。しかしながらブロックを形成することはなく、散布しているにすぎない。この状況はA地点でも同様である。

下層ではBB II層で礫群を検出しているが、焼けたものは少なく、用途は不明である。土層が乱れている箇所でもあり、混入の疑いも捨てきれないが、比較的大きな礫であることから当該時期の遺構と捉えたい。A地点ではこの時期に頁岩のブロックを検出していることから、狩猟などの活動が行われていたのであろう。同じくA地点ではBB III層で陥穴を検出している。それゆえ休場層以下のテストピット調査では検出面であるSC III層まで調査を手がけたが、崩落箇所が多く、検出には至らなかった。

五百司遺跡

はじめに

五百司遺跡は、焼場遺跡B地点の北側の谷を挟んで対峙する。資料整理は同時並行で行った。そのような事情から、本報告書では「調査に至る経過」および「遺跡の位置と歴史的環境」については焼場遺跡B地点の項に譲り、第Ⅰ章を調査の経過として報告をすることにした。

第Ⅰ章 調査の経過

1 現地調査の方法

平成3年に始まった一連の東駿河湾県状道路に伴う確認調査（第一次調査）の共通理解は次の通りである。

愛鷹・箱根山麓は、県内においても特に各時期の遺跡が集中して存在する地域であり、かつ、旧石器遺跡の全国的集中地域でもあることから、遺跡の概略を把握するためには広範囲に深く試掘坑を設定する必要がある。遺跡の範囲確認には、調査精度の片寄りをなくすため、地形上居住可能な範囲に10m方眼のメッシュを掛け、そのメッシュの20m間隔に試掘坑を設定した。また地形上20m間隔では広すぎる地区に関しては10m間隔で設定した。

現在のところ、この地域でもっとも古い文化は中部ローム層直上の第VII黒色帶中にある。この地層は箱根山麓で約3～4m、愛鷹山麓で約4mの深さにある。それゆえ試掘深度もそれ以上に設定する必要がある。

試掘坑は、遺構の把握および本調査への影響を考えて2m×2mの方形とし、深さは通常2mとするが、旧石器時代の古い文化層が想定される場所に関しては、4m×4mに中段の犬走りを設けて4mの深さの拡張試掘坑を設定する。

五百司遺跡についてもこの点を踏襲し、計11の試掘坑を設定し、調査に臨むこととした。10m間隔のグリッドは国家座標に基づいて設定した。

2 資料整理の方法

本格的調査が終了した時点で、遺物の注記および基礎的な図面整理を終了させておき、南尾根に立地する焼場遺跡B地点の調査が終了したところで本格的な資料整理を開始することとした。両遺跡の現地調査担当者が同じであったことと、両遺跡が関連性を持っている可能性があったためである。

資料整理は基本的に焼場遺跡B地点と同様であるが、遺構・遺物の頻度が低いこともあり、人の手を多用し、コンピュータ等の情報機器の使用はあまり機会がなかった。資料に整理方法および保管方法は焼場遺跡B地点の項を参照されたい。

3 現地調査の経過

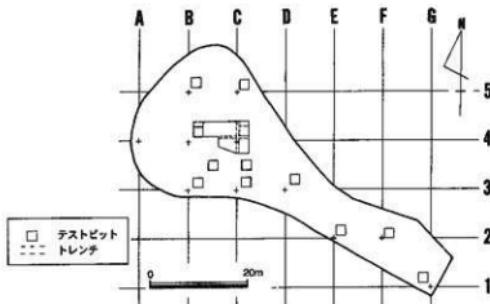
平成5年度は五百司遺跡を含む計4ヶ所の第一次調査及び下原遺跡の本格的調査を組んでいたので、それぞれの調査方法や現地の実状に合わせて1年間の工程を組んだ。8月より開始した下原遺跡の本格調査も、平成6年の冬には一定の成果をあげてきており、補助員の割り振りにも余裕が出たので、五百司遺跡の調査準備に入った。

総面積1,140m²は急峻な谷の頂部に位置するやせ尾根部とその延長に小さな独立丘からなる。両地点と

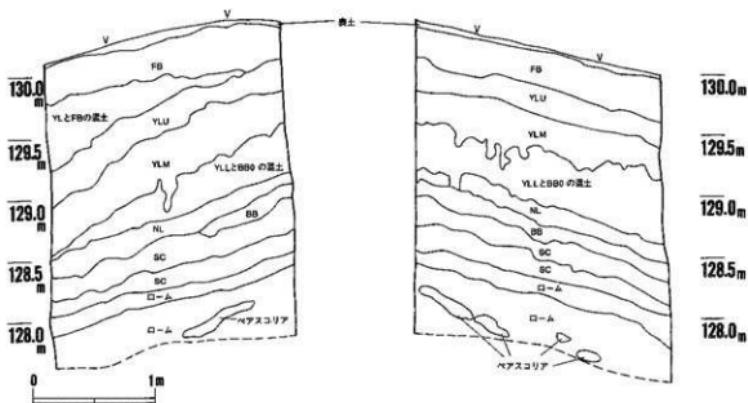
も、現況が雑木林ということで、伐採作業を行った後、10m間隔のグリッドを設定した。原則として、2m×2mの試掘坑を南北隅に設定した。

平成6年2月10日より試掘坑の掘削に入った。男性補助員10名の構成だったので、各試掘坑に3～4名の配置で掘削を行った。前半でやせ尾根の斜面部を調査したが、崩落がおきており、明橙色の三島バミスが確認できたため、崩落は中部ロームから始まっており、上部ローム層の堆積も十分ではないことが判明したため、土層堆積状況の実測を行い埋め戻して調査を終了した。

独立丘は裾部と頂部に分かれるが、試掘坑を掘削したところ頂部よりやや西寄りで土器片が、頂部や西北寄りで集石とみられる遺構が出土した。その時点で第1次調査を終了するところであるが、その他試掘坑からは旧石器時代の遺物が検出されないこと、土層観察から遺物・遺構ともFB層から検出されたが、その分布範囲は独立丘の頂部に限られることから、継続して、本格的調査に移行し、集縛遺構および土器片が出土した両試掘坑を繋ぐかたちで周囲を拡張し、FB層の全域を調査した。3月上旬に埋め戻しを完了し、現地を撤収することができた。



第93図 グリッド配置図



第94図 基本土層図



第95図 燒場遺跡B地点・五百司遺跡周辺地形図

第Ⅱ章 遺跡の概要

1 基本土層

五百石遺跡の基本的土層は独立丘中央に求められる。表土より下層で愛鷹・箱根西麓で標準とされる土層堆積の観察をみたからである。やせ尾根部では4万年前後とされる三島バミスの検出をみている。こうした事情から中部ロームから崩落を起こしていることが判明、やせ尾根部の遺跡の可能性は低くなつた。

独立丘には表上下よりFB層が認められ、下層の堆積状況も良好であった。周囲の谷部の傾斜もやせ尾根部に比べると緩やかであることから、崩落を免れ残存したものと考えられる。

しかし、FB層および下層の各黒色帶の黒色の発達は不明瞭であり、その原因も明らかにはならない。焼場遺跡B地点での土層の所見でもその傾向は見受けられる。

黒色帶は静岡大学名誉教授の加藤芳朗先生によれば埋没腐植層と呼ばれ、一時的に火山からの噴出物の供給がやんだ際に、植物等の繁茂・枯死を繰り返すことにより腐植物質の沈殿によって起るとされている。されば、当調査区および焼場遺跡B地点の地形的環境から、植物の繁茂が顕著ではなかったとみるより他はない。

以上の特徴を踏まえ、簡単に堆積状況の概略を述べることとする。

2 表 土

厚さ約10~20cmで腐植物で構成される。色調は暗黒色である。場所によって2層に分層できる。

3 FB層

本調査区における遺物包含層の中心である。A地点とは異なり、黒色の発達が弱く、特に中央部では下層の休場層と分層が困難な程である。最も休場層のローム質土とは同じ供給源であり、質も同等であることから、色調の違いが分層の目当てとなる層である。黒色が発達しない理由が数々考えられると思う。

4 休場層

調査区全域で見られるが、中央部は圧縮され厚さも約5cmである。南側の堆積もさほどではないが、西側は厚く堆積しており、20cmを計測する。明茶色土でスコリアなどの噴出物をほとんど含まない。特徴的な鹿子状の明褐色土ブロックは観察できない。

5 BB I層

黒色の発達も弱く、斜面では発達しないことが示唆される。全体的に圧縮されている。

第三章 富士黒土層で検出された遺構と遺物

1 概 略

独立丘のFB層の残存範囲はわずかである。設定した試掘坑から遺構・遺物が出土したことから、遺跡の範囲調査により確定したものである。

狭い範囲に、少数の遺構・遺物の検出をみたことになる。

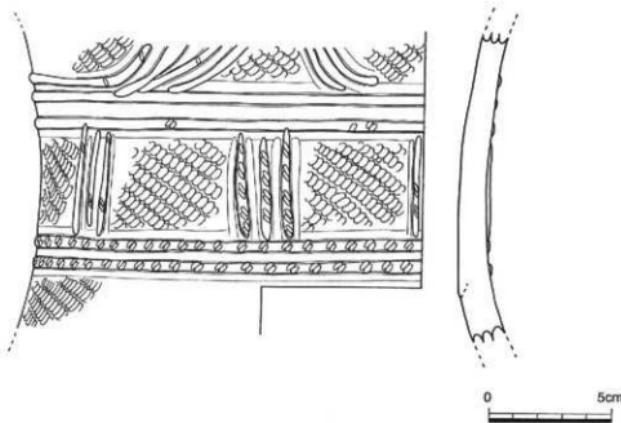
2 集礫遺構

テストピットを掘削中に検出したもので周囲を拡張して、集礫遺構全域を調査したものである。検出直後は配置が特徴的である印象を受けたため、炉ではないかと推測したが、炉床が見あたらず、炭化物も検出されなかった。正確な用途は不明であるが、焼けた礫も含まれていることから、なんらかの燃焼行為が行われたことは確実である。炉で使用した石を1箇所に集めたものであろうか。検出した礫はほとんどが安山岩で大きさは最大で10cm程度である。

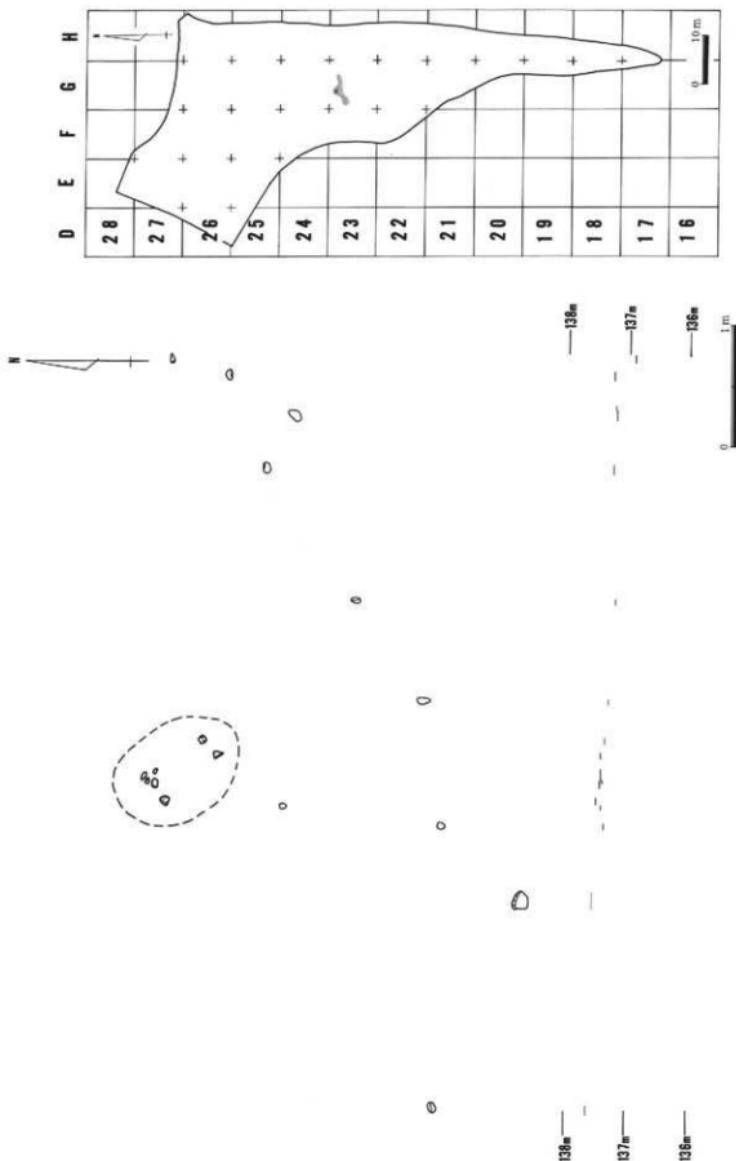
3 出土遺物

調査範囲の狭い遺跡であるため、遺物の出土量が極めて少なく、遺構を判断する材料に乏しい中であったが、年代を示すことのできる良好な土器片が出土した。図96に示した土器片は3つに分解されているが、接合した結果、その特徴を掴むことができたものである。

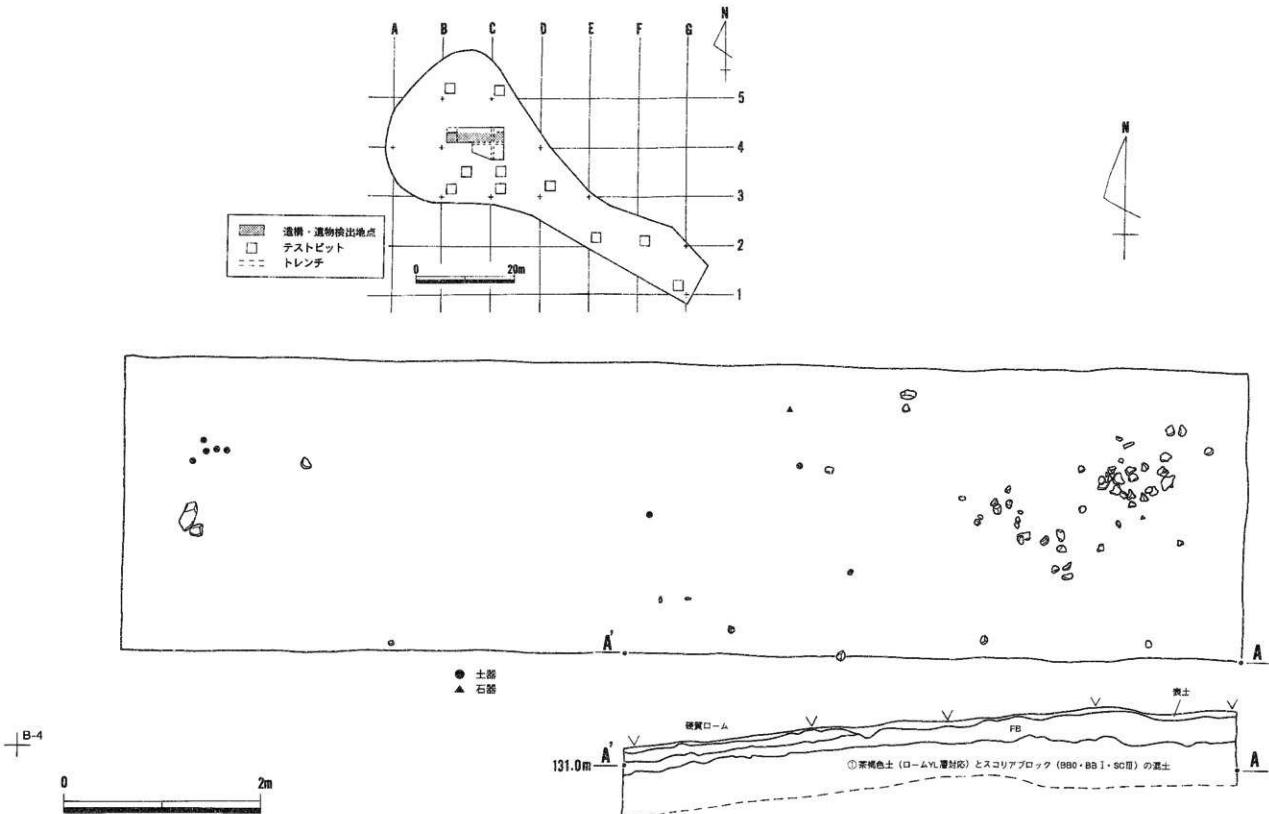
胴部とみられ、口縁部は出土しなかったが、特徴的な隆線などから諸穂式とみられ、遺跡の年代を縄文時代前期に比定できる資料である。胴部の口径は約15cmを計測する。胎土は明褐色を呈し、焼成は良好である。他に頗るな遺物をみないことから、集礫遺構も同時期と考えている。



第96図 土器実測図



第97图 BB II 建筑群出土状况图



第98図 遺構・遺物検出状況図

第IV章 調査の成果と課題

台地から派生するやせ尾根は箱根西麓では、深く浸食されており、狭い尾根と独立丘の調査となった。しかし、縄文時代の人々はここにも痕跡を残していた。

焼場遺跡B地点を隔てる谷地形は土層の観察から上部ロームより浸食されはじめ、縄文時代前期にはすでに完成された地形と思われる。縄文時代人の行動からすれば、一時的になんらかの目的をもって、この尾根に到着し、遺構を残したことになる。いかにして石を集めたのか、おそらくは、谷底にあった小河川から集めたものであろう。貯蔵に使用しようと考えたのか土器を一つ携えていた。終日人々はこの尾根を探索し、果実を採取し、小動物を狩り、石を焼いて何らかの調理をしたであろう。夜を明かしたかもしれない。アクシデントが生じたとすれば、土器の破壊であろう。出土した上器は胴部の下部と思われる、従ってほとんど使用不可能な状態であったであろう。投棄した上器のほとんどは谷をころがり行方しれずとなり、わずかに3片が彼らの行動範囲に止まったのではないだろうか。その後、一度も足を踏み入れることなく、土に埋もれ、林に埋もれ遺跡となった。

以上が調査者の想像した彼らの行動およびその後である。もとより、調査の科学性に基づいたものであることに違いはないが、遺構・遺物の検出量の乏しさからある程度の想像はお許しいただきたい。

土器片から縄文時代前期の諸礎式ということが分かり、関東との接点も見えてくる。集石もその時期とみて問題はないだろう。

縄文時代早期～前期の遺跡数が大変多いことは、いままでも触れたとおりであるが、狩猟・採集のこの時代に箱根西麓はうつつけの環境であったことが想像できる。こうした狭い地域にも遺跡が存在することが当地域の遺跡の多様性を物語っているといえよう。

しかしながら、彼らの行動範囲の全域をつかんだ訳ではなく、拠点となる集落との検討が必要になる。縄文時代前期は海進がすすみ、温暖な気候であったことが知られている。今後多くの資料が集積されていくことであろう。そのとき、わずかな遺構・遺物の出土量であってもこの地が遺跡であることの存在理由をここに残しておくことがなにより重要と考えた。遺跡の価値はその大小や内容もさることながら、存在していることを永久に記録することと心得え、まとめとする。

写真図版



写真図版1 表土 施工状況



写真図版2 表土 施工状況



写真図版3 表土 道路状造構検出状況（北より）



写真図版4 表土 溝状造構完掘状況(1)(南より)



写真図版5 表土 溝状造構完掘状況(2)(北より)



写真図版6 表土 F-24グリッド道路状遺構検出状況



写真図版7 表土 F-24グリッド道路状遺構の硬質土を除去した状況 溝状遺構が検出された



写真図版8 表土 F-22・23グリッド溝状遺構完掘状況(1)（南より）



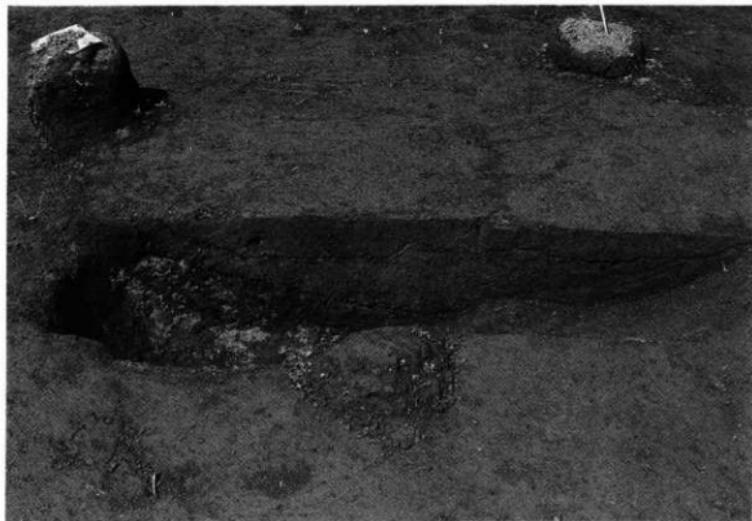
写真図版9 表土 F-23グリッド溝状遺構完掘状況(2)（上空より）



写真図版10 FB層 G-24・25グリッド遺物出土状況（南より）



写真図版11 FB層 H-24グリッド遺物出土状況（北より）



写真図版12 FB層 焼土坑半裁状況（南より）



写真図版13 FB層 土坑完掘状況（西より）



写真図版14 FB層 石器製作跡 碎片出土状況



写真図版15 FB層 集石遺構検出状況（南より）



写真図版16 BB II層 G-23グリッド礫群出土状況（南より）



写真図版17 調査完了状況（東より）



写真図版18 五百司遺跡全景（東より）



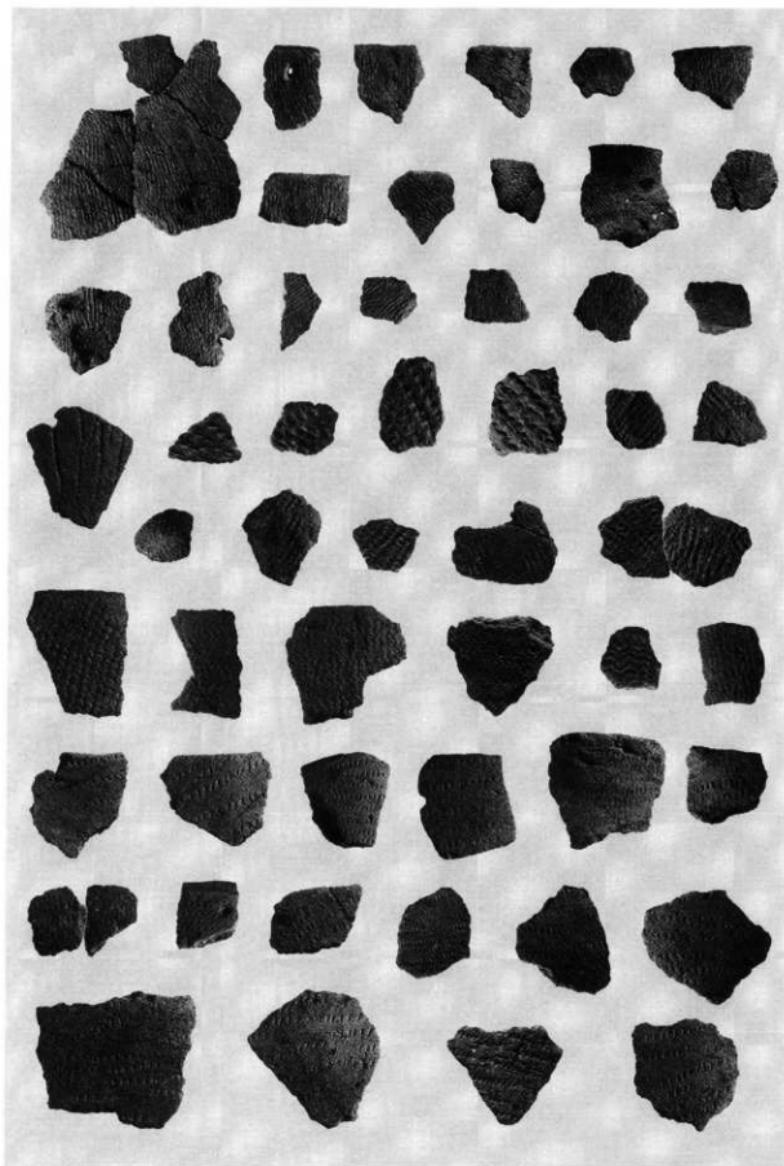
写真図版19 諸磚式土器出土状況



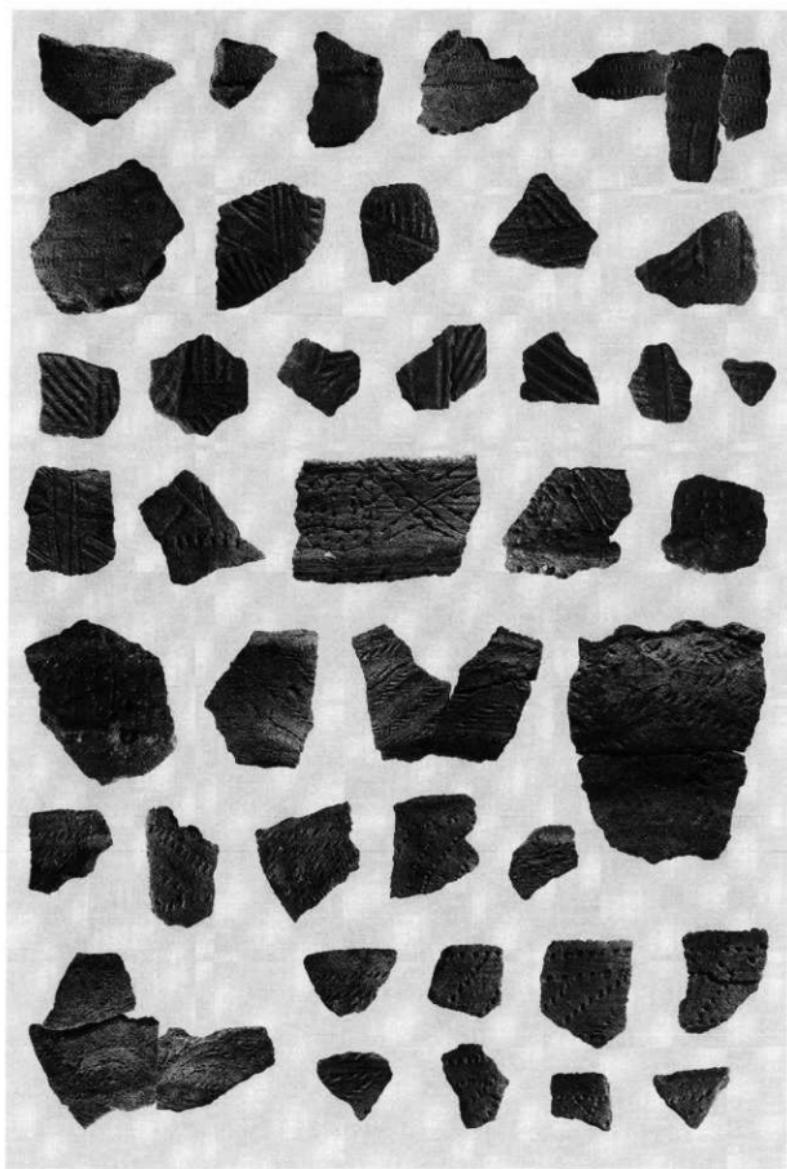
写真図版20 集石遺構検出状況（東より）



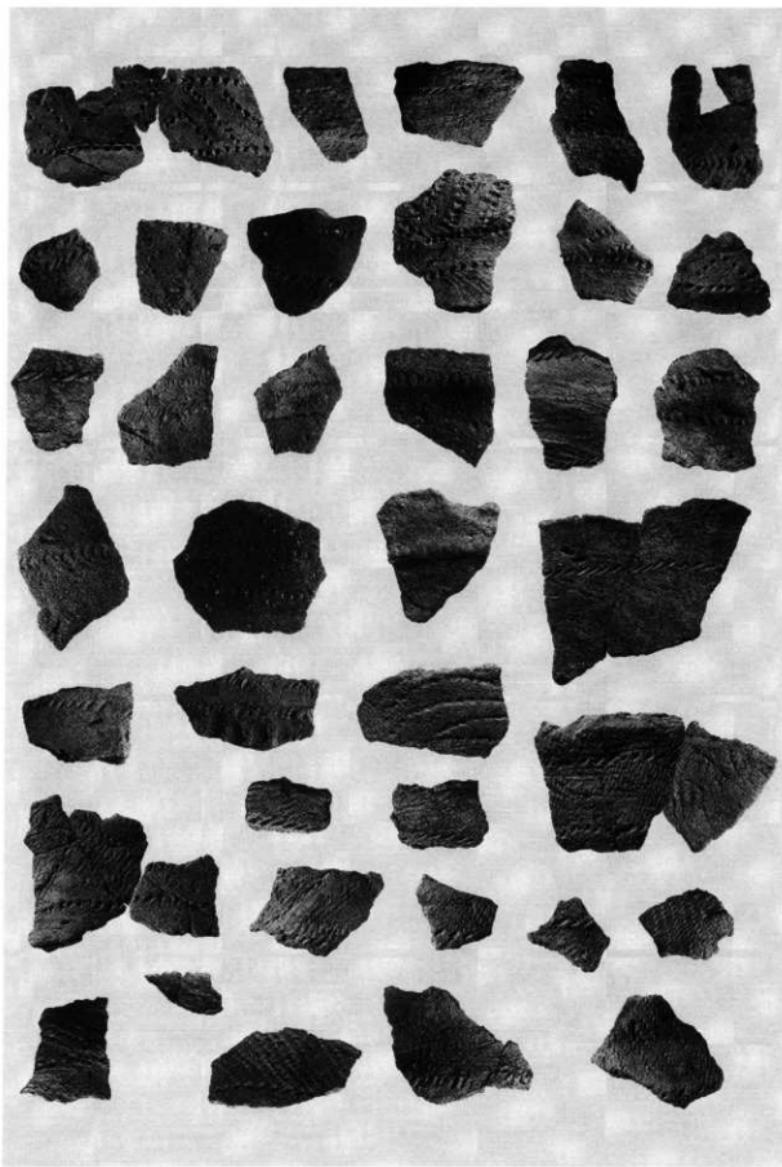
写真図版21 基本土層



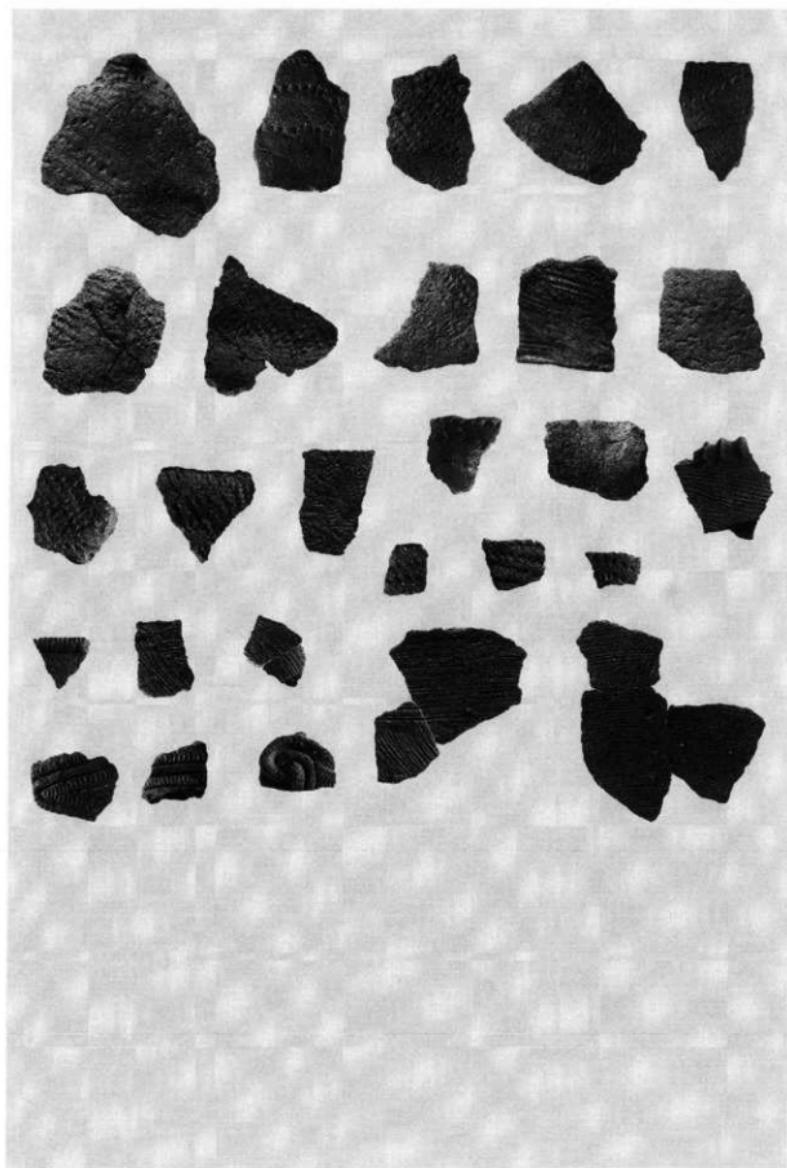
写真図版22 縄文式土器 1



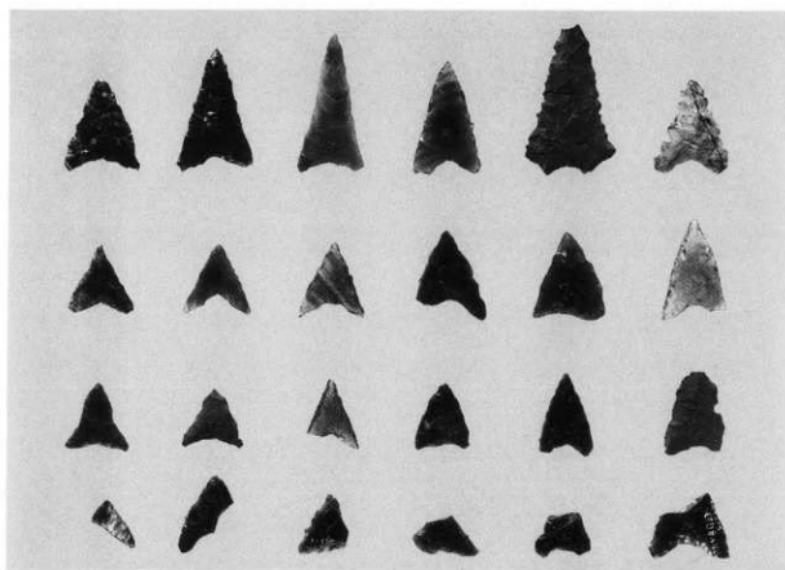
写真図版23 繩文式土器 2



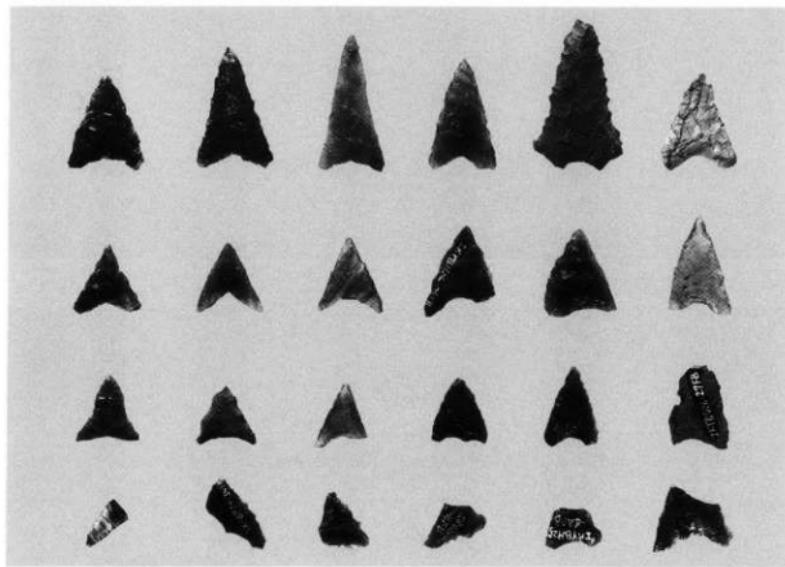
写真図版24 縄文式土器 3



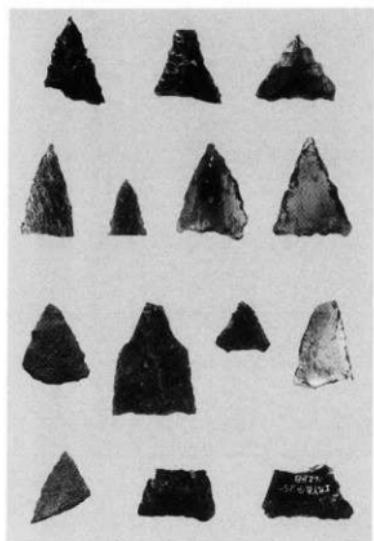
写真図版25 繩文式土器 4



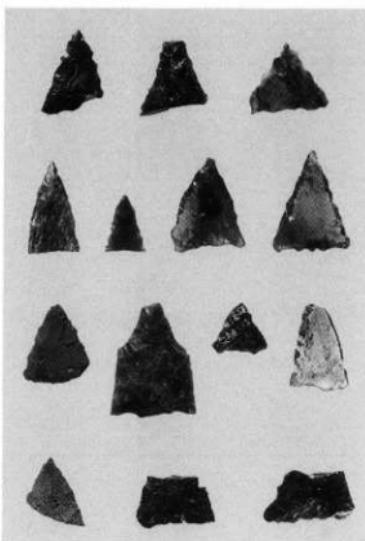
写真図版26 石鏃 1 (表)



写真図版27 石鏃 1 (裏)



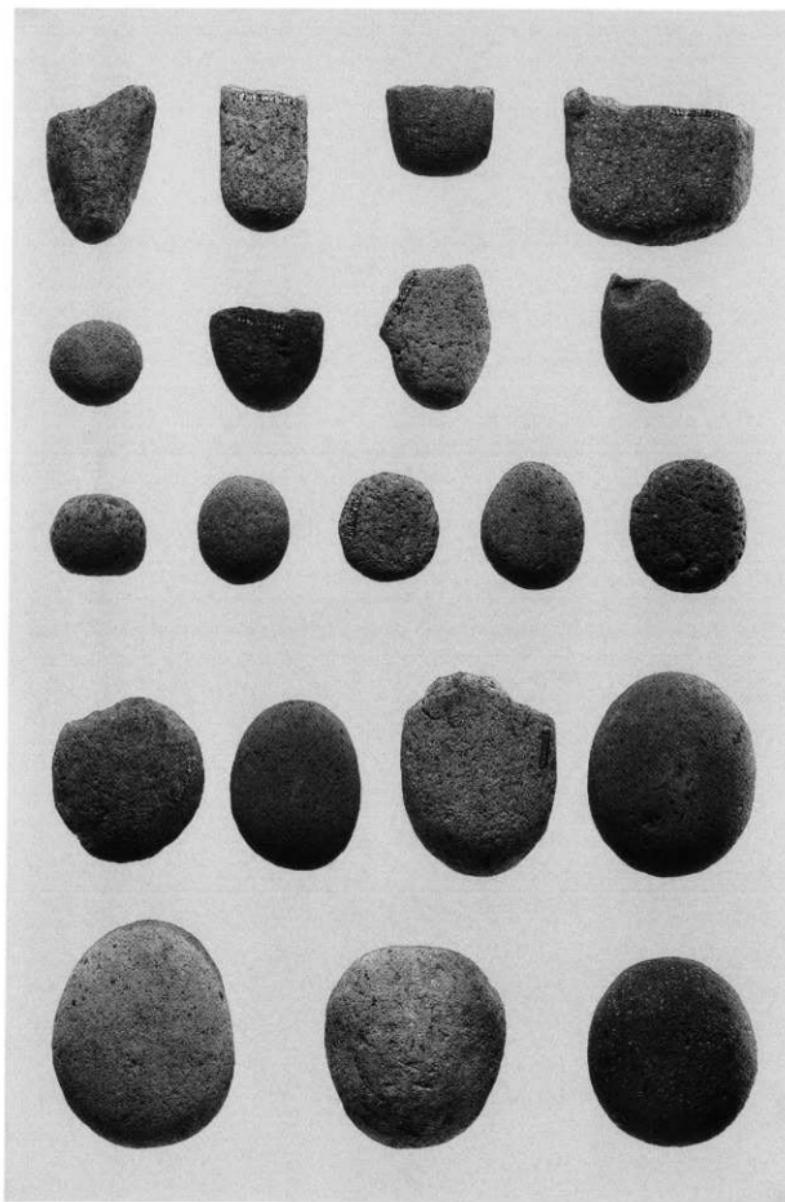
写真図版28 石鏃2(表)



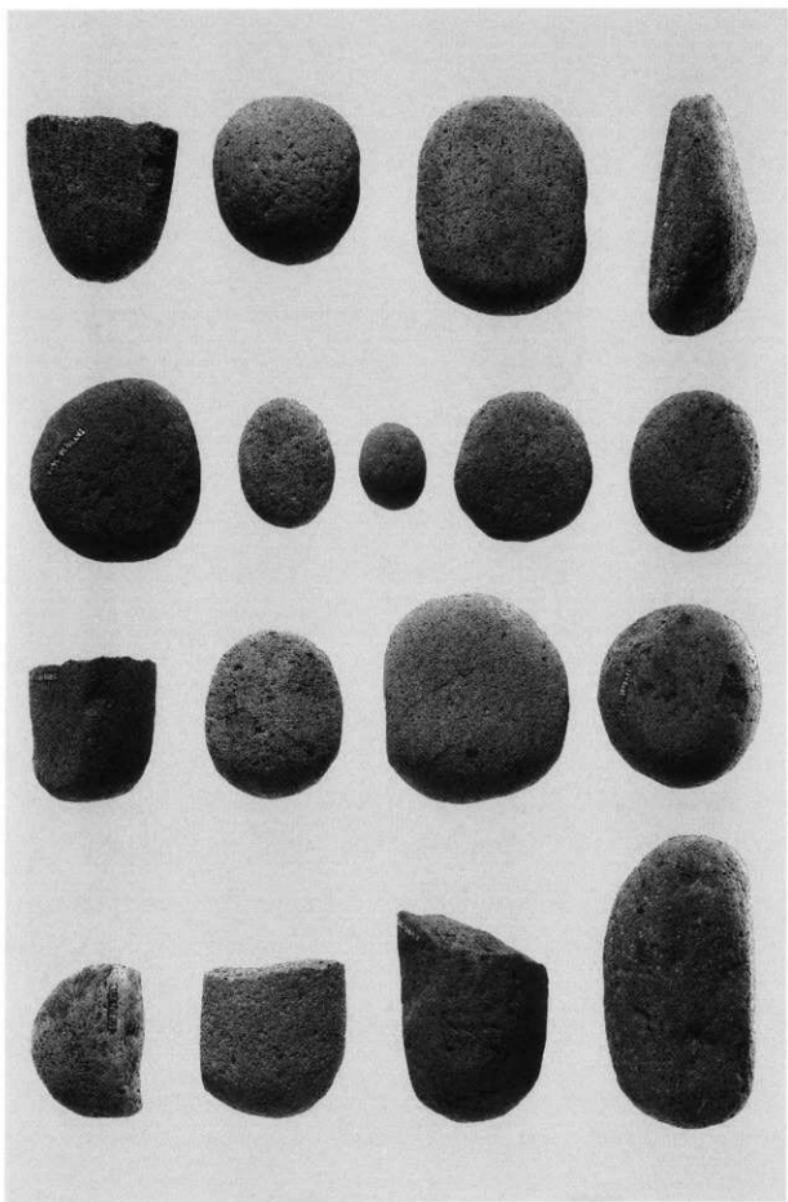
写真図版29 石鏃2(裏)



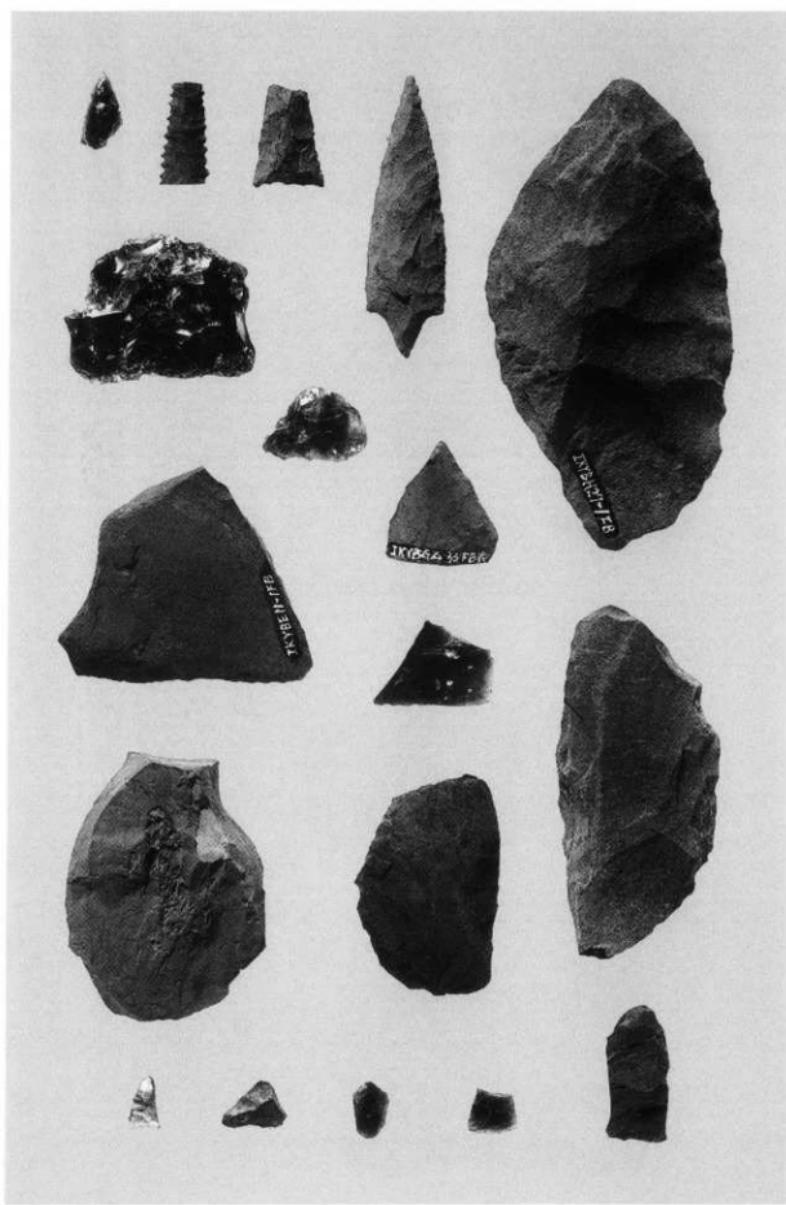
写真図版30 ホルンフェルス



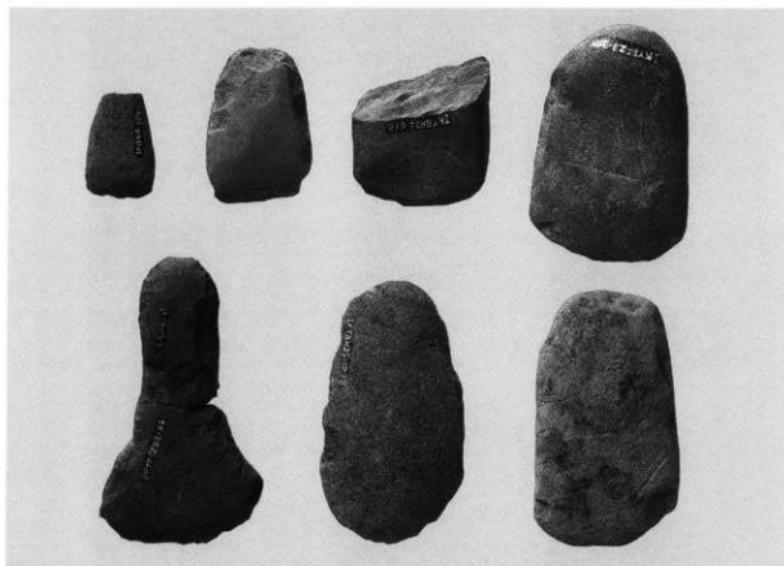
写真図版31 敲 石



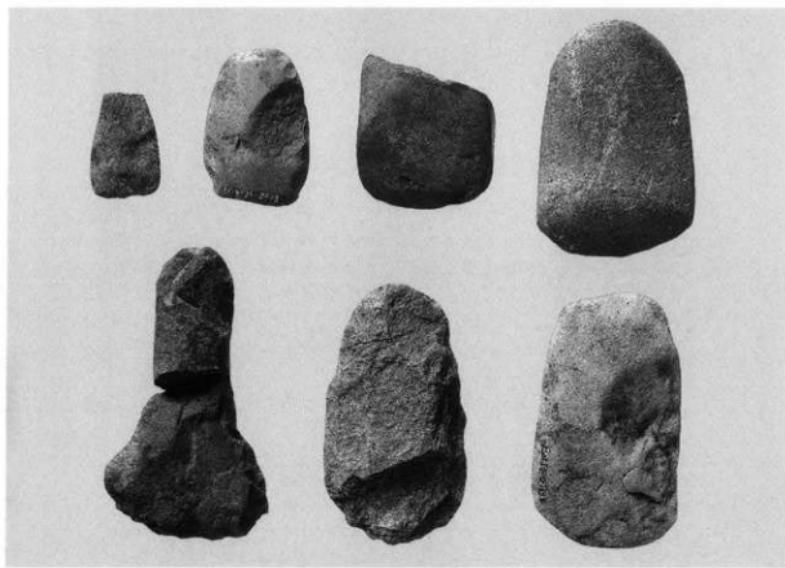
写真図版32 磨石



写真図版33 有舌尖頭器・ピエス



写真図版34 打製石斧・磨製石斧（表）



写真図版35 打製石斧・磨製石斧（裏）

焼場遺跡B地点発掘調査参加者一覧

秋元 慧子	阿部 晴美	荒木 三郎	池田波津代	石渡 陽子	上杉 俊夫
榎本喜代美	小川とし江	小野 ナツ	岸本 義明	久保田親則	後藤 俊江
佐々木美枝子	島村 栄一	下山 貢	杉山ミサ江	杉山 佳久	鈴木 八郎
須田 守男	関沼美代子	瀬戸 茂	芹沢 志江	千賀いく子	高橋 敏子
武士 晴信	土屋 義晴	椿 孝江	中村 秋江	西堀 孝次	姥妙 洋子
東 しづ子	福井 善徳	福島 孝	福地 幸子	舟山八代江	牧野 富子
町山彥三郎	溝口 若菜	皆口日出子	宮崎 京子	宮沢 鶴雄	村田 武
山田 愛子	山田 瑞子	山本 邦夫	山本 伴子	横島 幸子	横田 隆子
吉川 和枝	吉田こはる	渡辺 秋夫	渡辺 カン	渡辺 美行	

五百司遺跡発掘調査参加者一覧

広瀬 孝	桜井 富夫	鈴木富士夫	渡辺 勝藤	福島とき子	森嶋富士夫
柴田美佐子					

整理作業参加者一覧

白井なみ子	鈴木 里江	鈴木 輝美	鈴木 洋子	高田みゆき	高橋 元子
高橋 裕子	豊島智恵子	村川 裕子	山下 洋子		

写真撮影

湊 嘉秀

遺物実測・トレース

鈴木 里江 鈴木 輝美 高橋 裕子

石材鑑定

森嶋富士夫

ご指導・ご教示をいただいた方

鈴木 敏中 芦川 忠利 守屋 豊人 池谷 信之

(敬称略・五十音順)

報告書抄録

ふりがな	やきばいせきBちてん・ごひやくしいせき
書名	焼場遺跡B地点・五百司遺跡
副書名	平成5・6・7年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第73集
編著者名	伊林修一
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424 静岡県清水市江尻町18-5 TEL 0543-67-1171
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やきばいせき 焼場遺跡 Bちてん B地点	みしましかわらが 三島市川原ヶ やあざごひやくし 谷字五百司	22206	155	35度 8分 12秒	138度 56分 27秒	1995年 2月 1995年 9月	2,100m ²	道路建設 に伴う事 前調査
ごひやくしいせき 五百司遺跡	みしましかわらが 三島市川原ヶ やあざごひやくし 谷字五百司	22206	154	35度 8分 17秒	138度 56分 31秒	1994年 11月	1,140m ²	道路建設 に伴う事 前調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
焼場遺跡 B地点	散布地	中世 縄文	道状造構・溝状造構	陶器・古錢 土器・石鐵・敲石・ 磨石・石皿・尖頭器	
五百司遺跡	散布地	縄文	集疊造構	縄文土器	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第73集

焼場遺跡B地点

五百司遺跡

平成5・6・7年度東駿河湾県状造路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
TEL (0543) 67-1171㈹

印刷所 みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL (0559) 21 1839㈹